
ミネルバの翼

沢渡優希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミネルバの翼

【Nコード】

N9471L

【作者名】

沢渡優希

【あらすじ】

人は優しさも、温かい心も失ってしまったのか。

答えを出せない問いを胸に、荒れ果てた大地に一人立つリスティが出会ったのは。

人型の戦闘兵器「装甲兵」の女性パイロット、美鈴だった。

大規模な自然災害、終わる事のない戦争により荒廃した世界。

そんな世界の空を駆ける、美鈴の愛機「ブレイバー」

そして謎めく巨大な海上都市「ヴィラノーヴァ」が世界を睥睨する。見つからぬ答えを探して、リスティと美鈴の旅が今、始まります。

プロローグ(前書き)

> i 1 6 7 1 6
— 1 5 6
<

ブローグ

操縦桿を通じて、フライトユニットの両翼が風を切る様子が、容易に想像出来る。

編隊を組んで飛行するのは、「装甲兵」と呼ばれる人型の戦闘兵器。

そのコクピット内は、美鈴めいりんにとって心地良い空間だ。

メインモニターに映し出されている、果てなく続く荒野の映像と、地図情報を照合する作業に神経を集中していた美鈴は、ふと明滅している赤いランプに気付いた。

「秘匿通信……？」

微かに眉根を寄せる。

後方を飛行している、メノアが搭乗している機体からの発信だった。

回線を開くことに少し躊躇した美鈴だったが、ひとつ溜息をつくと通信回線を開くスイッチを入れた。

「メノア、何か問題でも発生したの？ 任務中よ、内緒話なんて感心しないわね」

『す、すみません……少尉』

メノアの消え入るような声に、美鈴は受信音量を上げた。

彼女は、部隊で最年少のパイロットだ。

真面目で大人しい娘で、規律違反など犯したこともない。

『少尉……この戦いは、いつまで続くのでしょうか』

メノアの切実な問い掛けに、美鈴は彼女に返してやれる明確な答えを持ってはいない。

「信じなさい、終わりのない夜なんてないわ」

『でも』

コクピット内で操縦桿を握っている小柄な少女は、不安という心を苛む感情と戦っている。

それに比べて、自分の心はなんと麻痺していることか。

少しの嫉妬を感じながらも、美鈴はメノアを突き放すことはない。黒曜石のように深く輝く瞳を、ふっと細める。

「……メノア」

『はい』

「あなた、トゥリープが好きなんでしょう？」

美鈴は前方を飛行するトゥリープ機へと目をやりながら、少し悪戯っぽい口調で言った。

『しょ、少尉つつ！』

いきなりうわずったメノアの声、思った通りだ。

格納庫でもブリーフィングルームでも、メノアの碧い瞳は、いつもトゥリープの姿を追っている。

その様子を思い出し、美鈴は赤いルージュを引いた形の良い唇に、柔らかな笑みを浮かべた。

「冷やかしたんじゃないわ。大切な事よ、その気持ちを大切にしなさい」

『少尉……』

人としての大切な気持ちを忘れなければ、何があっても大丈夫だ。そう諭す美鈴だが、酷く空虚な己の心に胸が痛んだ。

女の子にだらしなない彼に注意するようにと、メノアに念を押しかけた時、コクピット内に突如接近警報が響いた。

『二時の方向に機影、データ照合します』

通常回線へと切り替えた、索敵係であるメノアが悲鳴に近い声を上げた。

『データ照合終了。敵機接近！セラフイム十八機、一個大隊です！』
セラフイム。

天使の名を冠し、その背に純白の羽根を持つ装甲兵。しかし、それは名の通りの祝福された存在ではない、今の人類にとっては、まさに死の象徴なのだ。

『全機に告ぐ、発砲を許可。これより戦闘を開始する』

隊長機からの命令に、美鈴は素早くヘルメットのバイザーを下ろした。

また、戦いが始まる。

美鈴はライフルのエネルギー残量と、シールドの強度を確認すると、

「行くわよ、ブレイバー」

自らの命を預けた相棒たる機体へ小さく声を掛け、操縦桿を握る腕に力を込めた。

未来永劫に続く繁栄など、決してあり得はしない。

肥大化した傲慢で不遜な心は、永きに渡り小さな綻びを産み続けた。

信じること、愛すること、育むこと。

人として生きるために必要な想いは、次第に希薄になっていく。断ち切られた、心と心をつなぐ大切な連環。

……そして。

栄華を誇った虚飾の砂城は、脆くも崩れ去ったのだ。

広がる紺碧の海。

その上空では、巨大な機械人形達が激しい戦いを繰り広げている。それは、まるで神々の戦いを彷彿させるほどに苛烈な光景だ。

「メノア！」

モニターの左に見えた爆光に、美鈴は思わず叫び声を上げた。

被弾して噴煙を上げたメノア機だが、機体の推力及び揚力であるフライトユニットへ誘爆する心配はなさそうだ。

『大丈夫です、少尉……』

気丈に答えるメノアだが、無線から聞こえる微かな声は、かすれていた。

「こいつ、木偶人形の分際でっ！」

僚機を傷つけられ激高した美鈴は、なおもメノア機へと迫るセラフィムを、シールドから引き抜いた接近戦用ブレードで、真っ二つに切断した。

両断されたセラフィムが、煙を噴いて落下していく。

美鈴は屠った敵機になど目もくれず、振動で白熱化したブレードを一振りして次の敵を求めながら通信回線を開く。

「トゥリープ、メノアが被弾した。フォローにまわって！」

『了解している！』

トゥリープから、短く通信が入る。

彼の機体はセラフィムの砲火をかくぐりながら、ライフルごと右腕を失ったメノアの機体を支えた。

ルガーとアレックスの二機が、トゥリープの援護に向かう。

「少佐！」

隊長機に呼びかけながら、美鈴は敵装甲兵から目を離すことはない。

「あんな廃墟に、何があるって言うの？」

セラフィムはこちらを牽制しながら、眼下に無惨な姿をさらす壊滅した都市へと向かっていく。

『美鈴』

「はい！」

隊長機からの通信に、美鈴は自機の飛行速度を少し落として並んだ。

『間違いないな。奴らはあの廃墟に、興味をそそられる物があるらしい』

「もう地図でも照合できませんが、かなり大きな都市だったようですね」

少佐の低い声を聞きながら、情報端末を操作していた美鈴は、何の手がかりも現れない画面にため息をついた。

『トゥリープ、メノア機の様子はどうだ？』

『大丈夫です、自分がフォローします』

『よし、セラフィムを追うぞ！ ルガー、アレックスは私に続け。
トゥリープ、メノア、無理はするな。美鈴、後方の警戒を頼む』

『了解！』

五人の声が重なった。

隊長機を先頭に、僚機が廃墟へと降下していく。

最後尾で機体を降下させようとした美鈴は、いきなり背筋に強烈な殺気を感じた。

明確に感じられる悪意が、ちりちりと肌を刺す。

「何……？」

彼女が振り返った瞬間、突然純白の光りが視界に広がった。

空を切り裂く光熱波。突き抜ける衝撃波。

「少佐、みんな！」

視界を奪う光の奔流。

美鈴は、それだけ叫ぶのが精一杯だった。

プロローグ（後書き）

美鈴……「めいりん」と読みます。

ロボット登場のベタ設定で、申し訳ないです。

もしよろしければ、拙作にお付き合い下さいませ。

1・出会い

純白の光に灼かれた目が、刺すように痛い。

体のすぐ脇を熱く焼けた無数の弾丸が掠め、足元の土をえぐる。

恐怖に首をすくめる事すら叶わず、僕は朽ち果てた廃墟の中をただひたすらに走り続ける。

何処までも続くのは、覆い被さるような瓦礫と化した廃墟。

暖かさも華やかさも、人々の笑い声も雑踏もなく、ただ静寂が支配する無機質な死の街。

どうやって逃げ出したのかまったく覚えていないが、生きているのが不思議なくらいだ。

用心はしていたのだが、失敗だった……最悪の結果だ。

夕日を背に追いつがってくるのは、白銀の鎧に身を包んだ機械人形達。

皆一様に銃を構え、同じ足取りで確実に僕を追いつめてくる。

機人兵と呼ばれる彼らは、身体を作る肉、駆けめぐる血を持たず、腕も足も固い鋼鉄製。

心など、あろうはずもない。

走り続けて息は上がり、乾いた埃っぽい空気を吸い込む肺が焼け付くようだ。

背負ったリュックが弾む、煤だらけの作業服はだぶだぶで走りにくい。

ぎりぎり締め付けられる心臓はもう破裂寸前、身体のアちこちが悲鳴を上げている。

よく調べてみれば酷い怪我をしているのかも知れないが、体が動くのなら今は走るしかない。僕の胸元で揺れている銀のペンダントが大きく弾んだ。

「うわっ！」

慌ててペンダントを服の下にしまおうとした僕は、とうとう足をもつれさせて派手に瓦礫の中へと転んだ。

その拍子に額を思い切り地面に打ち付ける。

動くことを放棄したがる身体を、無理矢理起こして後ろを振り返った。

眼前に立ち並ぶ、無数の機人兵達……僕にとっては、血を求める狂気の殺戮者だ。

ついに追い詰められた。

無慈悲な彼らが、寸分違わぬ動作で僕に銃口を向けた。

相手が機械なのは分かっている、僕を見据えるのは不気味に光る紅い瞳。血のように赤い光点を睨み付け、僕はひび割れた唇をきつく噛む。彼らが人間ならば、命乞いのひとつも試してみるのだが。その時、にわかに辺りが暗くなった。

「え？」

全身を揺さぶる衝撃と突き上げる地響き、巻き起こる突風に煽られる僕は、吹き飛ばされまいと必死で瓦礫にしがみつく。

半壊したビルの残骸を揺らしながら、僕の目の前に着地したのは一機の装甲兵だった。

少しバランスを崩して上体をかがめた装甲兵の頭部、人間で言えば目にあたるメインカメラがいきなり瞬いた。

「ひっ！」

その様子にある種の予感が脳裏をよぎった僕は、とっさに頭を抱えてうずくまる。

次の瞬間、装甲兵はいきなり両肩に搭載されたバルカン砲を地上へ向かって斉射した。

「わーっ！」

耳をつんざく轟音と弾ける瓦礫、弾を受けている機人兵達が吹っ

飛ぶ音。

僕は大きな悲鳴を上げた。土塊やら石ころの大きいのも小さいのが、もうこれでもかと体に降りかかる。

ややあつて、轟音は止んだ。

恐る恐る身を起こし、きよるきよると辺りを見てほつと胸をなで下ろすと、立ち上がろうとして力が入らず尻餅をついた。

どうやら腰が抜けたらしい。

もうもうと土煙が立ち上っている目の前には、原型も留めぬ程に破壊された、機人兵達の残骸が散らばっている。

そして腰が抜けて動けない僕へと、装甲兵の巨大な顔が動いた。外部スピーカーからくぐもった声が聞こえてきたが、僕が知らない言葉だ。

話の内容が、ぜんぜん解らない。答えられなくて黙っていると、駐機姿勢をとった装甲兵の目にあたるメインカメラの灯が消える。

ゆっくりとコクピットのハッチが開いて、パイロットが姿を現した。

「え？」

僕は、夕日を浴びるそのシルエットを、ぽかんと口を開けて見た。パイロットスーツに包まれた、柔らかな曲線の肢体。

「お、女の人？」

ハッチから伸びる、機体への乗降用ウインチを使って地上に降りたパイロットは、尻餅をついたままという情けない格好の僕の前まで歩いてくるとヘルメットを脱いだ。

僕は思わず息を呑む。

肩から流れ落ちる美しい黒髪、赤い唇にちよつときつめの眼差し。二十歳半ばくらいだろう、とても綺麗な人だ。

「ええと。あなた、この言葉なら理解出来る？」

彼女はそう言って、顔の半分にかかる長い黒髪を掻き上げた。

「あ、ああ……はい！」

見とれていた僕は、慌ててもたもたと立ち上がると、

「あ、有り難うございます、助かりました！」

身体をばたばたとはいって身繕いをし、やっとの思いでそう言ったのだが。

そんなこと、彼女にはどうでもよかったらしい。

こちらへ了解を示すように、ひらひらと手を振っただけだった。

「私は連合軍ミネルバ隊所属、李 美鈴少尉、あなたは？」

「え？ あ、あははは。えとえと。そ、そう！ 僕はリスティ・リステイ・マフィンといいますっ！ こ、この辺りはもう宝の山ですからね。何か掘り出し物がないかと思ひまして」

冷や汗をかきながら、あたふたと言ひ訳を並べる僕。

しかし彼女……李少尉は、横目で僕を胡散くさげに一睨みすると呆れたように肩をすくめ、ふん！ と鼻を一つ鳴らした。

助けてもらっておいてなんだけど、この態度には腹が立つ。

「ああ、ジャンク屋ね。それにしても、こんな場所でパーツ漁りだなんて見境が無いのね、馬鹿じゃないの？」

「はい？」

「助かって良かったわね。フライト・ユニットが咳き込んで、失速して不時着したところにたまたまあなたが居合わせたのよ」

彼女が投げつけた刺々しい言葉は、腹の中で悪態をついている僕の額にめり込んだ。

何とか日が暮れてしまう前に、運良く見つけた軍施設の整備工場跡へ、少尉の機体を運び込むことが出来た。

とは言っても、廃棄された工場は半壊している上に電力の供給はストップしている。

エンジン式の旧型発電器は生きていたので簡単な修理くらいは可能だ。

僕は機体をハンガーへ固定すると、ゆっくりと装甲兵を見上げる。

白を基調とした塗装に、ありふれたデザイン。
「VX-4F型」全長十五メートル弱の、個有機体名も貰えない
典型的な量産機だ。

機体にマーキングされた識別名は「MINERVA 002」
部隊固有のエンブレムなのだろう「剣を携えた女神」の姿が、左
肩の装甲と左腕に装備されたシールドに描かれている。

少尉はそこいらに転がっているドラム缶に腰掛けると、ひとつた
め息をついた。

「屈辱よ、まさかこの私が不時着するなんて！」

僕は少尉に失速時の状況を聞いた。

いたくプライドを傷つけられたのか、どうやら少し苛々している
様子だ。

リフトに乗って機体に近づくほどに、その痛み具合が目につく。
そんなにも激しい戦闘だったのだろうか。

「少尉。宜しければ僕が、機体各部のチェックをしますよ？」

「大きなお世話よ、あちこち触らないで。飛べるようになればそれ
でいいわ」

僕は善意で申し出たのに、思いつきり突っぱねられたぞ、なんだ
よ失礼な。

しかしあちこち触るなど言われても、各部への制御を統括してい
るコクピットを見ないわけにはいかない。

でなければ、機体にどんな異変が起こったのかも分からない。

「コクピット内を拝見します、いいですかー？」

「仕方ないわね」

リフトの上から大声で問うと、いかにも渋々といった声で少尉か
ら答えが返って来た。

場合によっては修理しなきゃならないのに、仕方ないってのはど
ういうことさ。

少尉から許可を得た僕は、コクピットへと滑り込むとメイン電源を入れ、メンテナンスモードでシステムコンピュータを起動する。

「へえ……」

僕は思わず感嘆の声を上げた。

女性パイロットだし、なんて思っていたがなかなかどうして。

操縦桿に変な癖はついておらず、動作は滑らかで良好。腕に変な力が入り過ぎていない証拠だ。

姿勢制御プログラムのメモリー内ほとんどクリアな状態で、深刻な問題等は記録されていない。機体の姿勢制御をマニュアルとまではいなくても、コンピュータ任せにしないことが一目で分かった。

メインコンピュータに、フライトユニットの深刻な機能障害やメモリーの破損は確認されない。

コクピットから出た僕は肩の装甲を伝って、「F型」の装甲兵のほとんどが装備している高機動支援装備「フライト・ユニット」によじ登る。

フライト・ユニットの各部のメンテナンスハッチを開けてみたが、飛行に障害が出るような故障は何処にも見られない。

戦闘で装備の許容限界を超えた使用による、一時的な機能喪失が推測された。

「問題はありませんよ!」

ひよいと下を覗いてその声を掛けると、少尉は食事でも取ろうといいのか、何やら広げてごそごそやっている。

そのうちに、鼻の奥をくすぐるいい匂いが漂ってきた。
ぐう……。

匂いにつられ、お腹が大きく鳴った。そう言えば、食べ物をお口にしたのはいつだったっけ?

「フライト・ユニットなんてみんな同じ構造ですし、量産機は整備も簡単なんですよ、やってしまいましょうか?」

僕にも少し分けて貰えるのかな? そんな淡い期待を抱きながら、

少尉の気を引こうと声を掛けると、
ぶんっ！

劳いや了解の言葉の代わりに、もの凄い勢いでスパナが飛んできた。

「わーっ！」

間一髪。一直線に僕へと向かって飛んできたスパナは、甲高い音を立ててリフトの手摺に当たり、跳ね返って下へと落ちる。

「ちっ」

微かな舌打ちが聞こえた。

「な、な、なんて事をするんですか！」

人に仕事をさせておいて、随分な事をするじゃないか。

リフトから身を乗り出して大声で抗議すると、少尉はきつい眼差しで僕を睨み付けた。

「私の機体を、量産機呼ばわりしないで！」

「え？」

僕は怪訝な顔で、もう一度背後に立つ装甲兵の顔をよく見た。間違いない、いや、どうやっても間違えようがない。

目の前の機体は、形式名「VX-F型」シリーズの最終型。

僕が知る限りこの機体以降は、装甲兵の新型機が生産されていない。

「でもこれって、VX-F型ですよ？ その辺にごろごろしている、量産機じゃ……」

「ごん！」

「いつてーっ！」

後ろ頭に缶詰をぶつけられた。目の前に星が見えたぞ、何だって言うんだまったく。

「私の機体には、ブレイバーっていう名前があるわ、そこいらの量産機と一緒にしないで！」

僕は後頭部をさすりながら、足元の缶詰を拾い上げた。

ブレイバーって、お前量産機のくせに名前負けしていないか？

いまいち納得がいかないが、パイロットが言うのだから仕方がない。

「そうか、お前はブレイバーっていうのか、ごめんな」

リフトから降り、足の部分の装甲をこつんと叩いて詫びを入れる。少尉へと向き直ると、コーヒーを入れた金属製のマグカップが差し出された。

「ご苦労だったわね」

深みのある色合いの黒曜石、きつめの眼差しが少しだけ微笑んだ。

「少尉。この機体は、きちんと整備されているんですか？」

誰がどこから見たって、この機体はかなりくたびれている。

軍所属の機体とはとても思えない、疑問に思っ少尉に聞くと。

「だから、大きなお世話だっていうのよ」

少尉に半眼で睨まれて、僕は黙り込むしかなかった。

転がっている空き缶の山。

シチューにハンバーグ、青豆を煮た物。野菜が無いのが寂しいが、そんな贅沢など言えない。味はまあまあ。パンは柔らかく料理は缶の匂いもしない。軍の携帯食って、案外上品なんだ。

「哨戒任務中に原因不明の高エネルギー反応を捉えたところで、敵機と遭遇戦に突入していたのよ。セラフイムを追おうとしたら、いきなり光が視界一杯に広がって……信じられないほどの高出力の衝撃波が襲ってきた。機体の機能は麻痺するし、僚機と連絡は取れないし」

少尉はスプーンでシチューをかき混ぜながら、何度目かのため息をついた。

（高エネルギー反応と、衝撃波だって？）

一瞬びくりと身体が硬直するのを感じた。

そう……僕だって、その純白の光に灼かれるところだったのだ。

僕はとりあえず、パンを乾いた喉の奥に押し込み、少尉の話を聞いていた。

ことり。

冷めたアルミ皿を置いた少尉は、沈んだ表情をしていた。

「いくら呼びかけても応答は無し、識別信号は消えたまま。みんなは、もう駄目かもね」

少尉が少しうつむき、さらさらとした黒髪が流れて彼女の表情を隠す。

「少佐、メノア、トゥリープ……」

同じ部隊の人かな？少尉の口から何人かの名前が漏れた。

少尉の様子に、僕は食べ続けるわけにもいかず、かといって声も掛けられず困っていたのだが。

「うゝん、はあ」

少尉はいきなり大きく伸びをすると、一度目を閉じた。

「明日になれば、あの世で逢えるかも知れないわね」

立ち直ったと思ったら、しれつと怖いことを言い、少尉は僕にぼん！と寝袋を投げて寄越した。

「あの、少尉？」

「それ、使ってもいいわよ。私はブレイバーのコクピットで寝るから。ああ、気にしないで。その方が落ち着くの」

僕が何か言うよりも早く、少尉はそう一気にまくし立てると、するするとVX-4F型……もとい、ブレイバーのコクピットへ引込んでしまった。

僕が呆気にとられていると、遙か頭上から声が聞こえて来る。

「行きがかり上仕方がないわ。あなたの身柄は私が保護します。仲間の安否確認を最優先。それから手近な連合軍の駐留基地と、居住コアを探さなきゃならないわ。明日は早いから早く寝なさい。それから私の事は、美鈴で結構！」

少尉……美鈴さんは顔だけひよいと覗かせてそれだけ言うと、ぱたんとハッチを閉めてしまった。

仕方がないって言うのはあんまりだと思う。

それに、どうでも良いんですけど、用心深いんですね。

ちよつと寂しい、随分久しぶりの話し相手が居なくなってしまう

た。

僕は簡易コンロなど、後で使える物をまとめてひとつの荷物にした後、身体を少量の水で絞ったタオルで拭い、ランプの火を絞って寝袋に潜り込む。

目が暗闇へと慣れてきた。

胸元のペンドラントを指で弄びながら、ぼんやりと工場に配置されている天井クレーンのレールを目で追ってみたりする。

命拾いをしたばかりで興奮しているのか、とても眠れそうにもなかった。

この大地に人間がともに住めなくなってから、一体どれくらいの年月が経つのだろう？

なりふり構わぬ繁栄を続けた、人類の悪業による環境の悪化はこの星の寿命を大幅に縮めてしまった。

堰を切ったように多発した自然災害は、人間なんてちっぽけな存在では、とても抗うことが出来なかったのだ。

異常気象による水害、干ばつ、飢饉、疫病の流行……。

それだけではない。最終的に総人口を激減させてしまった、エネルギー資源の枯渇問題に端を発した、大規模な戦争。

人間はこの星の苦痛、そして怒りをその身に知ることになったのだ。

全ての国家が消え、国際的機関などはその役割を為さなくなった。そして人間は自らの手で紡いできた、貴重な文化や歴史等の遺産をも失ったのだ。

どれくらいの間が死んでいったのかなど、分かる筈もなかった。

今、人間達は各地に点在する、ほぼ街の残骸に等しい居住コアと

呼ばれる場所で、ひっそりと生きている。

宇宙への移民……そんな方策も、今は夢物語でしかない。
なぜなら、失われた革新的技術を取り戻すには、かなりの時間を
要することが予測されるからだ。

とにかく人間達は、生き延びるだけで手一杯なのだ。

だが、そんな無秩序な世界に、それは突如として現れた。
ヴィラノーヴァ。

それは一夜にして海上へと出現した、巨大な海上都市。

その海上都市、ヴィラノーヴァの代表者として姿を現した一人の
男「フレグランス・ウィスラー」は、全世界の人類を統括するとの
宣言を発した。

今こそ全ての人類が今こそ手を取り合い、再生への道を歩まねば
ならない。

我々は超高度な技術を有している。その技術をこの星の、そして
生まれ変わる人類のために惜しみなく提供する。

未来への扉を開くために、海上都市ヴィラノーヴァは存在する、
と。

しかし、果てない欲望と飢えにまみれた人の心は、荒廃していた。
旧体制から続く強い支配力を持つ者達は、差し出された救いの手
をあつさりと払いのけたのだ。彼等の狭い見識と強欲は様々な思惑
と結びつき、連合軍の残存部隊を取り込み巨大な軍組織を形成して
いった。

危機的な局面を開きしめる、ヴィラノーヴァの高い技術を我が物
にするために。

各地で頻発していた小さな小競り合いは、再び戦火へと拡大した。

そして、異変が起こった。

三年ほど前、ヴィラノーヴァは突然、各地の居住コアへの無差別攻撃を始めた。

ヴィラノーヴァが運用する装甲兵「セラフィム・タイプ」の性能は、現状の世界で運用されている全ての装甲兵を凌駕している。

破壊の限りを尽くす装甲兵セラフィム・タイプはその名に反し、殺戮と破壊という恐怖を世界中に撒き散らした。

あろうことが、フレグランス・ウィスラーは、全人類の抹殺を宣言したのだ。

ぼんやりと考えながら身震いする。

あの光の衝撃波、あれは間違いなく……と、そこまで危険な考えを頭の中から追い出した。

（少尉は……美鈴さんはもう寝たのかな？）

僕はもう一度、寝袋を身体に馴染ませるように身じろぎした後、押し寄せる不安から身を守るように丸くなって眠った。

1・出会い（後書き）

はい、頼りない主人公「リスティ」の登場です。
美鈴との出会いは、最悪ですね。

遅しくなれるかな？

と、作者も心配の主人公なのです。

2 プレイバー

コンパスと地図を頼りに、地平線を睨む黒曜石の瞳。

「あの」

僕は遠慮がちに、少尉……美鈴さんの後ろ姿へ機嫌を伺うように声を掛けた。

風に乱れる長い黒髪を左手で押さえ、振り返った彼女の表情は予想通り険悪だった。

「うるさいわね、何よ？」

「ずっと、仲間の搜索を続けるんですか？」

「当たり前な事を聞かないで。装甲板の破片でも見つけて持ち帰るわ」

僕をひと睨みした美鈴さんの答えは、どこまでも刺々しくてそっけない。

翌日、僕と美鈴さんは半壊した軍の整備工場を後にして、近隣に存在している連合軍の駐留基地……の跡地に居た。

「あの少佐までがなんて信じたくないけど。それに冗談じゃないわ、メノアはまだ二十歳にもなっていないのよ！」

美鈴さんの唇から、幾度となくその名が漏れ出す。

夜明け前からずいぶんと探し回ったのだが、美鈴さんの僚機達は残骸すら発見する事が出来なかった。

何かの情報が入るのではないかと一縷の望みを掛け、情報端末に記録されている連合軍の駐留基地に向かったのだが。そこは基地どころか、廃墟も何もないただの荒野だったのだ。

随分と前にセラフィムの攻撃を受けたのだろう。

基地が存在していたと思われる地点は、とても地図とは照合出来ないほどに地形が変わっていた。

「美鈴さん。そろそろ、ここを離れましょう」

僕はもう何回そう進言しただろう？

そうしないと、おそらくとてもまずい事になる可能性が高い。

いや、絶対にそうだ……間違いない。

「こんなになるまで、徹底的に破壊するなんて！」

どうやら僕の声など耳に届かないらしい。それほど怒りに打ち震えている美鈴さんは、荒れ果てた大地を厳しい表情で見回している。

フレグランス・ウイスラーによって発せられた全人類の抹殺宣言を、セラフイムは忠実に実行している。連合軍の駐留基地やレジスタンスの活動拠点などは、最優先の排除目標として設定されているのだらう。

一般の民間人が肩を寄せ合って暮らしている居住コアにも、散発的な攻撃が加えられている。まるで、罰でも与えるかのように。

僕は地面に膝について、赤茶けた土を手ですくった。

さらさらと手のひらからこぼれ落ちていく乾ききった土の中に、高い熱で炙られて変形している何かの固まりが残った。

命を育む海も母なる大地も、もはやその役割を放棄してしまった。いや、そうさせたのは人間に他ならない。

それは、人間が犯したとても償う事の出来ない大きな罪だ。

ぼんやりとそんな事を考えていた僕は、ふと荒れた大地に仁王立ちしている美鈴さんを見た。どうしたのだらう？ 彼女の様子がかしい、一段と険しい表情で空の一点を睨み付けている。

荒れ果てた大地を吹き渡る熱い風。

その優しさの欠片もない風が、長い黒髪をなびかせた瞬間。

「リステイ、走りなさい！」

突然、美鈴さんが鋭く叫んだ。

「え？」

何の事か分からない僕が棒立ちしていると、彼女にいきなり胸ぐ

らを掴まれた。

「ブレイバーに乗るのよ、走りなさい！早く！」

「は、はい！」

もの凄い力で美鈴さんに引きずられ、瓦礫に足をもつれさせながらも駐機姿勢を取っているブレイバーへと必死に走る。

やつとの思いで機体乗降用ウインチを使ってコクピットへと辿り着くと、

「もたもたしない！」

美鈴さんにメインシートの後ろへと蹴り飛ばされた。

僕はブレイバーのコクピット内、彼女のシートの後ろにロールケージを組み、大破していた複座機の小型シートをひっぺがして取り付けていた。

何となく乳母車に乗っているように見えてしまうが、いつ敵機と交戦状態になるかもしれないので、まさか装甲兵の手に乗せて運んで貰うわけにもいかなかったのだ。

「どっ、どうしたんです？」

「敵が来たのよ！」

怒鳴った美鈴さんは、ハッチを閉じるとブレイバーの起動に取り掛かった。

右腕が操縦桿を引き起こし、左手が目にも留まらぬ早さで次々とスイッチを入れ、キーボードを打つ。

よほどの緊急事態なのか、起動時の機体チェックの項目を全てキヤンセルする。ヘルメットを被った彼女がバイザーを降ろすと同時に、メインモニターが灯りブレイバーが起動した。

そして次の瞬間、コクピット内に接近警報が響き渡る。

「セラフイム・タイプが五機。こんな事をしていれば、見付かるのは時間の問題だとは思っていたけど」

セラフイムだって？

全身が震えに襲われる、やはり僕の存在を嗅ぎ付けてきたのだろうか。

「だ、大丈夫なんですか？」

「黙っていなさい！」

シートから身を乗り出して美鈴さんに声を掛けると、また思い切り怒鳴られた。

コクピット内に響く警報、セラフイムがライフルを発砲したのだ。駐機するブレイバーのすぐ側に着弾し、高熱の爆炎が吹き上がる。巻き起こる膨大な土煙の中から、飛翔したブレイバーが飛び出した。「スクラップにしてやりたいけど」

地獄の底から響いてくるような、美鈴さん声が聞こえた。

数発ライフルを発射したブレイバーが、セラフイムへ背を向けて加速した瞬間。

「わーっ！」

「きゃああっ！」

弾かれたような急加速に、コクピットに二種類の悲鳴が上がる。

え、二種類？

「ちょっと美鈴さんっ！僕はともかく、何であなたが悲鳴を上げるんですかっ！」

強烈な加速でシートへと押しつけられながら、僕は彼女に向かって叫んだ。

「僕はともかくですって？あんなだつて男のくせに！」

美鈴さんは、ぜえぜえと肩を上下させながら操縦桿を握り直した。

「このとんでもない出力は何なの？」

「何って聞かれても、フライト・ユニットの潜在的性能ですよ」

機体をあちこちいじるなど釘を刺されたので、僕はフライト・ユニットの点検と調整のみを行ったのだ。

「へ、へえ……」

いきなり黙り込んだ美鈴さんは、しばらく何か考えていたようだったが、

「殺るわよ」

鋭い口調でそう言っ、ブレイバーを反転させた。

機体の右脇を、追撃してきたセラフィムが発射したエネルギー弾が掠める。

「わあっ！」

コクピット内が赤い光に照らされ、僕は思わず首をすくめた。

「うるさいわね、いちいち騒がないで！」

おぼつかない手つきでシートへ身体を固定する僕を叱りとばし、

美鈴さんは機体を回転させつつ回避行動に移る。

逆さまの状態で、ライフルを二連射。

伸びて行くエネルギー弾を、優雅な容姿を持つセラフィムは散開していても簡単にやり過ごす。広げたそのしなやかな翼が、煌めく燐光を発する。

次々と襲い来るエネルギー弾。

ブレイバーに回避運動をさせていた美鈴さんは、向かってくる数十基のミサイルを左腕に装備されているシールドから引き抜いた接近戦用のブレードで、次々とその横っ腹を切断する。

それはもう、見事な手並みだった。

振動により白熱化しているブレードを一閃させ、爆煙を吹き散らかせた美鈴さんは、バルカン砲を連射して敵機から少し距離を取った。

「なるほどね」

「え？」

その時僕は気付いた。なんだか美鈴さんの様子がおかしい。

「め、美鈴さん？」

「ジャンク屋にしては良い腕しているようね、これなら翼が武器になる」

僕の問いかけに答えず、彼女はヘルメットの中で不気味な笑い声を立てている。

美鈴さんが、舌なめずりしたような気がした。

獣のようなイメージで。

「リステイ」

「は、はい？」

「舌を噛むんじゃないわよ！」

「うびゃああ！」

いきなりの加速に、またもシートに身体が押しつけられた。息が詰まり、悲鳴の尾の部分はかすれて消える。

ブレイバーは再び爆発的な加速で、セラフィムの編隊へと向かって突入していく。

セラフィムがライフルを乱射してくるが、ブレイバーはまるで踊るように軽やかな動きで、十字砲火をかいくぐる。

ああ、挑発無限大。

美鈴さんに借りた耐Gプロテクターを装着しているものの、僕は装甲兵で空中戦などした経験は全く無いのだ。

「めっ美鈴さんっ！しぬっ……死んじやいますって！」

加速Gに翻弄される僕は、なんとか意識を繋ぎ止めながら絶叫する。

「人聞きの悪いことを言わないで、あたしは味方機を墜とした事なんて一度もないわっ！」

僕は乾いた笑いを口の端から漏らす。

ああ、気が遠くなってきた。

「そうか、あたしの後ろに乗っていたのよね」

やっと気が付いたのか、美鈴さんはつまらなそうに言った。

「もう少し、我慢しなさい」

次の瞬間、ライフルを左腕へ固定すると、美鈴さんはブレイバーを一気に加速させた。

またしても、敵機の真っ只中へと。

「美鈴さん。まえっ、前っ！」

気を失っている場合などではない。

美鈴さんは目を剥いて叫びまくる僕に答えることもなく、ブレイ

バーの加速を続ける。

機体をかすめ続ける、信じられない数のエネルギー弾。その恐怖に僕は目を見開いたまま、ついに発する言葉を失った。

「……っ！」

機体に振動が伝わる。

しかし、ブレイバーが被弾したのではない。セラフィムと肉迫した瞬間、ブレイバーの接近戦用ブレードがその胸を真一文字に薙いでいたのだ。

「ひとつ！」

叫び声と同時に急旋回。

一瞬セラフィム二機がブレイバーの機体を見失った。信じられないほどの鋭角的な旋回をやったのけたブレイバーが、セラフィムの頭上から襲いかかる。

動きを止めサーチ状態に入ったセラフィム二機の頭部を、ブレイバーがあつさりと切り飛ばした。コントロールを失ったセラフィム二機が、力なく荒れた大地へ落下していく。

フライトユニットのバーニア、脚部スラスターを全開。まるで踊るように旋回し、再びブレイバーがセラフィムに迫る。

「残りふたつ！」

ブレイバーを捕捉したセラフィムがミサイルを発射する、美鈴さんはそのミサイルの真っ正面へ機体を向けた。それは自殺行為とは思えないが、しかし。

僕には、機体が被弾するなどという恐怖が、ひどく馬鹿らしい事に思えた。

そして、それは正しかった。ミサイルがモニターの真横、つまりメインカメラが搭載されている頭部の直近を通り過ぎたが、美鈴さんが慌てる様子はない。

次の瞬間。

ブレイバーが下方から切り上げたブレードによって、セラフィムの機体が縦一直線、真っ二つに割られていた。

「最後っ！」

ブレイバーのライフルから、一筋の火線が伸びる。

残った一機は、頭部コントロールユニットを打ち抜かれてあっさりと爆碎し、その爆光を浴びるブレイバーが接近戦用ブレードをシルドへと静かに収めた。

「やっていられないわよ。人も乗っていない、こんな木偶人形と命のやり取りで……」

終息する爆光を見つめながらつぶやく、彼女の醒めきった口調を耳にしながら半ば放心状態の僕は、先程目の当たりにした彼女の手並みを反芻していた。

凄い、とても人間技とは思えない。

機体の扱い方は奔放で激しいが、乱暴なのではない。状況判断と兵装選択、そして回避運動などあらゆる行動が的確なのだ。

彼女特有の勘なのか、それとも場数を踏んできた経験と自信なのか。

どちらにしても、彼女が優秀なパイロットであることは間違いない。

「そうだ、この人なら」

つぶやいた僕は、地上に近いことに気が付いた。

「美鈴さん。地形が悪そうですから、着陸には気を使って下さい」

「うるさいわね、大丈夫よ」

不機嫌そうな美鈴さんは僕に言葉を投げつけ、無造作に操縦桿を操作する。

その時、ブレイバーの左足が踏みしめた不安定な岩場が大きく崩れた。

ぐらりと傾く機体、全面モニターが真っ赤になるほどの警告灯。

「え？ 何？」

「めっ、美鈴さんっ！」

何やら、嫌な振動が伝わってくる。

崩れる岩場に足を取られ、ブレイバーはくるくると踊った後、背

中から派手にひっくり返り、そのままずると岩場の斜面を滑り落ちた。

地響き、もうもうと舞い上がる砂煙。

「このスケベ野郎っ！ 何してるのよっ！」

ゆりかごシートから投げ出された弾みで、僕は美鈴さんの胸の谷間に顔を埋める格好になっていた。

ごっ！

彼女の拳が思い切り顔を上げた僕の眉間に炸裂する。

狭いコクピット内で慌てて跳ね起きて、今度は後頭部を思い切り操縦桿にぶっつけた。

「今度は、頭を叩き割るわよ？」

美鈴さんが、牙をむき出すように恐ろしい形相で威嚇している。

「そんな、事故ですよ……」

僕は目に涙を浮かべ頭を抱えて悶絶しながら（いつたい……誰のせいなんだよ）と、心の中で彼女に抗議した。

2 プレイバー（後書き）

戦闘が始まると、リステイはお荷物扱いです。
ああ、主人公なのに。

悲鳴を上げるだけで、何の役にも立ちません。

3・硝子の戦乙女

ブレイバーの接近戦用ブレードの切っ先が閃き、セラフィムタイプの両翼を切断した。

その瞬間、ブリッジ内に大喝采が沸き起こる。

今日はこれで、合計六機撃墜。

敵機がないことを確認するためにしばらく滞空していたブレイバーが、ジュエル号に着艦を求める。

「ほほう、何度見ても鮮やかな手並みじゃねえか。まったく、惚れ惚れするぜ」

美鈴さんの戦いぶりに、太い腕を組んだガディ船長が「がははは……」と、豪快に笑った。刈り込んだ白髪にドングリ目。大きな赤い団子っ鼻、筋肉が大きく盛り上がった体はよく日に焼けた赤銅色。ガディさんは、笑うと人懐っこい顔になる。

僕と美鈴さんは、運良く運搬船に拾われた。

運搬船とは全長百八十メートル級のホバー船であり、居住コア間における輸送手段である。人や荷物などを乗せて荒野を旅する……そんな危険と隣り合わせの仕事だ。

そしてガディさんは、このジュエル号という名前の運搬船、その舵を取る船長なのだ。

僕達がセラフィムと戦っていたちょうどあの頃、ジュエル号は付近を通りかかっていたそうだ。

しかしセラフィムの機影を確認し、行くに行けず、引くに引けない状態だったという。

そんなとき、ブレイバーがセラフィムと交戦を開始した。

クルー全員をはじめ、客達もその様子を観戦しとんでもない事に賭までしていたらしい。

「いいじゃねえか、勝ったんだからよ」

ブレイバーが全機のセラフィムを撃破した瞬間は船中で大喝采だったと、ガデイさんは笑いながらそう教えてくれた。

ジュエル号のクルー達は皆、大柄で筋肉質の強面だが純朴で気の良い人達ばかり。そんな訳で僕と美鈴さんは、居心地の良いジュエル号に居ついてしまったのだ。

しかし、その間タダ飯を食べさせて貰うわけにもいかなかったので僕は整備士として、美鈴さんは用心棒として労働力を提供している。

盗賊……運搬船や旅人を狙う、とんでもない犯罪者達。

そんな時代錯誤な連中が、この世界を大きな態度で闊歩している。装甲兵で武装している場合も多々あり、運搬船にとっては驚異となるのだ。

ジュエル号が行く先々で出会う盗賊達を駆逐する度に、「運搬船の腕利き用心棒」美鈴さんの株は上がりっぱなしであるらしい。

それだけなら良いのだが、美鈴さんに一矢報いてやろうと思うのか、ジュエル号は最近やたらと盗賊に襲われるのだ。

まあ、盗賊風情が百の束になってかかってきたところで、美鈴さんに瞬く間に退治されるのは目に見えているけど。

「おう、そーいやばうず。この船の装甲兵も整備してくれたんだってな？すまねえ……扱いやすくなったって、みんな喜んでたぜ」

思い出したように、ガデイさんが言った。

「いえ、他に何のお礼も出来ませんし」

ぽりぽりと頭を掻く僕。

運搬船ということもあって、ジュエル号にも作業用として五機の装甲兵が搭載されている。

TH12型。ブレイバーよりも三世代以前のモデルで、そのずんぐりむつくりの体型から通称、チャリオットと呼ばれている機体だ。大型の荷物の搬入出などにはもってこいだし、武装すれば盗賊達から船を守る、心強い護衛にもなるのだ。

「しかし驚いたぜ。装甲兵で鮮やかな戦いを見せてくれたのが、あ

んな華奢な娘っ子だったなんてな！」

「はあ、そうですか？」

ガデイさんからもう何度も聞かされた美鈴さんへの賛辞に、僕は曖昧な返事をした。

何にも知らないからそんなことが言えるんだ、この人は。

そんな事を話しているうちに、そろそろプレイヤーが着艦しただらう。

僕には、一つだけ気掛かりな事がある。

今日こそは、美鈴さんにびしつと言わないと。僕はガデイさんに一礼すると、気合いを入れて格納庫へと向かった。

「美鈴さん、お疲れ様です！」

コクピットから顔を出し機体乗降用リフトに乗り移った美鈴さんに、僕は大きく手を振りながら呼びかけた。

リフトの手摺りにだらりとすがり、何となく気怠げな美鈴さんがひらひらと手を振って答えてくれた。

「疲れてないわよ、汗一つかいていないし」

「ここ一週間で、四十機撃墜ですね」

おまけに美鈴さんは、被弾率0パーセントを誇る。

しかし、本人は全く嬉しそうではない。軽やかな身のこなしでリフトから降りると、機嫌悪そうに大きな溜息をついた。

「盗賊なんて連中、たとえ一万機撃墜したって自慢にも何にもならないわ、次から次へと鬱陶しいだけよ」

まあ、そうだろうけど。

「美鈴さんの操縦技術は認めます。確かに盗賊なんて、いくら相手にしても仕方ないですから。でも、とにかく怪我なんてしないように帰って来て下さい」

「ふふん」

美鈴さんは僕を一瞥すると、何やら妙な声を出した。

「何ですか？」

「何でもないわよ」

聞き咎めた僕に曖昧な返事を残すと、そっぽを向いて歩き去ってしまう。

ああ、また話しそびれた。

ハンガーに固定され、ひと仕事を終えたブレイバーを見上げる。

僕の気がかりは、ブレイバーの状態だった。一週間で十二回の出撃、しかしその間、弾薬補給以外の整備を行っていない。

どんなに説得しても、美鈴さんは何故か「必要無い」と、整備を許可してくれない。

確かに派手な戦闘をしているわけではないのだが、機械というのはそういう訳にはいかないのだ。

僕は美鈴さんの後ろ姿を追いかけて、息を大きく吸った。

「美鈴さん、ブレイバーには整備が必要です。今日こそはっ！」

「何度も言わせないで、そんなの要らないわよ」

予想通り間髪を入れず断られたのだが、ここで諦めるわけにはいかない。

「いいですか？美鈴さん！ジュエル号に拾われてから、もう十二回も出撃しているんです。それに、初めて会った時に派手に転んだじゃないですか！」

美鈴さんの右の眉が、ぴくりと動いた。

あ、まずかったかな？

しかし、ここで挫けるわけにはいかない。

「盗賊の襲撃があれば、出ないわけにはいかないでしょう！今のうちですよ、動力部に火器管制と……。ああ、時間がいくらあっても足りないんです！」

決して大げさではないのだが、目を閉じて僕の話聞いていた美鈴さんは一つ肩をすくめた。

あ、分かってくれたかな？

「もう聞き飽きたわ。何度も言わせないで、大きなお世話だって言うのよ」

美鈴さんは面倒くさそうに言うと、僕をちらりと睨んだ。

「あなた、最近この船で株が上がってるみたいじゃない。まだ自分の腕を自慢したいわけ？」

美鈴さんの小馬鹿にしたような薄い笑みに、僕はかちんときた。

「腕自慢ですって？ 冗談じゃない！」

思わず、大きな声を出してしまった。

「どんな機械だって、それぞれの部品が自分の役目をきちんとこなせるようにしてやらなきゃならない。僕はその手助けをしているだけなんです！」

駄目だ、美鈴さんは何を考えているんだろう？これじゃあ、とても話になんてならない。

やっぱりこの人もただのパイロットなんだ。量産機に「ブレイバ―」なんて名前をつけてるくせに。

「もういいです。なら、勝手にさせて貰いますからね！」

そう言って格納庫へ向かうと、きびすを返した瞬間だった。いきなり伸びてきた美鈴さんの右手が、僕の胸ぐらを掴んだ。

「うっ！」

そのまま締め上げられた。

苦しい……。息も切れ切れの僕は美鈴さんの顔を見て、全身から冷や汗が吹き出した。

無言で僕を睨み付ける、美鈴さんの黒曜石の瞳が湛えた光。

それは、焼き尽くすような炎の光ではない。もっと深くて静かな、まるで鬼火のような光に見えた。

僕がうめき声さえ出せずにいると、美鈴さんは掴んだ襟首をさらにぎりつと締め上げた。

「いいこと？ 私のブレイバーに指一本でも触れたら……ぶっ殺すわよ」

美鈴さんは投げ捨てるように僕を解放し、ヘルメットを抱えると歩き去ってしまった。

絞られた襟元を緩め、背中にびっしりと冷や汗をかいた僕は、

ただ美鈴さんの後ろ姿を黙って見送るしかなかった。

それから数日は盗賊達の襲撃もなく、穏やかな日々が続いていたのだが。

僕は美鈴さんと、一言も言葉を交わすことがなかった。

ジュエル号の後方にある展望用のキャビンで、美鈴さんは一人でじつと流れる景色を見つめている。

彼女に声を掛けるクルーもいない。

今の美鈴さんには他人を寄せ付けない、そんな雰囲気がある。

ジュエル号で居住コア間を旅するうちに、連合軍の駐留基地も見付かると美鈴さんは考えているようだ。

しかし、美鈴さんの部隊を襲った凄まじい光のエネルギー衝撃波。あの状況で、美鈴さん一人でも生き残った事自体が奇跡に近いだろう。

僕はそう思ったが、彼女の前でそれを口に出す事は出来なかった。だから彼女の姿を遠目に見ながら、小さく溜息をついて通り過ぎる毎日が続いていた。

そんなある日――。

格納庫の窓を流れる景色、変化のない旅路。

眠気を覚えてうとうととしていた僕は、船内にけたたましく響く警報に驚いて寝転んでいたコンテナから転げ落ちた。

「盗賊だ！」

どうやら平穏な旅など、望めないようだ。

クルー達の慌ただしい動きと怒声に、僕は急いでブリッジへ駆け上がった。

「弾をケチるなよ、あるだけぶっ放してやれ！ 後方キャビンのシールドを降ろせ、手が空いている奴は、客を船の中央へ集めろっ！」

ブリッジに入ると、キャプテンシートに座ったガデイさんが、大声で各所に指示を飛ばしている。

そして、パイロットスーツに身を包み、ヘルメットを小脇に抱えた美鈴さんが、じっとモニターを睨んでいた。

パイロットスーツの具合を確かめる、その姿を喻えるならまさに抜き身の剣。

戦乙女が、そこに佇んでいた。

「烏合の衆だが数が多すぎる。お嬢……すまねえ、頼めるか？」
「了解」

険しい表情のガデイさんにさらりと答え、長い黒髪を後ろでまとめた美鈴さんが踵を返した。

まるでそこに僕が居ることなど気付かぬように、美鈴さんが脇を通り抜けすれ違う。

僕は何となく声を掛けそびれ、無言でブリッジを後にする彼女を見送った。

接近しているのはセラフィムの改造タイプ、その数十七機。

そうだ、ブリッジでばんやりしている場合じゃない。僕は急いで格納庫へと向かう。

僕が格納庫へ駆け込んだ時には、ブレイバーはすでにカタパルトへと移動していた。

「美鈴さん」

結局、一言も言葉を交わすことは出来なかった。

フライト・ユニットが、次第に轟音を上げ始める。

カタパルトデッキに立つベルドさんが大きく手を振り下ろした瞬間、少し姿勢を低くしたブレイバーが射出された。

幾多の戦闘に晒されて、疲れきった機体。

僕にはもう無事に帰ってくれるように祈る事しか出来ない。どうしようもない焦燥にとらわれ、拳を固く握りしめた。

「あんたに言われなくなたって、分かっているのよ」

美鈴は、ヘルメットの中で小さくつぶやく。

イライラが治まらない、美鈴は赤い唇をきつく噛んだ。

とてもよく似ている、あいつに……。

物思いにふけりかけた美鈴は、機体に伝わる振動で我に返った。

ジュエル号のハッチが開き、カタパルトに誘導灯が灯る。

美鈴は大きく息を吐いた。

（そうだ……。あいつは、もういない）

虚しく広がる空へと射出され、風を切り裂き加速するブレイバー。激しく揺れる心を抑えきれず、操縦桿を握り直した。

美鈴とて、昨日や今日パイロットになった新人ではない。自分の機体がどのような状況なのか、的確に把握している。

しかし。

「ブレイバーを任せられるのは、あいつだけなのよ……」

美鈴の瞳には、危険な光が宿っていた。

散開したセラフィムが、ブレイバーへと一斉にライフルを発砲する。

機体を掠めるエネルギー弾に臆することなど無く、美鈴はブレイバーを突進させた。

コクピット内を照らす、紅い光。

網膜を焼くかのような光の勢い、しかし美鈴は唇の端を上げる。

素早い照準で、ライフルを二連射。

伸びていくエネルギー弾は、狙い変わらず正確にセラフィム二機の胴体を撃ち抜く。

その内の一機に急接近したブレイバーが、機体を回転させる勢いで回し蹴りを放った。

蹴り飛ばされて吹っ飛んでくる仲間の機体に驚いた三機が、慌てて回避した瞬間を美鈴は逃さない。

速射の三連射が、次々とセラフィムを撃墜する。

「ここにいたって、もうあいつには会えない！」

爆光を背にし、そう叫ぶ声と同時にシールドからブレードを抜き放つ。

「そう、逃れられない闇の恐怖。その恐怖を受け入れさえすれば、またあいつに会えるかもしれない」

まるで狂気にとらわれた戦士のように、ブレードを振りかざしたブレイバーがセラフィムに襲いかかる。

脅えたように、ただライフルを乱射する一機を両断すると、その背後から敵わぬまでもとブレードを構えたセラフィムが突進して来た。

振り返ったブレイバーが、その凶刃をかわそうとした瞬間だった。がくんと機体が揺れ、その動きが目に見えて鈍る。そしてセラフィムが振り下ろした大型のブレードが、ブレイバーの肩口へ深々と食い込んだ。

コクピット内に伝わる激しい振動に、美鈴の脳裏には大鎌を振りがぶる死神のイメージが鮮明に浮かぶ。

左腕を肩から失い、バーニアをふかして急制動を掛けたブレイバーに、生き残った盗賊のセラフィムがこの期を逃すまいと殺到する。警告灯の紅い光が照らすコクピットで、鬱陶しそうにヘルメットを脱いで後ろへ投げ捨てた美鈴が、凍り付くような笑みを浮かべた。「待ってて、すぐに会えるから」

ブレイバーの損傷。

この予想外の出来事に、ブリッジではガディさんをはじめクルー達がまるで石像のように固まっていた。

「美鈴さん！」

僕は大声で叫ぶと、騒然とし始めたブリッジを飛び出した。

「どこだ、どこなんだ？ 制御系に間違いはないんだけど。だから、僕があれほと言ったのに！」

ここで叫んでいたって始まらない。

しかしそうしなければ、不安に押しつぶされてしまいそうだった。「何をしているんですかっ！ 美鈴さんの援護を、早く！」

再び格納庫へと飛び込んだ僕は、叫びながら走った。

我に返ったように数人のクルー達が慌ただしく動き始め、三機のチャリオットが起動を開始する。

チャリオットが動き出したことを確認した僕は、しかしその緩慢な動きに居ても立ってもいられなかった。

格納庫の隅に置いてあったオフロード・バイクに飛び乗ると、力任せにキックペダルを踏みつける。

乱暴にクラッチを繋ぐと、格納庫の床をこすりつけるように空転するタイヤ。

大きなトルクに横滑りをするバイクの姿勢を無理矢理に立て直し、僕はアクセルを全開にした。

「盗賊風情が生意気なっ！」

セラフィムに浴びせられる苛烈な暫撃をかわしきれず、腰の装甲が吹き飛んだ。

次第に傷付いていくプレイヤーを、なおも美鈴は操り続ける。

一度後退して機体を逆さまに捻り、加速する勢いでセラフィムの脇腹を切り裂く。

左足が基本動作を取れなくなったらしい、このままでは相手に斬りかかる事もままならない。

絶体絶命の状況下。

美鈴の瞳に見るからに派手なカラーリングを施したセラフィムの姿が映った。

「あれが、リーダーって訳？」

まるでターゲットを射殺すように輝く、黒曜石の瞳で睨み付けて操縦桿を握り直す。

「もうそろそろ限界のようね。少し安っぽいけど、道連れくらいにはなるかしら」

満身創痍のブレイバーを目標に向かって突進させようとした瞬間、左サイドのモニターの端に映る映像に美鈴は大きく目を見開いた。ジュエル号のカタパルトの上、のろのろと動き出したチャリオットの足元に見えたバイクに乗っている人の姿。

美鈴の脳裏に、悪夢のような記憶が甦る。

締め付けられるような心臓の動悸、耳鳴りで周囲の音が消えた。

「のこのカタパルトなんかに出て来るなんて、あの馬鹿！」

気を逸らした美鈴が叫んだ瞬間、リーダー格のセラフイムが振り下ろした大型のブレードがブレイバーの首の付け根に食い込んだ。ブレードの刃部に接触した内部機関の接続部が弾けて溶解し、切断されていく。

セラフイムが大型のブレードを真横に振り抜き、ブレイバーのメインモニターがブラックアウトする寸前、美鈴は反射的に操縦桿を操作していた。かろうじて反応したブレイバーがセラフイムの胴体を蹴り飛ばし、同時に右のマニピレーターで握っていたブレードを投じる。

光を弾いて一直線に飛んだブレードが、リーダー格のセラフイムのコクピットがある機体胸部を貫通する。

そして頭部を失ったブレイバーは、そのままの姿勢で地上へと墜落した。

地面を抉るようにして止まり動かないブレイバーを守るように、三機のチャリオットが大型の旧式ライフルを次々に発砲する。

盗賊達が墜落したブレイバーにとどめを刺そうとするのではないかと、僕は肝を冷やしたが、盗賊達はあっけなく後退していった。

墜落して動かなくなったりリーダーの派手な機体を助けようともしない。

盗賊同士の連帯など、そんなものなのだろう。

セラフイムが後退していくのを確認すると、チャリオットの二機が噴煙を上げるブレイバーに、急いで消火剤を掛け始める。

バイクを横倒しに放り出した僕は、全身に降りかかる消火剤などかまうことなく、横たわるブレイバーへよじ登った。消火剤でぬるつく手に癩癬を起こしながら泡を掻き分け、ハッチの強制開放コックを思いきり捻る。

コクピット内のエアが排出され、勢いよく腹部の装甲と共にハッチが跳ね上がった。

「美鈴さん！」

コクピットに滑り込むと、そこには膝を抱えてうずくまる美鈴さんがいた。

「怪我はありませんか？」

「ブレイバーと一緒に逝けると思っていたのに。あんたのおかげで死に損なっただじゃない、どうしてくれるのよ」

美鈴さんに浴びせられた呪詛のような言葉に、僕はその場で凍り付いた。

3・硝子の戦乙女（後書き）

比類無き強さを誇る美鈴ですが、心に傷を負っています。
彼女の心に踏み入り過ぎたりステイ。

距離感を計るのが苦手な、朴念仁ですね。

美鈴の心は、深い闇に閉ざされていました。

ああ、言葉でロボットを戦わせるのは、難しいですね。

4・翼の欠片

美鈴さんに怪我がなかったのは、不幸中の幸いだった。

しかしそれ以来彼女は膝を抱えたまま、まるで魂が抜けたように自室で毛布にくるまっている。

彼女の部屋へ毎日食事を届けてあげるのだが、料理には手をつけようともしない。うつろな瞳で虚空を見つめ続ける美鈴さんは、酷くやつれて見えた。

美鈴さんのことは気がかりだったが、今はそっとしておくしかない。

僕は無理矢理に自分を納得させると、美鈴さんの部屋を後にして格納庫へと向かった。

格納庫には、大破して回収されたブレイバーが横たえられている。その残骸ともいえる機体を調べた僕は驚いた。

今までまったく気が付かなかった。人間で言えば骨格に当たる内部フレームの構造や装甲の固定方法、全てが量産機VX-4F型と異なっている。

つまり外見上はVX-4F型でも、中身はまったくの別物ということだ。

そして、残された内部の改造フレームの強度を調べてみたが、軽量なのに驚異的な剛性強度で組み上げられている。

美鈴さんの奔放で激しい操縦に、ブレイバーが耐えられる訳がやっと分かった。

そして、胸部のメンテナンスハッチの裏側に記されているサイン。機体の改造を施したエンジニア、もしくは整備士のサインなのだろう。

焼け焦げた痕が付いてしまっている、僕には読めない文字。

歪んだメンテナンスハッチを静かに閉じると、僕は真っ直ぐに船

長室へと向かった。

「ぼうずか、お嬢の様子はどうか？」

船長室といっても他の船室と取り立てて変わりのない質素な部屋だ。

ガデイさんは窓際に置かれた机で、愛用しているパイプを磨く手を休めずに言った。

「あのままです」

「そうか」

言葉少なに僕が答えると、ガデイさんはそっとパイプを机の上に置いた。

「お嬢には、すまねえ事をしたと思ってる。随分と無理をさせちまったからな」

その表情は疲労の色が濃い。いや、それとも自責の念か……。だが今は、そんな思いに暮れている暇はない。

「お願いがあります」

僕は机の前まで進み出ると、ガデイさんに深々と頭を下げた。

「VX-4F型のパーツを手に入れたいんです。お金は一生働いても、必ずお支払いします！」

目を固く閉じて、そこまで一気に言った僕は、恐る恐る頭を上げた。

ガデイさんが、僕の顔をドングリ眼でじろりと睨む。

僕はその視線に怯まず、睨み返した。

「このご時世にまともな装甲兵を一機組み上げるパーツが、どれほどの金額になるか分かって言っているのか？」

知らない訳がない、僕は唇を噛むと力なく視線を落とした。きつく拳を握りしめる、力の無い自分に腹が立った。

「お嬢にえらく入れ込んでるようだな、そんな義理はお前にはねえ筈だが。ふん、お嬢に惚れましたって訳か？」

まるで嘲笑するようなガデイさんの口調に、僕はかっとなって勢いよく顔を上げた。

「そんなんじゃないありません！」

固めた拳で、使い込まれた机の天板を力一杯叩いた。

「そんなんじゃないんです……僕は」

力任せに叩き付けた拳から、伝わってくるのは鈍い痛み。言葉を続けられない、自分の気持ちはどう表現していいか分からない。

混乱したまま血が滲むほどに唇を噛んだ僕を一瞥した後、ガデイさんは軽く肩をすくめた。

「すまねえ、言葉が悪かった。からかうつもりなんざ無かったんだよ」

そう言つて机の引き出しを開けると、何か光る物を僕へと放った。受け止めた手の平で光るのは、ひとつの鍵。

「倉庫の二十四番コンテナを開けてみな」

「え？」

僕は手のひらに鍵を載せたまま、訳が分からずぽかんと口を開けた。

「もう用はねえ、邪魔をするな。さっさと行け……」

ガデイさんは、それきりパイプ磨きに没頭してしまった。

どうやら理由は教えてくれそうにもない、仕方なくガデイさんに深々と一礼した僕は船長室を後にした。

ジュエル号の最後尾部にある倉庫ブロックで、ガデイさんに教えて貰った二十四番コンテナを探す。

荷物を積んで居住コア間を行き来する、運搬船の倉庫はとてつもなく広い。

通路の所々に掲げられている、倉庫内の案内図をよく見て歩かなければ目的地へと辿り着けないどころか遭難してしまいそうだ。

倉庫内に一杯に積まれた大切な荷物、武装した盗賊達が運搬船を狙う理由もよく分かる。

「よう！ 来たか、リステイ」

コンテナを探してきよるきよるしている僕に声を掛けてきたリュウジさんが片方の眉を上げてにっと笑った。

リュウジさんはジュエル号の倉庫番、様々な荷物や資材の管理を任されている。

元気なのが頬がこけるほどに痩せていて、膨大な荷物のデータファイルを睨む真剣な顔がちょっと怖い。

「船長から聞いている。二十四番コンテナを前に出しておいた、開けてみな」

「あ、はい。ありがとうございます」

こんなに近くに置かれていたなんて。

僕は自分の隣にあるコンテナの、遙頭上のナンバーを見て肩のしかかった疲労感にがっくりと肩を落とした。

ガデイさんに渡されたキーを使って、巨大なコンテナを解錠する。ゆっくりとした動きで巨大な扉が開き、薄暗いコンテナ内にぼんやりとした灯りが点る。コンテナの中を覗き込んだ僕は驚いた。

「こっ、これは！」

「どうだ、すげえだろ？」

胸を張ったリュウジさんが、得意げに鼻を鳴らす。

「壊滅していた軍施設の倉庫から、こっそり失敬してきたんだけどよ。物が物だけにおいそれと売っちゃまう事も出来やしねえ」

開かれたコンテナの中には、VX-4F型を三機は組み立てられるほどの新品のパーツが収められていた。

僕はコンテナに添付された、部品のリストを食い入るように見つめて息を呑んだ。

これだけのパーツが揃ってれば、大破したブレイバーを完全に修理出来る。

「あっ、有り難うございますっ！」

感極まった僕は興奮を抑えきれず、リュウジさんの両手を握ってぶんぶん振った。

「好きに使え、代金なんか要らねえって伝言だ。礼なら船長に言いな！」

リュウジさんは、そう言って笑った。良かった、笑顔はぜんぜん

怖くないんだ。

僕は早速、勢い込んでブレイバーの修理作業に取りかかったものの、作業はすぐに行き詰まってしまった。

修理を終えた部分を含め、内部機構などはそっくり移植出来るのだが。

問題は改造されたフレームの構造だった、こればかりはオリジナルのフレームをそのまま使うことが出来ない。

僕は、オリジナルのフレームを改造しようと試みた。

しかしブレイバーに使用されている内部フレームの強靱な剛性強度は、綿密な強度計算と各部品の高精度な工作・組み上げによるものなのだ。

あらゆる工作方法を繰り返しても、この船に積載されている設備では高い精度でのフレームの組み上げが不可能だった。

「くそっ！」

三日間かけて試行錯誤を続けたが、結果は芳しくない。夜通しの作業で苛立ちが頂点に達した僕は、能力が低い溶接機を殴りつける。薄暗い格納庫の作業場で僕は打開策を見いだせず、閉塞感に息苦しさを感じていた。

組んだ両手に力を込めて握りしめる、手の平に食い込んだ爪が痛い。

「苦勞しているようだな、ぼっず」

静寂の中へと響いた、太くて低い声。

「ガディさん」

うなだれていた僕は、のろのろと顔を上げた。

綺麗に手入れされたパイプをくわえたガディさんが、にっと笑った。

「パーツを有り難うございます。でも、笑っている場合じゃないんです」

「おお、そいつは悪かったな」

ガディさんはパイプを大事そうに撫でながら、大破したままのブ

レイバーを眺めている。

僕の脳裏には美鈴さんが駆る無敵の機体というイメージしか無く、横たえられたその痛々しい姿に正直目を向けるのがつらい。

「それこそへこんでいる場合じゃねえぞ？ぼうず。この船の設備じやあ、どうあがいたって高精度の金属加工と組み上げなんざ不可能だ」

その事実は今までの作業で嫌と言うほど感じている。そう、現状ではブレイバーの完全な再生は逆立ちしたって不可能なのだ。

「それは分かっています、でも！」

「慌てるな、まあ聞けよ」

ガデイさんは片方の眉を上げて、にやりと笑った。

「ジューエル号は間もなく居住コア“ランディルア”に到着する。ランディルアは重機やら工作機械やら何やらが、なんでも揃う便利な街だ。俺の知り合いで腕の良いヤツを紹介してやる。そいつは高い加工技術を持つてる腕の良い職人だ」

得意げに言ったガデイさんは、そこで少し困ったように無精髭でざらつく顎を撫でた。

「かなりの頑固者だがな。まあ、後はお前の頑張り次第だ」

「あつ、ありがとうございます！」

ぽかんとした顔でガデイさんを見上げていた僕は、弾かれたように立ち上がり深々と頭を下げた。

次の日の未明――。

ガデイさんに借りた大型トレーラーに、大破したブレイバーから取り外した内部フレームを積載すると、ワイヤーロープで丁寧に固定する。

はやる心を抑えて、僕は朝食のパンを無理矢理に胃袋へねじ込むと、トレーラーに乗り込むとジューエル号を後にした。

「おやおや。せっかく作ったのにつて、スイフリーがっかりするよ！」

ブラインドをおろした暗い室内で、美鈴が手を付けた様子もない食事にパメラは溜息をついた。

ジュエル号での彼女の発言権は、ガディ船長に続く第二位。

背が低く少々太めだが気だての良いおばちゃん、クルー全員のお袋的な存在である。

「ほらほら、いい加減にしゃきつとしな！ たかが一回撃墜されたからつて、それがなんだつて言うんだい！」

パメラは美鈴がくるまっっている毛布を勢いよく引き剥がすと、腰に手を当てて大声で笑った。

「よくお聞き、命あつての物種さ！」

暖かな毛布を剥ぎ取られ、無造作に床に転がされた美鈴は力なく床に座り込んだまま、やつれた顔に弱々しい笑みを浮かべた。

「違うわ……。そんな些細な事に、プライドを持っている訳じゃない」

流れ落ちる乱れた黒髪、美鈴はきつく両肩を抱いた。

「忘れられないのよ」

小刻みに震え出す体を、どうすることも出来ない。

「あいつ……。あたしの機体を勝手にいじり回して、ブレイバーなんて名前を付けたくせに」

喉の奥から絞り出される、美鈴の声は弱々しい。

「戦闘中に、カタパルトになんか出てきちゃ駄目だつて、私は何度も言つたわ。でも、俺のこの目でブレイバーの動きを確かめるんだつて言つて」

美鈴の心に浮かぶのは印象的な碧い瞳と、無邪気で自信に満ちた笑顔。

「直撃弾だった」

美鈴は震える声を絞り出す。

網膜に焼き付いたその光景を、美鈴は今でも覚えている。震える細い声が想い人の最期を語った。あの時モニターへと映った、カタパルト上でバイクに乗っているリステイの姿が目に入った瞬間に、美鈴の脳裏に恐ろしい記憶が甦ったのだ。

その心を縛り付ける錆びた鎖のような記憶は、どうしても忘れられない。

「あたしを好きだって言ったくせに、その返事も聞かないで勝手に遠くへ行っちゃうなんて。死の恐怖と暗い闇を受け入れさえすれば、またあいつに会えるって思ったのに……」

消え入りそうな美鈴の言葉に、パメラは全てを理解した。

美鈴に近づくと、少し強引に小鳥のように震える体を抱きしめる。「あいつに会いたかったの。……私はもう、ひとりぼっちなのよ」癒される事のない空虚な心。

血が滲むほどにきつく噛んだ唇から、長い長い間押し殺していた嗚咽が漏れた。

「それはね、美鈴。あんたはまだ、会いに来ちゃいけないって言われたんだ」

パメラはまるで赤子をあやすように、震える美鈴の背を優しくぽんぽんと叩く。

「分かっているね。つらいけど、あんたはまだ生きなくちゃならないんだよ」

少々荒れている、太くて短い働き者の指で、美鈴の黒曜石のような瞳からこぼれ落ちる涙を拭う。

「それに、あんたはひとりぼっちなんかじゃないよ。あの坊やは、リステイはあんたの翼を甦らせようとしてるのさ」

「リステイが……？」

美鈴は驚いた。姿を見せなくなったりステイは自分を見限り、とつくに船を降りたと思っていたのだ。

「あんたにとって、あの機体はとても大切な翼なんだろう？ あの坊やは、それをちゃんと知っているのさ」

パメラはそう言っ、また美鈴を抱きしめる。

「いいかい、よく覚えておきな。この船に乗ってるみんなが、あなたの家族なんだ」

美鈴はとめどなく流れる涙をそのままに、抱きしめられた暖かな胸で静かに泣いた。

5・ランディルアの機械工

ガデイさんに教えて貰った腕利きという職人の名は、ブランディ・ブレード。

駐車した大型トレーラーから降りた僕は、街の様子に目を奪われた。

大小様々な工場が数多く建ち並ぶランディルアの街には、朝早くから大きな騒音が響いている。エア・ハンマーの音、金属を切断するカッターの音、工作機械が鉄を削る音などがうるさいくらいだ。髪を撫でる風から感じるのは、微かに焼けたオイルの匂い。

それは、僕が好きな匂いだ。

「さあ、急いで紹介して貰った工場を探さない！」

ガデイさんお手製の、おおざっぱであり当てになりそうにない地図。

その見にくい地図を片手にきよろししながら道を歩き始めた僕は、いきなり何か大きな塊に正面からぶつかった。

「いてて……」

「おう！ 痛えじゃねえか、このガキ！」

道へとへたり込んで痛む鼻をさすっていると、頭上から響く不機嫌そうな声。

見上げた僕は、正直大きなドラム缶か何かかと思った。運悪く僕がぶつかったのは、まさに鋼のような筋肉を包む作業着姿で髭面という、見るからに強面の大男だった。

僕は瞬く間にその仲間らしい数人に取り囲まれてしまった。

昨夜の酒でも残っているのか、それとも二日酔いで仕事に出る途中なのか、男達は皆一様に機嫌が悪い。

「す、すみません！ よそ見していました」

僕は太い腕で軽々と襟首を掴まれ、ぶらんと吊された。

こういう場合は、下手に逆らわないに限る。どうにも情けないが、

僕の貧弱な体はとても荒事に向いていない。しかし今回はどう下手に出ても、ただでは済みそうもない雰囲気だ。

「だったらと、冷や汗を流していたその時。

「あんた達、朝っぱらから何をやっているのさ！」

張りのある大きな声に、僕に絡んでいる男達の表情が一変した。ぶら下げられたまま下を見ると、手を腰に当てて男達に凄んでいるのは、まだ十五歳位の女の子だった。怒りに揺れているポニーテール。デニム地のエプロンをきりりと締め、両手を腰に当て凜とした表情で怯むことなく大男達を見上げている。

「その人を、早く放しなよ！」

少女が発したのは、可愛らしい顔に似合わぬドスの利いた命令口調。

しかし驚くべき事に男達は簡単に従い、僕はどさりと地面に放り出された。

「そうそう。この街を訪ねる人は、大切なお客様かもしれないんだ。失礼なんてもっての他だなんだって、みんな分かっているよね？」

仁王立ちの少女は男達にひとしきり説教した後、急ににっこりと微笑んだ。

「さあ、仕事仕事！ 今日もみんなで、怪我しないように頑張ろうね！」

男達を励ます少女の表情はまるで、天使のような笑顔だった。

「おう兄ちゃん、悪かった。朝はどうにも苦手だな、虫の居所が悪かったんだよ」

「やれやれ、格好悪いところを見せちゃったな、チエイニー。行ってくるぜ！」

どうやら男達は少女に一目置いているのか、口々に詫びながら荷物と担いで歩き出す。男達の後ろ姿へ大きく手を振って見送った後、少女は僕の顔を覗き込んだ。

「大丈夫？ 朝っぱらから災難だったね。みんないつも深酒するか朝は苦手なの。気を悪くしただろうけど、許してあげてね」

「ぜんぜん気にしてないよ、助けてくれてありがとう」

かなり怖かったけどって言いたいのを我慢して、赤くなった鼻を撫でながら少女にお礼を言った僕は、ふと思いついた。

「僕の名前はリステイ。この街で“ブランディ・ブレード”っていう人の機械工場を探しているんだ、知らないかな？」

「あたしはチェイニーっていうの。ブランディ・ブレードは私のおじいちゃんよ。お兄ちゃん、おじいちゃんに仕事の依頼なの？」

「え、君のおじいさんだって？」

僕は、大きなブルーの瞳を丸くした少女と顔を見合わせた。

チェイニーの案内で、ブレイバーの内部フレームを載せた大型のトレーラーを工場脇の空き地へと停める。

壁にオイルが染みついていたり、あちこち欠けていたり。

ブランディさんの工場は、こぢんまりとした外見の古い建物だ。

トレーラーのキャビンから、ぴよんと飛び降りたチェイニーが工場の事務所へと駆け込んでいく。

僕は慌ててトレーラーを降りると、元気な少女の後を追った。

「ああ？　なんだ、お前は……」

チェイニーに手を引っ張られ、作業服姿のブランディさんが事務所から姿を現した。

ぼさぼさの白髪で痩せてはいるが眼光は鋭く、年齢を感じさせぬほどの真っ直ぐな姿勢。

そして何より驚くのは、チェイニーの可愛い手が引いている、ごつごつで大きい働き者の手。

「初めまして、僕はリステイ・マフィンといいます」

丁寧にお辞儀をしたが、ブランディさんは迷惑そうな顔で僕を一瞥した。チェイニーに引っ張られて、仕方なく顔を出しただけという様子だ。

「お前さんの名前なんぞ、どうでもいいさ。俺に仕事の依頼なのか

？」

「はい！」

僕は待っていましたとばかりに、声を張り上げた。

「実は被弾して、破損してしまった装甲兵の……」

勢い込んでそこまで説明した瞬間。脳が揺れるほどの衝撃に、目から火花が散った。

「失せやがれ、このクソ野郎が！」

いきなり視界に映った青い空が目にしみる、そこへブランディさんの罵声が飛んできた。

左の顎がじんと痛い、どうやら思い切り殴り倒されたらしい。

「いてて……」

「お兄ちゃん、大丈夫？」

のろのろと身体を起こした僕に、心配そうな顔をしたチエイニーが駆け寄ってきた。

「チエイニー。そんな野郎、ほっとけ！」

僕を一睨みしたブランディさんはそう言い捨てて、さっさと事務所へ入ってしまった。

「う、うん」

僕の傍らで、困ったようにブランディさんと僕を交互に見ていたチエイニーだったが、頷いて立ち上がると、ブランディさんの後を追った。

ぱたんと、事務所の扉が閉まる。

往來に置き去りにされて座り込んだ僕は、痺れる顎を撫でながら閉ざされた扉をじっと見つめた。

感じ慣れた錆びた鉄の味が、口の中全体に広がっている。

ガデイさんに教えて貰ったとおり、ブランディさんはとても気難しい人らしい。

さっきの様子から、決してそれだけではない何かを感じたが、僕はここで諦めるわけにはいかない。ふらつく頭を二、三度振って立ち上がった。

周りに立ち並ぶ大小の工場からは、機械の大きな音が響いている。部品を積んだトラックや運搬車がひっきりなしに走り、オイルまみれの作業服を着た人々が道を行き交う。

僕はそんな流れの中でただじっと立っている。ブランディさんが、話を聞いてくれるまで待つつもりだった。

どのくらいの時間が経ったのか。

それまで晴れていた空がにわかには曇り始め、僕の前髪を水滴が揺らした。

滴は大粒の雨となり、砂利道の泥を勢い良く跳ね上げる。

あつという間にずぶ濡れになった僕は、立ちつくしたまま大泣きしている空を振り仰いだ。

顔を強く打つ雨。

今頃、美鈴さんはどうしているんだろう……。

きちんと食べていてくれればいいんだけど。

僕はあの時、死の淵へ身を投げようとしていた美鈴さんの腕を掴んだのだろう。

しかし、彼女の命をかううじてつなぎ止めた僕のその行為は、美鈴さんの本意ではなかったのかも知れない。

そんな事を考えていると、がくがくと膝が震えてくる。

メンテナンスハッチに記されたサイン、同じ形式の機体性能を遙かに凌駕するほどに改造されたプレイヤー。

そしてその愛機を他の整備士に触れられることを、彼女は極端に拒んだ。

いくら鈍感な僕にも、美鈴さんの想いは理解出来た。

雨が降りしきる空を真っ直ぐに睨み付ける。

そして忘れてはならない、もうひとつの想いも。

「あなたの想いは！」

「どうしたの？ お兄ちゃん」

「え？」

ふと気が付くと、傘を差したチェイニーが不思議そうな顔で、僕

を見上げている。

「い、いや、あはははは。たつ大したことじゃないから。うん、ほんとに！」

一瞬で赤面した僕は、裏返った声でまくしたてた。

とつぷりと日が暮れて、ランディルアの街は昼間の喧噪など微塵も感じさせぬ静寂に包まれている。一日中忙しなく働いた機械達も静かに疲れを癒やし、やがて訪れる明日の朝を待っているのだらう。

「暖まった？」

「うん、ありがとうチェイニー。それより僕を工場に入れたりしたら怒られないかい？」

「おじいちゃんは、お酒飲んで寝ちゃったから朝まで起きないの。お兄ちゃん、シチューは好き？」

片づいたキッチン、テーブルには一輪挿しに花が飾られている、チェイニーは綺麗好きで働き者らしい。

暖かいシャワーを浴び、生き返った心地になった。

ごわごわだけど油染みも無く、綺麗に洗濯された作業用のつなぎを借りてテーブルに座った僕の前に、チェイニーが湯気が立ち上る美味しそうなシチューを盛りつけた皿を置いてくれた。

ああ、何て食欲をそそる、美味しそうな匂いなんだろう！

「美味しそうだね、いただきます！」

恥ずかしいけど、丁寧なのはそこまでだった。

土砂降りの中で空を仰いで柄にもなく力んでいた僕は、とてもお腹が空いていた。

あちあちと舌をかばいながら、もう夢中でががつと美味しいシチューをむさぼり食べた。そんな僕を、テーブルの向かい側に座っているチェイニーは、にこにこしながら見つめている。

「どうしたの？」

「うっん、えへへ」

皿が空になると、チェイニーは皿に二杯目のシチューを満たしてくれる。

チェイニーの様子が何となく気になったのだが、食欲を刺激してやまないシチューの香に抗えない僕は、とりあえず疑問を置いておくことにした。

「ごちそうさま。ああ、美味しかった……」

思う存分に胃袋を満たし、僕は大きなため息をつく。

「お兄ちゃん、凄い食べっぷりだったわね」

嬉しそうに皿を片づけ始めるチェイニーに、僕は何の気無しにふと思いついた疑問が口をついた。

「チェイニーはブランディさんと二人暮らしなの？お父さんやお母さんは？」

僕の不用意な問い掛けに、彼女の大きな瞳が微かに揺れた。

「お父さんもお母さんも、戦争で死んじゃったから」
しまった！

これが僕の憎むべき鈍さだ、また軽はずみに大変な事を聞いてしまった。

「あの、ごめんチェイニー！」

テーブルに手をつき、頭をこすりつける程に下げた僕に、チェイニーはまた笑顔で手を振った。

「うっん、いいの。おじちゃんもいてくれるし、機械工のみんなが友達なもの」

そう言って微笑むチェイニー。

この世界を蹂躪した忌むべき戦火は、こんな少女の心にも影を落としている。

理不尽な別離に悲しんでいるのは、チェイニーだけではない。

家族、恋人、愛する人を失った人々が、この世界にどれほどいるのだろうか。

「ほんとうは客間のベッドを用意してあげたいけど、今夜は事務所

で我慢してね」

手際よく後片付けを済ませたチェイニーは、僕に柔らかな毛布を渡してくれた。

「僕は外だつてかまわないんだよ、野宿には慣れているから」

「そんな訳にはいかないもの。お休みなさい、お兄ちゃん」

「ありがとう。おやすみ、チェイニー」

はにかんだチェイニーが、パタンとドアを閉める。

チェイニーに深く感謝した僕は、満腹のお腹をさすりながら事務所へと戻り椅子に腰を下ろした。

これからが大変だ。

何とかブランディさんに、ブレイバーの内部フレームを見てもらわなければならない。

でも、昼間の様子ではとても頼む事なんて出来ない。僕は目の前に立ちふさがるその難問に鈍く痛む頭を抱えた。

良い方法も思いつかず頭を抱えて身悶えしていた僕は、ふと事務所の窓から見える工場の奥に目を向ける。

光を落とされた広い工場の奥にぼんやりと見える、ひと山に積まれている物。

「あれは？」

事務所の通用口を開けて、工場内に足を踏み入れる。

高い天井からぶら下がっている、いくつもの照明のスイッチを入れた僕は思わず歩み寄った。小さな作業用の機械工具、大小の工作機械、大きな重機の作業用アームなどが、無造作に転がっている。

どの機械も皆一様に、どこかが壊れていた。

僕はそんな傷を負った機械類の山を見てみると、とてももの悲しく感じてしまう。

壊れた機械類は、ブランディさんに依頼された修理品なのだろうか？

しかし長い間放置されてでもいるのか、機械に染みついたオイルには埃がからみついていた。

「どれも、そんなに難しい修理じゃないのに」

動かない工作機械に手を触れて、僕は首を傾げた。

どうしてなのだろう？ ガディ船長の話では、ブランディさんは腕の良い職人だという事だったのに。

そんな腕利きの職人が修理の依頼をされた品を、壊れたままの機械をこんなに粗末に扱うような事はしないはずだ。

「ええい！」

考えているのがもどかしい。

僕は勢い良く腕まくりをすると工具を握った。手近にある油圧ポンプの前に座り込む。

やはり難しい修理ではない、僕は黙々と修理品の山に挑みかかる。そして、ほぼすべての品の修理を終える頃には朝になっていた。

昨日からの雨が、止むことなく降り続いていた――。

雨に煙る街の喧噪。相変わらず、硬質な機械音が止むことなく響いている。

「どういふつもりだ、この野郎！」

ブランディさんの鋼鉄のような拳に吹き飛ばされ、僕は工場から転がり出た。

表通りで伸びるのはこれで2回目だ。

降り続く雨に打たれながら、ようやく体を起こした僕は拳で口元の血を拭った。

「お前の両手は、装甲兵をいじっている血まみれの手だろうが。そんな汚れた手で、俺の工場の機械に手を触れやがって！」

僕を睨み付ける、ブランディさんは憤怒の形相だ。

「俺の仲間もみんな死んだ！ 装甲兵なんて兵器が存在しなけりゃあ、

誰も死ななかつたんだ。チエイニーが、どれほどの涙を流したと思っ
ていやがる！」

「おじいちゃん。お願いだからもうやめて！」

ブランディさんが、声を上げるチエイニーに耳を貸す様子はない。
重く頑丈な作業用の安全靴で蹴り倒され、振り下ろされた踵が腹
に深くめり込む。

激しい衝撃に胃液が逆流した。

「装甲兵は人の生き血を啜り、命を喰らう呪われた兵器なんだよ！」

「それは違う！ 装甲兵だってただの機械なんです。この世界で危
険にさらされた、たくさんの命を守る事だって出来るんです……だ
から僕は！」

泥水の中で悶絶しながら、声の限りに叫ぶ。

歯を食いしばって立ち上がった僕は、ブランディさんの襟首を掴
み大声で叫んでいた。

「たかが兵器をいじっているだけで、命懸けで戦争している気にな
るな。てめえみたいな輩がいちばん氣にくわねえ！ このクソ生意
気なガキが、知ったふうな口をきくな！」

ブランディさんが再び拳を振り上げる。

でも、ここで屈服してしまうわけにはいかない。

何度殴り倒されても、蹴り飛ばされても僕は起き上がり、ブラン
ディさんの襟首へと掴みかかった。

「僕にはもう、こんなやり方しか残されていない。この世界に撒き
散らされる、理不尽な破壊と死の恐怖から人々を救うには、他に頼
れるものが無いんです！」

僕は顔を打つ激しい雨に負けず、ブランディさんの襟を握ってが
くがくと揺さぶりながら叫んでいた。

「この荒んだ世界で、人の優しさや暖かい心を掻き集めたって……
今はほんの小さな盾一枚分にもならないんだ！」

胸が締め付けられ、頭の中がじんと響いている。

いつ絶望に飲み込まれてしまうのかも分からない自分の心。

認めたくない事実、気付かぬように避けていた真実に僕の全身から力が抜け落ちた。

雨に打ちつけられるままに力なくうなだれると、激しい雨粒が弾ける地面に膝をつき両手を握りしめる。

「あなたの言うとおり、みんな死んでしまった。こんなはずじゃなかった！ この世界で人々がもつとお互いを大切にして、信じ合えていたなら……こんな事にはならなかったんだ！」

僕の脳裏に甦る、恐ろしい光景が刻み込まれた記憶。

信じていたものに裏切られ、死と隣り合わせの恐怖を抱えて僕はずっと脅え続けていた。

泣くまいとしてどんなに歯を食いしばっても、もう嗚咽を堪える事が出来ない。

泥水に握った両手を何度も何度も打ち付け、僕は大きな声を上げて泣いた。

「小僧、お前……」

頭上から、ブランディさんの声が聞こえる。

「チエイニー、こいつを風呂に入れてやれ。あと修理品の依頼主に連絡しておいてくれ、長い間ご迷惑おかけしましたってな」

それから僕の前にしゃがんだブランディさんは、真顔で僕の襟をぐいっと掴み、

「おい小僧、男ならいつまでも情けない顔してるんじゃないやねえ。落ちて着いたら工場へ来い、話を聞いてやる」

そう言い捨てると、さっさと工場へと歩き去ってしまった。

「お兄ちゃん、大丈夫?!」

「ありがとうチエイニー。大丈夫、もう大丈夫だから」

心配そうな顔で駆け寄ってくるチエイニーに、ぼんやりとしていた僕は体中の痛みを堪えながら無理矢理に笑顔を作った。

降り続く激しい雨のおかげで、ありがたいことに涙でぐしゃぐしゃの顔はごまかしている。視点も定まらなくて顎もガタガタだけど、

あまり痛そうな顔をしていたらチェイニーが心配してしまうと思ったんだ。

「来たか小僧、早く荷台のシートを外しな」

工場で待っていたブランディさんに急かされ、僕はあちこち痛む体をかばいながら慌てて大型トレーラーの荷台へ飛び乗る。雨に濡れたシートをはぐったその時、荷台に乗せられているブレイバーのフレームを見たブランディさんの動きが止まった。

「小僧、こいつは……」

ブランディさんはするどく息を飲み、呻くような声を出した。

「この機体をどこで手に入れた！ こいつを仕上げた奴は、今どうしている！？」

「ちよつと、待って下さい！」

鬼気迫る表情で、ブランディさんが僕に詰め寄る。

がっちりと両腕を掴まれ、がくがくと身体を揺さぶられても僕には何も分からない。

考えてみれば、僕は美鈴さんの事もブレイバーの事も何も知らないのだ。

ただひとつ知っているのは、美鈴さんの頑なな想い。

彼女は量産機VX-4F型を「ブレイバー」と呼び、その機体整備を誰にも任せなかった。

僕は自分が知っている事を、出来るだけ丁寧にブランディさんへ伝えた。

話を聞いたブランディさんはひどく落胆したようだったが、深いため息をひとつ付くと作業台に置かれていたファイルの山から、一冊の分厚いファイルを僕へと放って寄越した。

「小僧、お前はそのファイルに記された計算式が理解出来るか？」

これは、設計図？

ぱらぱらとファイルをめくり図面と数式を目で追った僕は驚いた、これはこのフレームを改造した際の強度計算だ。分厚いファイルはそれだけで、綿密に張り巡らされたフレームの強度計算の結果だ。しかし戦闘兵器のフレームに、こんなにも高精度で細やかな寸法公差の加工を要求するなんて。

それにどうしてブレイバーの内部フレームの設計図がここにあるのだろう？

「どうなんだ？」

「分かります」

「そうか。お前には、分かるのか……」

ブランディさんは意味ありげに頷くと、僕が見た事もないような溶接機のトーチを持ち上げて見せた。

「このフレームはな、普通の人間には到底理解出来ない計算の上に成り立っている。実際にその加工をするとなれば、素人が逆立ちしたってどうにもならん。気が散るから向こうへ行っている、チェイニーの相手をしてやってくれ」

「ブランディさん！ どうしてこの内部フレームの設計図がここにあるんです？」

僕の問い掛けに、ブランディさんはふと寂しそうな笑みを浮かべた。

「いいから、さっさと行け。しっかりしているようでも、チェイニーは寂しがり屋でな……」

その言葉からは、チェイニーを気遣う優しさが滲み出ている。

「分かりました、よろしくお願いします」

僕はそれ以上言葉を続ける事が出来ず、深々と頭を下げると工場を出た。

5 ランディルアの機械工（後書き）

ぼこぼこに殴られてしまっリスティでした。

でも、胸に秘めた想いは強く。

そして、少しだけリスティの過去を、語りました。

健気なチエイニー。

シチュー……美味しいです。

6・翼に託した想い

翌日、僕はブランディさんに呼ばれて工場内にいた。

ブランディさんに殴られてボロボロの顔には、チエイニーがサービスとばかりにたくさん絆創膏を貼ってくれている。どうやら殴られた甲斐はあったようだけど。

外気温は今日も朝から高く、荒れた大地はひどく乾燥している。かつてこの世界に広がっていた眩しい緑は、果たしてどれくらい残っているのだろうか？

その上特殊な溶接用のトーチが発する熱で、工場内はとても暑い。軍手をはめた手で何度も額を拭うけど、すぐに玉のような汗が浮いてくる。

「こいつは……左腕と首をやられていたみたいだな」

ブランディさんには、ブレイバーの破損状況が手に取るように分かるらしい。

溶接トーチを肩に担ぎ、タオルで汗を拭うブランディさんは、大きな溜息をついた。

「フレームの歪みは元に戻したが、ぶった切られて無くなった場所は新造するしかねえ。マテリアルは充分にある、必要な量を計算してくれ……お前なら出来るな？」

「はい」

僕は返事をして、すぐに設計図と計算機を手を取った。

「……ところでリステイよ」

ブランディさんの静かな声。

僕は計算機のキーを叩き続ける手を止めて、思わず顔を上げた。

「お前は、いつから装甲兵なんぞに関わっているんだ？」

ブランディさんの質問に答えようとして口籠もり、困った僕は視線を足下へと落とす。

「まあいい、少し話を聞け」

ブランディさんは椅子へ深く沈み込むように背を預け、天井をじっと見つめる。

「俺も若い頃は、装甲兵の改造なんかを請け負っていたのさ。レジスタンスに依頼されたりしてな、主に動力部のチューン、武装と装甲の強化だ。そうでなけりゃあ、あの憎らしい羽根付き野郎にはとてもじゃないが敵わねえ」

顔に深く刻まれた皺が急に深くなった、ブランディさんの苦悩が僕にも伝わってくる。

「腕自慢つてのもあった。俺が心血を注いだ機体達がこの混沌とした世界を変えられるなんて自惚れていた。戦い続ける事で未来を切り開ける、すべて解決するなんて思い上がっていた。けどな、それは間違だった、そんな簡単な事じゃなかった。みんな死んでいったよ……俺は大切な者達を死地へと送り込んでしまった」

後悔が呻くような声となって漏れ出した、それはどれほどの苦しみだったのだろう。いや、ブランディさんは今でもその苦しみを背負っているのだ。

死んでいった仲間達、もう取り戻す事など出来ぬかけがえのない絆。

その心の傷は、癒える事など無い。

「今でも俺の昔話を聞いて、機体を持ち込んでくる馬鹿野郎がいやがる。だがな、そんな奴らの目には装甲兵しか映っちゃいねえ……悔しいがああの頃の俺と同じだ。そんな野郎は力任せにぶん殴って、目を覚まさせてやるのさ」

ブランディさんは忌々しそくに、固い安全靴の踵を机の天板に叩き付けた。

それは、過去の自分に対する苛立ちなのだろう。

「ただの腕自慢、撃墜数自慢ばかりさ。世界を覆う悲しみや苦しみなんぞ、塵ほどにも感じていやしねえ。ふざけやがって、くそっ！くだらねえ」

ブランディさんが怒りにまかせて鋼鉄の拳を振るう、やるせない

気持ちに僕にも初めて分かった。

少し熱を持って腫れている頬を撫でながら、おとなしく話に耳を傾ける。

「リステイ、お前の所属は何処の部隊だ？それとも自営のレジスタンスにいますのか？」

ブランドイさんと真剣に向き合うためには、すべてを語らねばならないのだろう。しかし真実を語ろうとした僕の喉には鉛でも詰まっているようで、上手く言葉が出てこない。

「僕は連合正規軍に所属しているわけではありません。独自に活動しているレジスタンスでもない、運搬船で整備士として働いているんです」

「運搬船だと？ 船名は何て言うんだ！？」

「ジューエル号です。ガディ船長に、ブランドイさんの機械工場を教えて貰ったんです」

僕が今の現状のみを話すと、ブランドイさんは驚いたようにがばつと跳ね起きた。

「お前は、ガディんところの小僧か！」

薄くなっている白髪をばりばりと掻きむしり、ブランドイさんは「ばん！」と膝を叩いた。

「そうか、ガディか……。そりゃあ、ますます悪い事をしちまったな。あいつが俺の処に、くだらねえ馬鹿野郎を寄越すはずは無いからな」

ブランドイさんの口元に浮かぶ微かな笑み。

「ガディとは旧知でな、以前熱心に請われてジューエル号で旅をした事がある。もっとも、俺は地に足が付いていないと落ち着かねえから、すぐに船を降りちまったけどな」

懐かしそうに目を細めるブランドイさんの厳しい表情がふっと和らいだ。

まるでそこに思い出が綴られてでもいるように、机上のファイルを意味もなくぱらぱらとめくる。ガディさんとの旅は、その傷んだ

心を癒してもくれたのだろう。

ブランドイさんの遠い目は、過ぎ去った日の出来事を見つめているようだ。

「すまねえ、喋り過ぎたら色々思い出しちまった。しばらく休憩だ、お前も休め」

ブランドイさんは僕を横目で見てそう言った後、再び椅子に深く背を預けタオルを畳んで顔の上へと載せた。

僕はあまり音を立てないように、計算結果だけ紙に書き写すところと工場を後にした。

「チエイニー？」

僕は事務所へ戻ったが、チエイニーの姿が見えない。

首を傾げた僕は、もう一度彼女の名を呼んでみた。

「呼んだー？」

チエイニーの声がキッチンから声が聞こえる。キッチンをひよいと覗くと、エプロン姿のチエイニーが振り向いて、ポニーテールが大きく揺れた。

僕を見てにつこりと笑ったチエイニーは、大きな鍋を慎重に掻き回している。

良い匂いが僕の鼻腔をくすぐり、お腹がぐう！と大きく鳴った。

「美味しそうな匂いだね！」

僕のお腹の音に、チエイニーはぷつと吹き出すと、

「ポトフを作っているの。もうちょっとだから、出来たら味見してね」

真剣な顔でコンロの火加減を見て、また鍋に向かった。

僕は椅子に腰掛けるとチエイニーの後ろ姿を眺めながら、腫れぼったい頬やら顎をさすった。ブレイバーの内部フレームは、ブランドイさんに任せておけば心配ないだろう。

僕に引つかかっている疑問が、ぼんやりと頭をもたげてくる。ブランドイさんに言われて、フレームの破損部分の修復に使う材料の必要量を計算した。簡単にはいかないものの、僕には図面に記載されている強度計算式を扱う事が出来る。

普通の人間には、到底理解出来ない計算式だと、ブランドイさんは確かにそう言った。

それはいつたい、どういう事なのだろう？

「はい、召し上がれ！」

チェイニーの明るい声に、僕は思考はあっさりと掻き消えた。

目の前には、湯気を上げる美味しそうなポトフが皿に盛りつけられている。

チェイニーからスプーンを手渡され、ポトフを一口すすった僕は思わず声を上げた。

「うん、美味しい！ 美味しいよ！」

舌に優しい塩加減、透き通ったスープには野菜と肉のエキ스가たくさん溶け込んでいる。

心から元気になれる、そんな力が湧いてくる味だ。

「凄いや、チェイニーは料理上手だなあ！」

「えへへ」

チェイニーは照れたように、もじもじとお玉で顔を隠した。ブランドイさんの工場に滞在している間、食事はすべてチェイニーが作ってくれる。

どの料理も、驚くほど美味しい。

「あのね。私、この街に大きな食堂を作りたいの。この街で働いているみんなに、私が作った料理を食べさせてあげたいの、だからたくさん練習しているのよ！」

そう言って、チェイニーは頬を染めてはにかんだ。

僕は驚き、そして言葉を失った。

混沌とした荒れた大地で過ぎて行く日々、やるせない毎日が果てしなく続く。

しかし、そんな絶望と隣り合わせの世界で、大きな夢を胸に生きている少女の姿。

僕には、チエイニーの笑顔がとても眩しく見える。

身に降りかかった不幸などものともしない、それはチエイニーが秘めている強い魂の力だ。

チエイニーの料理は、この街では有名らしい。皆、そのあたたかで優しい味に励まされ、癒されるのだ。これから先どんな事があっても、チエイニーはきつとその夢を実現させるだろう。彼女にはそれこそ、無限の可能性がある。

「うん、チエイニーの料理ならみんな大喜びさ、大繁盛だよ！」

おだてたりなんてしていない、僕にはそんな確信が持てる。

それほどに、チエイニーの料理は美味しい。

「ありがとう。褒めてくれるのも、ケイイチお兄ちゃんと一緒ね」「え？」

チエイニーはコンロの火を止めて、キッチンの一角に置かれていた小さな写真立てを手に取った。エプロンを外して椅子に座ると、その写真立てを僕に差し出す。

古い写真なのか、写っているのは幾分幼いチエイニーと、まだ白髪が今ほども間引かれていないブランドイさん。

そして、チエイニーが“ケイイチ”と呼んだ青年の姿。

写真の中で笑っている青年は、僕と同じ金色の髪で、同じ碧い色の瞳をしている。

羨ましい事に、どうやら僕よりも背が高い。

「チエイニーのお兄さんなの？」

「ううん。おじいちゃんが一番弟子って自分で言ってたわ。装甲兵を持って、おじいちゃんに仕事の依頼に来たの。リステイみたいに、たくさん殴られたりしなかったけど」

気の毒そうなチエイニーの視線に、僕はがっくりと肩を落とした。それを言わないでくれないかな。

え？ 装甲兵だって！？

驚いた僕は、写真にトレーラーの荷台部分が一部分だけ写っている事に気が付いた。

横たわっているのは間違いなく「VX-4F型」だ。

しかも左腕に装備されているシールドのエンブレムには、プレイヤーと同じ「剣を携えた女神」の姿が描かれている。

機体のナンバーも同じ“MINERVA02”間違いなく、荷台に載せられているのはプレイヤーだ。

「チェイニー、この写真の人は!？」

「分からないわ。おじいちゃんが止めるのも聞かずに、出て行っちゃったもの。でも、会いたいな……ケイチお兄ちゃんも美味しいって、あたしの作ったお料理をたくさん食べてくれるの、リストイみたいだね」

「……そうなんだ」

その時突然、僕の中で気になっているいくつかの事が繋がった。

プレイヤーのメンテナンスハッチに記されている名前、美鈴さんが機体整備を誰にも任せない理由、内部フレームを目にした瞬間のブランディさんの取り乱した姿。

プレイヤーの内部フレームの強度計算をして図面を書き起こしたのは、ブランディさんと共にプレイヤーを改造したのは、美鈴さんのプレイヤーを整備していたのは。

そうだ、間違いなくこの人だ。

しかし、おそらく彼はもう、生きてはいない。

心苦しいが、大破したプレイヤーのコクピットでうずくまる美鈴さんの姿を思い出した。

「チェイニー」

「なに?おかわり?」

「う、うん」

とても話せない。

もうチェイニーの美味しいポトフが、しょっぱく感じてしまうだろう。

僕はチエイニーの前で涙なんか流さないように、血が滲むほど強く唇を噛んだ。

それからの数日、僕は黙々とブランディさんと共に作業に取り組んだ。

全てを語る事が出来ない、その切なさややるせなさを忘れたかった。

——そして。

「ようやく終わったな、リスティ。土産も用意しておいたぜ」

ブランディさんはそう言うと言工場奥に歩いていき、シャッターのボタンを押した。

シャッターが大きな音を立てて軋み、ゆっくりと上がっていく。

久しぶりに姿を見た大型トレーラーの荷台には、修理を終えたブレーバーの内部フレームとともに、何か別の物が積まれている。

天井からの照明に照らされたそれを見た僕は、息を飲んだ。

「こつ、これは？」

「この機体の左腕に装備させる、大型の接近戦用ブレードだ。シールドと併用の上にあまりに長大でな。重量の問題もあるし、ノーマル仕様のVX-4F型じゃあバランスがうまく取れなくて、直立する事も出来やしねえ。以前、俺の処に居た若い奴が作ってたものだ。未完成だったんだが、俺が仕上げておいた」

ブランディさんはその長大なブレードに、そつとゴツゴツで大きな手を触れた。

「あの頃は、こんな武器には触れたくもなかったが、あいつが残して行った想いも無駄にはしたくねえからな。それにリスティ、こんな世界を変えられるなんて夢を、また見てみたくなったのさ。だから、俺に出来る事を俺なりにってな」

ブランディさんの瞳から感じる強い光に、この街から立ち去らなければならぬ僕は安堵した。

「ブランディさん。ほんとうにありがとうございました」

僕は姿勢を正すと、ブランディさんへ深々とお辞儀した。

「馬鹿野郎、何をかしこまっていやる。しかしリステイよ、あまり装甲兵のパイロットなんぞに入れ込むんじゃねえぞ？」

「え？」

「覚えておけ、あいつらは死に一番近い場所にいる。ぼんやりしていたら引つ張られるからな。まあ心配かけるなつて事だ！ ほら、急がねえとジュエル号が出航しちまうぞ！」

もう少し話を聞きたいが、ブランディさんに急かされた。

名残が惜しい。僕はチェイニーと握手を交わし、後ろ髪を引かれる思いを苦勞してねじ伏せトレイラーに乗り込んだ。

「リステイ、ガディによるしくな。それから運搬船の整備士に飽きたら、ここへ戻つて来い。俺が一人前の職人に仕込んでやるからよ！」

トレイラーの大きなエンジン音に負けない大声を出したブランディさんが、精悍な顔に浮かべたのはガディさんと同じ不敵な笑み。

「気を付けてね、リステイ。また、たくさん美味しい料理を作つてあげるから！」

「ありがとう、楽しみにしているよ。僕もチェイニーの夢が叶うように祈っているからね！」

涙声のチェイニーに大きく手を振つてお礼を言つた僕は、勢い良くアクセルを踏み込んだ。

大型トレイラーを疾走させて、街外れにある運搬船の係留スペースへと急ぐ。

ジュエル号がもし出発していたら、追いつくのが大変だと思つた

けれど。遠目にも目立つ他の運搬船よりも背が高いブリッジが見える。

良かった！ まだジュエル号は停泊中だ。

数週間離れていただけで懐かしさを感じる。巨大な船体の後部、荷物使用の車両搬入口から勢いよく滑り込んだ。

「おう、帰ったか坊主。ほほう！ ここ数週間で、いい面構えになったじゃねえか」

トレーラーから飛び降りると、顎でざらつく無精髭を撫でながらガデイさんが出迎えてくれた。

「遅くなりました！ 話は後で、すぐにブレイバーの修理にかかります！」

ジュエル号へと戻ると挨拶もそこそこに、僕は作業に取りかかった。トレーラーから内部フレームをクレーンで吊り降ろしているとジュエル号の整備クルー達が待つてましたとばかりに駆け寄ってくる。

手始めに、メインの動力とその伝達部や関節などの内部機関を、修理を終えた内部フレーム各部に組み付けていく作業だ。

内部機関を取り付ける際、部品がうまくフレームに組み付けられるのだろうかと思ったが、それはどうやら杞憂だったようだ。

固定用ステーの微調整などまったく行う必要が無く、すべての部品が綺麗にフレームへと収まっていく。さすがブランドイさんだ、このあたりが職人の確かな仕事なのだろう。

大破したブレイバーの修理作業は、幾日も深夜にまで及んだ。

厨房係のスイフリーさんが作ってくれた差し入れを、パメラおばさんが運んできてくれる。それを作業の合間に手を止めて、まるでむさぼるように食べてまた作業に戻る。

頭部メインカメラを取り付け、火器管制などコクピットから機体各部への集中制御の調整。耐熱樹脂塗料を使って塗装した装甲板の

取り付け、マニピレーターの動作テスト、フライト・ユニットの装着。

疲労で体が動かなくなれば、壁際で床に倒れ込んでしばらく眠る。目が覚めると熱いシャワーでぼんやりとした頭を叩き起こし、また作業服に身を包む。

そして修理作業の大詰めは、ブランディさんが持たせてくれたお土産だ。

ブレイバーの左腕へ、シールド一体型の大型接近戦用ブレードを装備させる。このとんでもない装備を初めて見たとき、クルー達は揃って目を丸くした。

「美鈴さん」

ノックをして、少し遠慮がちに声を掛けてみたが、やはり部屋の中から彼女の返事はない。

ドアの向こうで、美鈴さんはどうしているのだろう。それ以上声を掛ける事が出来ず、僕が固く閉ざされたドアから離れようとした時、僕を呼ぶ微かな声が聞こえた。

「美鈴さん！」

叫んだ僕が勢いよくドアのノブへ手を掛けると、

『駄目、人に見せられるような顔じゃない』

ドアの向こうから聞こえる美鈴さんの言葉に、僕は今にも回しそうだったノブからそっと手を離すと、ドアへ背を預けた。

『遅かったわね』

「すみません」

僕は、ぽりぽりと頬を掻きながら素直に謝る。

「時間が掛かりましたけど、あなたの翼の欠片を拾い集めました」僕はそっと、ドア越しに語りかける。

「この荒れ果てた世界の空を、恐れることなく駆ける強くてしなや

かな翼。その翼をあなたに託した彼は、美鈴さんの姿に希望の光を見ていたんでしょう。心に強い想いがあるからこそ、自分が望む未来を美鈴さんの姿に重ねていたんだと思います」

ドア越しに美鈴さんの存在を感じながら、精一杯の勇気を振り絞る。

「僕に、彼と同じ事が出来るとは言いません。いえ、そんな事は言えません。でも彼の想いは僕も同じなんです。あなたの機体に、ブレイバーに僕が持っている全ての力を注ぎます。だから……」

僕は胸一杯に大きく息を吸って、両手をぎゅっと握りしめる。

「あなたの翼を、僕に任せて下さい！」

叫んだ瞬間、早鐘を打つ僕の臆病な心臓。

ややあつて、ドア越しに感じていた美鈴さんの気配が揺れたような気がした。

『リステイ。あなたは、私を信じられる？』

「はい」

やっと聞こえた美鈴さんの返事に、僕は大きく息を吐いて力強く返事をした。

『それなら戦闘中に、カタパルトの上なんかでちよろちよろしないのよ？ まったく、気が散ってしょうがないんだから』

「……はい」

僕には、美鈴さんにいつもの調子が戻った気がした。

『疲れたでしょう、早く休みなさい』

そして以前よりちよつとだけ、美鈴さんの声が柔らかくなった様に聞こえたんだ。

ランディルアの街を旅立ってから数日後――。

鳴り響く接近警報は、いつでも突然に心臓を鷲掴みにする。

怒号が飛び交うブリッジだが、今日は様子が違う。張り詰めた空気が、しかしクルー達の心にはひとつの確信がある。

「状況はどうなの？」

ブリッジへと響いた、凜とした声。

振り返ると、真紅を基調としたパイロットスーツに身を包んだ美鈴さんが、長い黒髪を後ろで束ねていた。

「セラフィム・タイプで武装した盗賊です。数は十機、積み荷を渡せって要求しています」

僕が状況を告げる。彼女は予想通り、全く動じたりしない。

「分かった、五分ほどで片づけるわ」

真っ直ぐに僕を見つめる、美鈴さんの強い光を湛えた黒曜石の瞳。
「リステイ！」

僕を呼んだ赤いルージユを引いた唇がふっと和らぎ、彼女は素早く手を伸ばすと、いきなり僕の額を人差し指で力一杯に弾いた。

「あ痛っ！」

「じゃ、行って来るから」

額を抑えてうずくまる僕にそう言つて、決まり悪そうにそっぽを向く美鈴さん。

新しいヘルメットを抱えてブリッジを後にする彼女。僕は涙がにじむ目で、ひとつに束ねた黒髪が踊る背中を見送った。

「お嬢が出るぞ。三十秒の援護だ、景気良くやれ！」

間髪を入れずガデイさんの指示が飛び、慌ただしくなるブリッジ。ジュエル号の大型砲塔がゆっくりと回頭し、轟音が立て続けに響き渡る。心に負った過去の傷が癒えるためには、時間に任せるしか方法がないのだろう。

僕はそんな事を考えながら、びりびりと震えるブリッジの風防越しにカタパルトをじっと見つめる。

次の瞬間、陽光を弾く真紅のプレイヤーがその翼を広げ、赤い閃光となって大空へと羽ばたいた。

6・翼に託した想い（後書き）

真っ白な美鈴の「ブレイバー」が、真紅の機体となって、生まれ変わりました。

心に傷を持ちつつ、立ち直った美鈴。

リステイとの絆が、ほんの少し深まりました。

7・蒼い稲妻（前）

フライト・ユニットが巻き起こす陽炎で、ゆらゆらと視界が歪んでいる。

ジュエル号は居住コア、『ロードウィーバー』を目指す道中、まともや盗賊の一味に襲われたのだ。スクラップを修理した寄せ集めの『セラフイム・タイプ』と、連合軍が運用していた旧機種『VX-1F型』の計七機を撃墜。

しかしさすが美鈴さん、ブレイバーの被弾箇所は皆無だ。

まるで天使が舞い降りたかのようにほとんど衝撃も感じさせず、ブレイバーはジュエル号の甲板へ降り立った。

盗賊達がいくら腕に覚えがあつたって、美鈴さんにはとても敵わないだろう。

でも、盗賊達にとって美鈴さんに撃墜されるのは幸運な事かもしれない。

美鈴さんは盗賊達の機体を行動不能にするだけで、可能な限りコクピットを狙ったりはしないからだ。

「お疲れさまです、美鈴さん！」

コクピットから機体乗降用リフトで降り立った美鈴さんに、僕は駆け寄った。

「ありがとう、リステイ。調子良かったわ」

ヘルメットを脱いで乱れた長い黒髪を背中に流した美鈴さんは、僕が差し出したドリンクのパックを受け取った。でも、何やら不満がありそうな美鈴さんの表情。

「どうしたんですか？」

「ひとつ、逃げられた」

不思議に思つた僕がそう聞くと、美鈴さんは無然とした顔で答えた。

「え？」

「嫌な感じの奴だった。ふらふらと、こっちの様子を伺ってるみたいで」

気分の悪そうな美鈴さんは一度首を回すと、僕にヘルメットを放って超越した。

「ああ気分悪い、シャワー浴びてくるわ。リステイ、後はお願い」

「あ、はい！」

僕は釈然としないまま、美鈴さんの後ろ姿を見送った。

『提出された書類の確認が終了しました。積載されている搬入物資、及び人員の申請に問題は確認されませんでした。運搬船ジュール号の入港を許可します』

幾度となく行き来している顔見知りの運搬船だと分かっている、やはりひと手間掛かる正規の手続きをしなければ居住コアの中へと乗り入れる事が出来ない。

モニターの中の管理官は分厚い書類の束を睨み付け、ひどく真面目な表情で黙々と手続きを続けていたが、急ににっこりと笑った。

『ロードウィーバーへようこそ、歓迎します！』

「わーっ！」と、ブリッジ要員の歓声が上がった。

ブリッジでただひとりの女性、通信士のミホロさんだけが半眼で、はしゃぎまくるクルー達を睨み付けている。

物資の流通を運搬船に頼るしかない居住コアは、訪れる運搬船を心待ちにしている。そしてジュール号のクルー達も、久々に船を下りてゆつくりと旅の疲れを癒す事が出来るのだ。

僕も多少そわそわとして、ブリッジの風防越しに見える街の姿へと目を凝らした。

「あれ？」

なんだか違和感がある光景に思わずごしごしと目を擦り、もう一度その景色をよく見る。

ジュエル号が停泊する港は人の姿もまばらで閑散としている、荷物搬出用の作業車だけがのろのろと行き交っているようだ。

のんびりという雰囲気でもない、もう少し賑わいがあっても良さそうなものだけど。

そしてあちらこちらに、その……悩ましいポーズの女性が描かれている派手な看板が掲げられている。

みんなの歓声の理由が分かったような気がする、ミホロさんに睨まれるのも無理はない。

「このご時世らしい、いい加減な街さ。ふざけやがって」

絶句している僕の横で、ガデイさんがふん！と荒い鼻息で言った。「ありがてえ上得意だが、俺はこの街が好かねえ。この街に停泊している限り俺は部屋で寝てるからな、声を掛けるなよ！」

苦々しく吐き捨てると、ガデイさんは踵を返した。

のしのしと遠ざかる、不機嫌そうな広い背中を眺めていると、

「リステイ、何してるの。あなたにも許可は下りているんでしょ？」

先程とはうって変わって機嫌が良さそうな美鈴さんに声を掛けられた。

白いブラウスにジーンズ。腰には太いベルト、足には程良くたびれた感じのショートブーツ。しかしそれにしても長い足、やっぱり美鈴さんのスタイルは抜群だ。

「ひょっとして、いつもそんな服をブレイバーに積んでいるんですか？」

こめかみに人差し指を当てて首を横に振った美鈴さんの眉間に、きゅっと縦皺が寄る。どうしても良いですけど、皺の痕がくせになりますよ？

「何を馬鹿な事言ってるの、そんな訳が無いでしょう？ パメラおばさんに若い頃の服を借りたのよ」

「うええっ！？」

少し失礼な驚き方だったのかもしれない。でもパメラおばさんは、

いったい何十倍に膨れ上がったのだろうか？少なくとも十数年前、パメラおばさんは美鈴さんと似通ったスタイルだったという事になる。その姿を想像出来ない僕は、思わずのけぞった。

「ほら、もたもたしてしないで出掛けるわよ！」

「出掛けるって、ちよつと待って下さい！　僕にもやりたい事があるんです！」

僕は丸一日使って、ブレイバーのマニピレーターをオーバーホールするつもりだったのだ。ライフルや接近戦用のブレードを扱うため、装甲兵では最も痛みが激しい部分であり、兵装選択時に繊細で確実な動作が要求される。

僕としては、絶対に手を抜きたくない部分だ。

「この居住コアには一応、守備隊もあるから私が出る必要は無いし。毎日飽きもせず機械いじりばかりしているんだから、たまには気分転換しないと頭も体も腐るわよ」

美鈴さんに首根っこを掴まれて、そのままずるずると引きずられていく。

僕はこのまま作業服で街へ出掛けるんですね、やっぱり。

「ぐ、軍本部へのコンタクトは取らないんですか、居住コアなら可能かもしれないでしょう？　仲間の方達の安否についても何か連絡が、部隊への帰投命令だって来ているかもしれないよ？」

出不精の上に機械いじりに至福の時を感じる僕は、なんとか抵抗を試みる。

「あなた、ブレイバーの通信機だってチェックしているんでしょう？　必要なとつくに帰投命令が来るし、搜索隊だって出ているはずよ」

美鈴さんが、微かに赤い唇を噛むのが分かった。

「リステイ。あなたは、ミネルバ隊って聞いた事がないの？」

ミネルバ隊……。美鈴さんの所属部隊名という事以外、僕には心当たりがない。

「ええと、知りません」

「……そう、ならいいわ。ほら、行くわよ！」

美鈴さんはしばらく僕の顔をじっと見ていたが、教えてくれる訳ではないらしい。そのまま彼女に引きずられ、抵抗を諦めた僕はロードウィーバーの街へと出た。

当然の事だがロードウィーバーは、ランディルアとは街の様子が全く異なる。

ひっきりなしに人や作業用車両が行き交うランディルアと違い、この街の空気はどことなく澱んでいて、怠惰な雰囲気漂っている。壊れた建物の補修など、もはや適当で傷むに任せられている状態。街を行き交う人々は皆一様に猫背で、活気がまるで感じられない。そしてたくさんの建物が道沿いに連なっているものの、メインストリートはまるまる歓楽街だ。

昼間から派手な化粧をして、扇情的な衣装を身に付けた女性にウインクされた。

「ここも結構荒れているわね、でもあたしが生まれ育った街もこんな感じ。貧しくて、暮らしている人々の生き方は投げやり。リステイ、狭い路地なんかには顔を突っ込んだじゃ駄目よ、危ないから」
街の様子を眺めながら、美鈴さんは道の真ん中をすたすたと歩いていく。

僕はあまり安心出来ない視線をひしひしと感じながら、美鈴さんの後ろをおっかなびっくりついて歩く。

真っ直ぐな背筋、背中で踊っている長い黒髪。

美鈴さんの歩く姿はとても綺麗だ。胸を張り肩も揺れず、大きな歩幅で颯爽と歩く。

気が付けばすれ違う人々、いやそれだけではない。昼間から酒瓶を抱えて路上に座り込んでいる者、傾いたテーブルでカードゲームに興じている人相が悪い男達。誰もが、美鈴さんを目で追っている。でも多分、当の美鈴さんはそんな視線など全く気にしていないんだろう。

ランディルアを発ってから、すでに数週間が過ぎている。

僕は今でもコクピットで膝を抱えてうずくまる、美鈴さんの姿が忘れられない。

美鈴さんは何も言わないけど、きっと胸の中に渦巻く様々な想いを彼女なりに乗り越え、解決していくはずだ。

「あの、美鈴さんはどうして装甲兵のパイロットに？」

会話の糸口を探していた僕は、彼女の真っ直ぐに伸びた背筋を見ながらそう尋ねてみた。

以前から、気になっていたんだ。

「何よ、いきなり」

美鈴さんは振り返って僕をジト目で見た後、ふんと鼻を鳴らすとまた前を向いて歩き出す。

「生きるだけで精一杯の毎日、夢なんてものは夜寝て見るものよ。もつとも、良い夢を見られる人間は幸せな部類ね。目を閉じれば悪夢に襲われる、そんな人間が大半よ」

醒め切った口調で語る言葉の端々に、美鈴さんがこれまで歩いてきた道の険しさを感じるものの、僕には彼女の感じた事の一握りも理解出来ないのかもしれない。

「あたしは、小さな頃から色々な仕事をしていたから、大型の重機なんかを器用に扱える。装甲兵だって似たような機械よ。ただ居住コアで明日訪れるかもしれない死にびくびくしているなんて、まっぴらごめんだった。……それだけよ」

やっぱり美鈴さんは、とても強い女性だ。運命を受け入れるのではなく、自らの力で運命を、未来を探し切り開く事を選んだのだらう。

「リステイ、あなたは怎うなの？　そう言えばまだ聞いていないわよね。生まれは何処？」

「え？」

ウマレハドコ？

あれ？

僕は……何処で生まれたんだ？

美鈴さんに問われて、僕の頭の中は真っ白になった。

突然に、自分の足下の地面がまるつきり無くなってしまったような感覚。

何か大切な物を無くした不安と恐怖に襲われ、往来の真ん中で立ち止まった僕は息苦しさにめまいを覚えた。

暗雲のように心を覆い尽くす不安が、もの凄い勢いで広がっていく。

どうして、今まで気にならなかったのだろうか？

僕にはある時期から以前の記憶が、まるですっぱりと抜け落ちたように無い。

そんな人間なんているのだろうか。

「美鈴さん、待って……下さい！」

震える両手で胸元のペンダントをきつく掴んだ、喉が渇き呼吸が荒くなる。

僕の前を歩いている、美鈴さんの後ろ姿が歪んで見えた。

（美鈴さん！）

もう一度、声にならない叫び声を上げようとした時、

何者かに襟首を掴まれた僕は、大きな力で真横に引っ張られた。

薄暗く入り組んだ路地裏のゴミ溜まりへ投げ込まれ、背中痛みが一瞬息が止まる。

「なんでえ、しくてやがんなあ。余所者だと思ったんだが、金目の物なんか何も持ってねえのかよ」

ゴミ溜めに埋まっている僕を見下ろしている人相の悪い男達は三人。起き上がるうともがく僕を足で踏みつけ、ひとりの男がそう吐き捨てた。

悔しい、具合が悪かったとはいえ油断した。美鈴さんは……いや、僕が居なくても大丈夫だろうけど。

僕はこいつらに路地裏へと引きずり込まれたのだ。

男達は薄汚れたナイフをもてあそんでいる、まともな職業の奴らじゃない事がひと目で分かった。

今は、こんな奴らの相手をしている場合じゃない。

頭の中でぐるぐると思考がまわっている、僕が下から睨み付けると体を踏みつけている男が薄い笑みを浮かべ、ぐっと足に力を入れた。

息が詰まる。悔しいけど、僕には体を踏みつけている足をはね除ける力が無い。

「へへへ、この街の人間の懐は干涸らびているからな、余所者が道端でぼんやりしてっからよ、おや？」

男がナイフをちらつかせながら、僕の胸元で輝く銀のペンダントを手に取った。

「ほほう、こりゃあ良さそうな品じゃねえか。まあ、これくらいで勘弁してやるか」

男がペンダントを取り上げようと力を入れる、細いけど頑丈なチエーンが軋んだ。

冗談じゃない、このペンダントは僕の大切な物だ。

「やめろっ、この！」

この際ナイフなんて恐れていられない。僕は思い切って体を踏みつけている男の足を掴むと捻り上げた。

しかし、やはり僕の力では重たい靴を履いた男の足が、ちよっと浮いただけだった。

男はバランスを崩したものの、再び僕を強く踏みつけると乱杭齒を剥き出しにした。

「この野郎、おとなしくしやがれ！」

男がナイフを振り上げた瞬間、

「グエッ！」

何やら蛙の様な鳴き声と共に、男の後ろでどさりと重たい音が聞こえた。

ナイフを振り上げたまま、びっくりと震えた男が恐る恐る振り返る。「だから、ぼんやりしちゃう駄目よって言ったでしょう？」

どうにも情けないが、僕にとつて救いの女神の登場だ。武器を持った男二人を簡単に昏倒させ、ぱんぱんと手を払う美鈴さんが立っていた。

「獲物二人を、別々に襲う方法には感心するけど。あんたが踏みつけてるぼんやり君が足を引っ張らないおかげで、こっちは簡単に力タがついたわ」

手櫛で乱れた長い黒髪を整えた美鈴さんの、黒曜石の瞳がぎらりと光った。

「どうするの？ このまま大人しく消えれば、痛い思いをしなくて済むわよ」

「お、お、お、この女あ！」

静かに佇む美鈴さんの全身から発せられている威圧感とは、鈍感な僕でも恐いくらいに感じられる。

美鈴さんのこめかみの辺りが、微かにひくついている。ぜんっぜんこのままで済ますつもりもないんだろう。

彼女が発する威圧感に耐えきれなくなったのか、だらだらと脂汗を流していた男がいきなり美鈴さんに斬りかかった。

美鈴さんの目には、男の動きなど止まっているように映っているに違いない。

彼女は突き出されたナイフをわずかに体を捻っただけで躲し、すれ違いざまに体が泳いでいる男の無防備な首筋へ、鋭い手刀を叩き込んだ。

たったの一撃。あっさりと気を失った男が地面に倒れ伏す。

「まあ、ゴロツキなんてこの程度よね」

美鈴さんは半眼で腰に手を当てると、僕をちらりと睨んだ。

「早くそこから出て来なさい、ゴミ臭いから手は貸さないわよ」

僕が微かにゴミ臭いのか、美鈴さんが微妙に距離を置いている。ちよつとした食事もある、昼間から薄暗い酒場。

ゴミ臭を漂わせる僕など、よくも店内に入れてもらえたものだ。それにしても居心地が悪い、フォークに刺したスジだらけの硬い肉を口に入れ、何の気なしに辺りを伺う。

テーブルに着いている客達は皆、やはり生気を感じないが。人相の悪い者達の目は獲物を品定めするようにぎらぎらとしている。

この街では、さっきのトラブルなど日常茶飯事なのだろう。

「どうしたの？」

カウンターに、グラスをコトリと置いた美鈴さん。

既に二、三杯飲んでいるんだけど、まったくいつもと顔色が変わっていない。

「いえ、何でもないです」

僕にはもう、食べ物の味なんて分からない。

自分はいったい何者なのだろう？ 考えすぎて気が変になりそう。心の中でずっと同じ自問自答を繰り返す、僕の名前は「リステイ・マフィン」……うん、大丈夫だ。

金色の髪に碧い瞳、顔は人並みで背は高い方じゃない。

機械いじりが好きで、今は運搬船の整備士をしている。

そして、僕の目的は……。

思考に埋没しかけていた僕は、視線を感じてふと隣を見る。

鼻をつまんだ美鈴さんが怪訝な表情で、じっと僕の顔を見つめていた。

「わあっ！」

美鈴さん、綺麗な顔が近いです。

驚いて飛び退ろうとした僕は、美鈴さんにかつちりと胸ぐらを掴まれた。

「落ち着いて、静かにしなさい」

鼻をつまんだまま美鈴さんが小声で手招きをする、小さな声を聞き取ろうと僕は遠慮がちに顔を寄せた。どうでも良いけど、昼間っからいちやっついてるみたいだ。

「いいわね、絶対に振り向いたりしないのよ？」

押し殺した声で僕にそう念を押した美鈴さんは、ちらりと視線を後ろへと投げた。

「やっぱり、見張られてるわね。ああ、もう面倒くさい」

僕がゴミ臭いのだろう、鼻をつまんだままの妙な声で美鈴さんがぼやいた。

え、見張られている？

「め、美鈴さん。それはどういう……」

「しっ！ 声大きい。さて、店を出るわよ。さっきの奴らの仲間じゃなさそう、気配の質が違うわ」

美鈴さんはグラスに残っていた酒を飲み干すと席を立ち、ポケットから数枚の銀貨を取り出してカウンターへ置いた。

「ご馳走様、いい商売してね」

誰もが見とれてしまうにこやかな笑顔を浮かべ、カウンター内へ気軽に声を掛けた美鈴さんが席を立つ。

僕は慌てて、彼女の後を追って店を出た。

僕と美鈴さんが店を出ると同時に、店内からガタリと椅子が動く音が聞こえたようだったけど、気のせいなんだろうか。この街の雰囲気、僕が脅えているからなのかもしれない。

相変わらず、すたすたと道を歩く美鈴さんの後ろを付いて歩きながら。僕は恐怖心から後ろを振り返りたいのを必死に堪えていた。だんだん街外れが近くなってくるのか、辺りにはまったく人影がない。そして視線の先に居住コアを外界から仕切っている、大きなドームの壁が見えてきた。

「そろそろ、いいかしら？」

軽い口調でそう言った美鈴さんが振り返った途端、僕は彼女に胸ぐらを掴まれ勢いよく地面へと引き倒された。

7 ・蒼い稲妻（前）（後書き）

格好いい美鈴って、描いてみたかったです（＾＾）
リスティは少しだけ、美鈴の過去に触れました。

8・蒼い稲妻（後）

「伏せなさい、リステイ！」

「も、もう伏せてますっ！」

思い切り地面に顔を打ち付けた僕が、美鈴さんに抗議しようとした次の瞬間、数発の銃声が轟いた。

弾丸が地面に弾け、僕は驚いて頭を抱えて首をすくめる。

「早く建物の陰へ隠れるのよ！」

何処に隠していたのか、美鈴さんの右手には銀色の拳銃が握られている。シリンダーは六連装で長い銃身を持つ、とても古い型のリボルバーだ。

僕は頭を抱えたまま、這うようにして壊れかけの建物の陰へと転がり込んだ。散発的に銃声が響き、朽ちてボロボロの建物が銃弾に削られて弾け飛ぶ。

険しい表情で数発反撃した美鈴さんが、建物の壁を背にして相手の様子を窺う。

「そ、そんな大きな拳銃、何処に隠していたんです？」

「腰、ブラウスの下よ。丸腰でこんな街を歩けるもんですか！」

美鈴さんはそう言うのと銃声が止んだ瞬間、壁の陰から腕だけを出したて続けに数発撃ち返す。

銃声が響く度に背中に電気が走る、火薬のカスがばちばちと顔に当たって痛い。

手に余るほど大型の銃をいとも簡単に扱う美鈴さんは、掌で大型の銃を器用に回し、シリンダーを外すと親指でイジェクションロッドを押し込む。

彼女の足下へ、ばらばらと空薬莖が散らばった。

「予備の弾も少ないのに」

美鈴さんは舌打ちしながら、シリンダーへと弾を込めていく。

「あの、美鈴さん！」

壊れかけの木箱に隠れていた僕が、顔を上げた瞬間。

「この馬鹿、頭を上げるなっ！」

叫んだ美鈴さんに蹴り飛ばされて、僕はまた地面に転がった。さつきまで僕の頭があつた場所の木箱が爆ぜて、木片と粉塵が派手に散らばる。

「屋根の上!？」

着弾地点から射手の位置を予想したのか、美鈴さんは建物の屋根へと銃口を向けたが、それらしい姿はない。

しかし、確実に射手はこちらを見ているらしい。

次々と撃ち込まれる弾丸が、壁にいくつもの穴を穿つ。

「リステイ、路地の奥へ走りなさい！」

「は、はい！」

僕と美鈴さんは狭い路地を縫うように、目に見えぬ追っ手の銃弾に追い立てられるままに走った。

弾丸が建物の壁や足下で弾け、体のすぐ横を掠める。

僕はこの恐怖をよく知っている、しかしこの感覚に慣れるなんて僕には無理だ。

走り続けて辿り着いた先は、朽ち果てた何かの工場跡だった。

見渡す限り、目に映るのは赤茶色。工場の外壁は所々無くなり、剥き出しの鉄骨は錆び放題。元の建物の姿など、もう想像する事も出来ない程に荒れた様が酷く痛々しくて寂しい。

僕と美鈴さんは、そんな時間の流れに置き去りにされたような場所で佇んでいた。

「追い込まれたのかしら？」

気が付くと、銃声が止んでいる。

銃を構えたままで、美鈴さんがつぶやいた。

「何？ 背筋が凍るような、殺気を感じない……」

僕なんかと比べられないくらい、そんな感覚が鋭敏なのだろう。美鈴さんはそれでも油断無く、鋭い視線で辺りを窺っている。

その時、僕と美鈴さんの遙頭上から大きな声が響いた。

「いやあ、まったくイイ女だ。惚れ惚れするぜ！」

その声に反応し、素早く銃口を向ける美鈴さん。

二十メートルほど離れた建物の残骸の屋根で右手の銃を肩に担ぐように持ち、油断ならない笑顔を浮かべているのは、金色の長い髪、深い青色の瞳をした秀麗な顔の優男。

「おいおい、悪い事は言わないから止めとけよ。俺だけじゃねえ、仲間が狙ってるんだ、トリガーへ掛けてる指にちよつとでも力を入れてみな？ あつという間に蜂の巣だぜ」

痩せてはいるが鍛えられた均整の取れた体、屋根の上で悠然と構えている男は勝ち誇ったように言った。

美鈴さんは男を睨み付け、渋々と男に向けていた銃を下ろす。

「煙と何とかは、高いところが好きって言うわよ？ ああ、分からないといけないから教えてあげるわ、何とかっていうのは馬鹿よ、馬鹿！」

「うるせえ、黙って話を聞けっ！ 言っておくが、お前達の命を握っているのは俺なんだからな、そこそこよく理解しろよ！」

簡単に美鈴さんの挑発に乗って抗議する男、どうやらあつという間にメッキが剥がれたようだ。男はひとつ咳払いをすると、金色の前髪を気取った仕草でかき上げる。

「俺の名は“ロアン・ヴェルヌコート” いずれこの、ロードウィーバーを手に入れる男さ」

「は？」

“ロードウィーバーを手に入れる男”だって？ えらくちっちゃな目標だけど、何を偉そうに言ってるんだ。

僕と美鈴さんは、揃って口をぽかんと開けた。

この男は居住コアなんかを手中に収めて、どうするつもりなのだろう。

「あんた、自分の状況が分かって言ってる？ この居住コアで生活してる以上、保護された避難民なのよ！」

げんなりとした表情で指摘する美鈴さんの意見は正しい。

居住コアに規模の大小はあれど、頼りなく不安定な逃げ場所のひとつである事にかわりはない。

「ひょっとして世界をどうのなんて、大口叩くつもりがあるの？それなら軍に志願するか、レジスタンスの一員に加わったらどうなの！？」

「馬鹿野郎！ 物事には順序つてものがあるんだよ！ それにな……」

ロアンは呆れたように、ひらひらと手を振った。

「俺には、どちらもまともな組織に思えないぜ。連合軍は旧体制からの支配者に飼われている犬ところだ。レジスタンスはどの組織も、セラフィムの撃墜だけに至福を感じている勘違い集団だ、そんなオンボロ組織の歯車になるのはご免だぜ！」

僕は、ロアンという男の言葉にはっとした。

少し歪んではいるものの、現状の情勢を考えれば彼が間違っていると言えない。

「あなたの言いたい事は分かります、だからって……」

「黙ってるや、モヤシ野郎！ お前に用事はねえ！」

声を上げた僕は、みなまで言う前にぴしゃりとロアンに釘を刺された。

どうやら僕の存在は眼中にないらしい。何だよ、せっかく同意してやったって言うのに。

「お前、真つ赤な装甲兵に乗ってるだろう。あの馬鹿でかい運搬船の用心棒だよな？ お前の赤い装甲兵は、盗賊の間じゃ有名だぜ？」

「盗賊連中の間で有名になったって、嬉しくもなんともないわよ」

つんとそっぽを向いたまま、半眼でばやく美鈴さん。

「俺もお前の大層な噂は聞いてはいたが、お笑いだぜ。この間は、俺に一撃も浴びせられなかったよなあ？」

その言葉に、美鈴さんの眉がぴくりとひくついた。

「へええ……そう。あのふざけたセラフィムは、あんたが乗っていたの」

美鈴さんがその綺麗な顔に、凄絶な笑みを浮かべる。

そのあまりの迫力に、僕は一瞬で凍り付いた。

「俺の通り名は蒼い稲妻さ。どうだ女。お前、俺と組まないか？」

隣に生えてる自分の身すら守れねえような、ひよろひよろのモヤシ野郎なんかに構っているなよ。俺の処に来い、二人でこの世界を牛耳ってやろうぜ！」

世界を牛耳るだって？　あまりにも馬鹿げている妄言だ。しかし、男の高圧的だが熱心な誘い。沈黙している美鈴さんの姿に、僕は急に不安になったのだが。

「笑わせないで。四方八方から突きつけた銃で脅しておいて、手を組もうも何もあったもんじゃないでしょう！」

男の誘いを、氷の微笑を湛えた美鈴さんが思いつきり突っぱねた。
「リステイ、ごめん！」

「え？」

いきなり美鈴さんが振り上げた長い足が、まるで鞭のようにしなり、ぼんやりしていた僕の首に巻き付く。思いつきり蹴り飛ばされた僕は地面に倒れながら、スローモーションのように美鈴さんの姿を見ていた。

彼女は僕を蹴り倒した勢いのまま、素早く銃を構えるとトリガーを引き絞った。

目にも留まらぬ、速射の五連射。

茜色の空に銃声と、金属を打ち付けるような音が響く。

僕が地面に倒れ、再び顔を地面に打ち付けた瞬間。

ライフルを持った五体の機械人形達が、廃工場の屋根から転げ落ち、壁の陰からヨタヨタと現れては地面に倒れ込んだ。

「き、機人兵！」

ずきずきと痛む顔を押さえて立ち上がった僕は息を飲む、美鈴さんが撃ち抜いたのは五体の機人兵だったのだ。おそらく、スクラップを回収して改造したものだろう。所々パーツの形状は異なるが間

違いない、ヴィラノーヴァが運用する機械仕掛けの歩兵だ。

美鈴さんが放った銃弾を、目ともいえる二つ並んだ血のように赤いモニターレンズの間に受け、稼働不能になった機人兵はぴくりとも動かない。

「あいつ……。逃げたようね」

舌打ちした美鈴さんがため息をつく。

僕は男が立っていた廃屋を見上げたが、そこにロアンの姿はもう跡形もなかった。

「機人兵じゃ、殺気なんて感じない訳よね」

つぶやく美鈴さんは機械仕掛け故に殺気など放出しない殺戮者、機人兵が隠れている場所をすべて見抜いていた。

そして機人兵が発砲したライフル弾が僕に当たらないように、とつさに蹴り倒したのだ。

しかし美鈴さんの鋭い射撃は、僕と美鈴さんを照準に収めていた機人兵にライフルのトリガーを引かせる事を許さなかった。

「機械人形を従えて、王を夢見る馬鹿な奴……か」

「何です？ それ」

「あの馬鹿の事。さ、帰るわよ」

スクラップになった機人兵の残骸をその場に残し、僕達が立ち去ろうとしたその時、

「いやいや、おっかねえ女だな。しかし良い度胸だ、肝が座ってやがる。ますます気に入ったぜ！」

幾方向からも、ロアンの声が響いてくる。

声が響いてくる方向を特定することが出来ない。

「また会おうぜ、今度は逃げねえから覚悟しな。“紅の天使”と噂に名高い、お前の装甲兵を地上に叩き落としてやる、この空に王は二人もいらねえからな」

ロアンが叩き付けたのは美鈴さんへの挑戦状だ。その言葉を最後にロアンの気配が消えた、暮れなずむ空に静寂が訪れる。

「迷惑な話よね。私は別に、王を気取っている訳でもないのに……」

再び構えていた銃を下ろした美鈴さんの、黒曜石の瞳は笑っていない。

「かかって来なさい」……そう言わんばかりの美鈴さん。
静かに揺らぐ炎を映す美鈴さんの瞳に、僕の背筋は凍り付いた。

『ジュエル号、出航の時刻です。それでは貴船の旅路に幸運を！』
三日後。管理官の笑顔に見送られて、ジュエル号はロードウィーバーを後にした。

ハメを外しすぎたのか、クルー達の顔は疲労の色が濃い。

二日酔いで寝込んでいる者も多数居るようだ。

そして意気消沈しているクルー達に反して、キャプテンシートに座っているガデイさんは嬉々としている。

しかし、ジュエル号が居住コアの管理区域を出てしばらくした時だった。

いきなり空の一点が煌めき、一条の火線がジュエル号のブリッジを掠めた。エネルギー弾に照らされたブリッジの風防がびりびりと震え、ブリッジ内が一瞬パニックに陥る。

「落ち着け、馬鹿野郎ども！ ミホ口、すぐにロードウィーバーの守備隊に出動要請をしろ！」

ガデイさんの指示に、ロードウィーバーと交信した女性通信士、ミホ口さんが悲鳴のような声を上げる。

「駄目です！ 当居住コアの管理区域外の戦闘に、守備隊は出動しないそうです！」

ガデイさんがぎりぎり歯ぎしりをして、キャプテンシートの肘掛けを力任せに殴りつけた。

「だから俺は、この街が好かねんだ！」

『おい、早く出てこいよ、赤いの！』

ジュエル号の通信器に強制的に割り込んだのだらう、ブリッジ内

に男の声が響いた。

通信器越しでややくぐもっているものの、間違いないあの男……。ロアン・ヴェルヌコートの声だ。そして、ジュール号の前に立ちほだかった一機の装甲兵。僕はその機体をよく見ようと、ブリッジの風防へと駆け寄った。

晴れ渡る青空のような色の、耐熱樹脂塗料で塗装された機体。

見た目は何となく美鈴さんのブレイバーに似ているが……。いや、僕は大きく目を見開いた。メインカメラの形状と、胸部と脚部の装甲の形状が決定的に違う。大きく膨らんだ脚部は、大型のバーニアを内蔵しているに違いない。

そして『F型』が標準的に装備しているフライト・ユニットのシルエットも違う。

僕の脳裏に、閃くものがあつた。

「あれはVX-5F型！？ そんな、開発は設計段階で頓挫していたはずだ。まさか実際に製造された機体があつたなんて！」

目の前に現れた幻の新型機に、僕は息を飲んだ。

「あの馬鹿、ほんとに出て来たの？」

相手がどんな機体を使っているかなんて、些細な事らしい。黒髪をさつと束ねてブリッジを後にしようとする美鈴さん。

僕は慌てて彼女の前に走り出ると両手を広げて立ち塞がった。

「待って下さい、あの機体は新型です。形式名はVX-5F型、いわばブレイバーの後継機ですよ！ とにかく危険だ、相手の武装も機体性能もまったく予測出来ない！」

ロアンって男は、あの機体をどこから手に入れたのだろう、実機は存在しないはずなのに。

「大丈夫よ。そこをどきなさい、リステイ」

「駄目です、どきません！ 試作機レベルでもVX-4F型より、いやブレイバーよりも機動力や装甲材が格段に向上していたらどうするんですか！」

そつだ。そんな賭け事のような戦闘を、認めるわけにはいかない。

『おいおい、やるのかやらねえのかはつきりしろ！　このまま黙ってるなら、ブリッジを撃ち抜くぞー？』

こちらの混乱を見透かしてでもいるのか、へらへらと神経を逆撫でするように口アンが挑発してくる。しかし相手のどんな挑発でも、美鈴さんの安全を考えれば安易に乗るわけにはいかない。

「どきなさい、リステイ！」

「絶対に駄目です！」

美鈴さんの強い口調に怯むことなく、僕は何度も首を横に振った。

「しょうがないわね」

呆れたように肩をすくめた美鈴さんが、僕の額にずっと人差し指を当てた。

僕は反射的に硬く目を瞑る、しかしテコでも動くつもりなんて無い。

「私を信じられるって聞いた時に、あなたははつきりと答えたわよね、あれは嘘だったの？」

「いいえ、嘘じゃありません！　……でも」

僕は口籠もった。

可能ならば全ての情報や状況を的確に把握、分析した上で出撃をして貰いたい。美鈴さんが心配な事には変わりないからだ。

「あれが新型か何か知らないけど、あなたはブレイバーに全ての力を注いでくれているのでしょうか？」

そう言った美鈴さんの黒曜石の瞳が微笑んだ。

それは、僕に全幅の信頼を寄せてくれている証。

「違うの？」

「いいえ」

僕は広げていた手を下ろして、つぶやくように答える。

「ああいう男は一度思いつ切りぶん殴って、鼻っ柱をへし折ってやらなきゃならないのよ」

「あ痛っ！」

美鈴さんはそう言って、やっぱり僕の額を人差し指で弾いた。額を抑えてうずくまる僕を見下ろして、満足げに頷いた美鈴さんがヘルメットも持たずにブリッジを出て行ってしまった。

そしてしばらくの後、あろう事か左腕の大型接近戦用ブレードのみを装備したブレイバーがジュエル号から飛び立ったのだ。

「美鈴さん。 なっ、何をしているんですか！」

驚いた僕は慌てて、ミホロさんに通信機を借りようとしたが、ガディさんに首根っこを掴まれた。

「お前は、お嬢を信じてるんだろ？　ここでしつかりと見てろ！ 決着は一瞬だぜ？」

僕の首に太い腕を巻き付けて、ごつい歯をむき出したガディさんが、にやりと笑った。

向かい合う二機、「紅の天使」そして「蒼い稲妻」と喻えられる装甲兵。

その姿は、あまりにも対照的だ。

「さつさと始めましょう、賭にもなりはしないから」

『この野郎、とことん馬鹿にしゃがって』

美鈴の気のない台詞に、通信機のスピーカーから聞こえるロアンの声が怒りに震えている。しかし長いため息が聞こえた後、その口調がやや変化していた。

『なあ、ひとつ聞かせてくれよ。 お前、名前は何て言うんだ？』

「美鈴よ、李 美鈴」

『じゃあ美鈴、お前にも分かるだろう。 世界が間違った方向に向いている事に違いはない、人間がこのままちりぢりのばらばらじゃあ、あの海上都市の羽根付き野郎に根絶やしにされちまう。 奴らに対抗するには有能な統率者が必要なんだよ』

ロアンの声が、真剣みを帯びてくる。

『俺は本気で言ってるんだぜ？俺とお前が組めば居住コアばかりじゃない、連合軍だってひとつにまとめられるだろう。新しい組織を起ち上げるんだ、近隣に陣を張っているレジスタンスへも協力を打診している。相手が了解するのは時間の問題さ！』

馬鹿げているが、どうやらこの男は本気のようなのだ。

開発が頓挫した新型の装甲兵を手に入れているなど、どういった身分なのかは薄々想像はつく、相当な人脈も持っているのだろう。

しかし、美鈴はそれが気に入らない。

この男は、運が良いのだ。

生まれながらに恵まれた環境や能力を持ち、自分を担ぎ上げてくれている取り巻きも多いかもしれない。わずかばかりの苦労はしているだろうが、その立ち居振る舞いや言葉から感じる。

この男は本当の苦しみや悲しみ、そして恐怖を知らない。

「興味が無いって言ったでしょう！それにあんたが言うモヤシ野郎のほうが、真剣に生きているように見えるわよ？」

『はっ！あのモヤシ野郎が真剣だと？おい美鈴、お前の目は節穴かよ』

「さあね、まだ分からないけど」

思わず口をついて出た言葉、しかし美鈴はリスティにそんな何かを感じるのだ。

体の線が細い割に頑丈なのは確かだが、居住コアの片隅で震えているのがよく似合うほど、弱々しい男に見えるのに。

「あんたはリスティなんて眼中に無いようね、でもあたしは違うのよ」

そうだ、美鈴にはリスティの碧い瞳が映している物が、いったい何なのか興味がある。

『仕方ねえ、それなら今すぐにお前を撃墜してやるまでさ。そうすれば考えも変わるだろうからな！』

語気荒く叫んだロアンが、蒼い『VX-5F型』のフライト・ユニットを全開にした。

弾けるように加速するその姿はまさに、暗雲を切り裂き紫電を伴って突き進む蒼い稲妻。

新型の装備、そして高い機動力、進む光剣を抜き放ち突進してくる。

今頃ジュエル号のブリッジでは、リステイが肝を潰している事だろう。

美鈴は赤い唇に微かな笑みを浮かべた後、一瞬で表情を引き締めた。

大きく左腕を真上に振り上げた真紅のブレイバーが、勢いよくその腕を振り下ろすと同時にシールドから長大な接近戦用ブレードが姿を現し、刀身が唸りを上げて振動を始める。

真っ向から突進する「蒼い稲妻」と「紅の天使」が一度すれ違い、旋回した双方が機体の体勢を整えて再び激突した。

それは一瞬の出来事だった。

ロアンの蒼い機体「VX-5F型」が振り抜いた光剣が、残像と共に虚しく空を斬る。

信じられぬほどの速さで、機体を逆さまに捻ったブレイバーの長大なブレードが、ロアンの機体背部に装備されているフライト・ユニットの両翼を切断していた。

『美鈴、覚えてろよおお……』

フライト・ユニットの揚力を失い、墜落していく蒼い機体が森の中へと消えていく。

しぶとそうな男だ、おそらくかすり傷ひとつ負ったりしないだろう。

「顔を洗って出直して来なさい。しばらくは覚えていてあげるわよ」
陽光を弾く真紅のブレイバーが、長大なブレードをシールドへと収める。

しかしモヤシ野郎とは良い喻えだ。

乱れた黒髪を手櫛で背中へと流し、ふとそう思った美鈴は苦笑を閃かせた。

プレイヤーがジュエル号に戻るまで、僕は生きた心地がしなかった。

美鈴さんは今、クルー達全員と酒宴の真っ最中だ。
飲み過ぎていなきやいいんだけど。

夜の闇の中をジュエル号の巨体が進む、まるで本当に海の上にいるようだ。

船の心臓ともいえる巨大なエンジンの重い振動が、甲板の上で両膝を抱えている僕の体に響く。

流れる景色は闇夜に溶け込み、過ぎゆく時間のように留まることなく流れていく。

すべてを包んでしまう、漆黒の闇。その闇に吸い込まれてしまいそうな、そんな不安を人は恐れるのだろう。僕は掌に包んでいる銀のペンダントを、ぐっと握りしめた。

やはりいくら考えても、僕には自分自身の過去が思い出せない。記憶の所々に鍵が掛かっているような、そんな違和感を僕はどうする事も出来ないでいた。

だが、僕自身の事で悩んでいる暇なんか何処にも無い。

そうだ、僕に残されている時間はあまりにも少ないのだから。

人々に救いの手を差し伸べた巨大な海上都市「ヴィラノーヴァ」の統率者、フレグランス・ウィスラー。

彼は海上都市にそびえる尖塔から荒れ果てたこの世界を眺め、何を想い続けたのだろう。

この星の痛みか、世界の行く末か、それとも愚かな人間達の末路なのか。

「あなたは、僕に何をさせようって言っんです?」

膝を抱えた両腕に、顔を埋めてつぶやく。

金色の髪を撫でる冷たい夜風は、耳元で笛のように悲しい音色を

奏でる。

僕が生きている限り、その嘆きの調べは心を責め続けるのかも
れない。

9・風に舞う少女の声（前）

大きな氷をアイスピックで砕き、コック姿が似合う厨房係のスイフリーさんが手際良く氷嚢を用意してくれた。

スイフリーさんは、こんな世の中でも精力的に探求を続けている逞しい料理人だ。様々な土地で修業をしていたという、スイフリーさんの料理はとても美味しい。彼の手による料理の味は懐かしくもあり、また新しくもあり長い旅をするクルー達の心を癒し、元気付けている。

「よし、氷嚢はこれくらいでいいだろ。それから、ほい！ 出来立てだよ」

「あつ！ 有り難うございます」

ぽん！と、大きめの保温ケースを受け取る。

「しっかし、お前さんも大変だねえ」

スイフリーさんが、からからと笑った。

「はあ……」

僕はどう答えていいのか分からず、曖昧な返事をした。

スイフリーさんに用意して貰った氷嚢と保温ケース、それからテロップ船医に渡された薬を持って、ジュエル号の通路を歩く。

美鈴さんの部屋の前で、扉をノックをしようと手を挙げると、
「はっ……くしょん！」

部屋の中から、大きなくしゃみがひとつ聞こえた。

鬼の霍乱か？ いやいや、本人に聞こえたらそれこそぶん殴られるので言えない。

なんと美鈴さんは、風邪をひいて床についてしまったのだ。

こんこん。

『どうる〜』

扉を遠慮がちにノックすると、やや鼻詰まりの声がした。

どうやら美鈴さんは「どうぞ」と、言っているらしい。

「入りますよ、美鈴さん」

何しろ女性の部屋へ入らなければならないのだ。

どうしても緊張してしまう僕は、ぎこちない動作で扉を開けた。

「あゝりすていゝ」

ベッドに横になっっている美鈴さんが、赤い顔で苦笑いをした。

「気分はどうですか？」

「ちよつとは、ましになつたみたいね」

僕は美鈴さんの額へ乗せられていた氷嚢を取り替えると、ベッド脇に椅子を寄せて腰掛けた。クルー達がこぞつて美鈴さんの看病役に立候補したのだが、ジユエル号の発言権第二位、パメラおばちゃんの鶴の一声で、僕がその看病を受け持つことになつたのだ。

そのおかげであちこちから浴びせられる羨望の眼差しが、船内を歩く僕の体には容赦なく突き刺さってくる。

「体温計、見せて下さいね」

三十七度六分。

まだ熱があるみたいだ。

「大人しくしていれば、熱も下がりますよ。ところでお腹、空いてませんか？」

「あゝまたミルク粥なの？ あたし、あれは嫌いなものよゝ」

ここ数日ミルク粥しか口にしていない美鈴さんは、情けない声を出して毛布の中に潜り込んでしまった。

ああ、氷嚢が外れちゃったじゃないですか。

食事をきちんと摂らないと、風邪も早く治らない。

「ミルク粥じゃありませんよ」

取りあえず吊つてあつた氷嚢を外して置き、僕がちよつと得意げに保温ケースを取り出して言うと、美鈴さんは何やら疑り深そうに毛布からちよつとだけ顔を出した。

「ほんと？」

「ほんとですよ」

保温ケースを開けると、中には蒸し上がったばかりの大きな肉饅

頭がふたつと、温かいお茶のパックが入っていた。

「わぁ！ 美味しそう！」

歓声を上げ、嬉しそうに飛び起きた美鈴さんは乱れているパジャマの胸元に気付き、真っ赤に頬を染めると、慌てて布団を掻き抱いた。

「ううまだ頭がふらつくわね。あ、リスティ。あんまりこつち見ないで、汗くさいから」

「は、はいっ！」

カーディガンを渡し、慌ててそっぽを向く僕。

「あの、スイフリーさんに頼んで作って貰ったんです。冷めないうちに食べて下さい」

「ありがとうございます」

美鈴さんは大きな肉饅頭を手に取り、勢いよくはむ！と頬張った。

「んーおいひい！」

喉の調子が悪いのか、ちよつと声が荒れている。もふもふと、幸せそうに肉饅頭を食べている美鈴さん。テロップ船医にも心配ないって言われているし、ミルク粥でなければ大丈夫。どうやら食欲もあるみたいだ。

僕はここ数日美鈴さんの看病をしながら、彼女の普段の姿を感じていた。

パイロットスーツに身を包んでいる時とは、全く違う。

抜き身の剣のような、そんな冷たい雰囲気は全く感じられない。その仕草や笑顔は、どこにでもいるごく普通の女の子の人と何ら変わりはないのだ。

「あで？」

お茶のパックにストローを挿そうとした取ろうとした美鈴さんが、変な声を出した。

「どうしたんですか？」

「今、揺れなかった？」

「そうですか？船はまだ停泊中ですよ……あれ？ほんとだ、揺れてる」

ジュール号は今、『エディフィス』という小さな居住コアに停泊しており、まだ朝方だというのに、クルー達は荷物の搬入出で忙しく働いている。

『エディフィス』は少数派の民族の人達が力を合わせて作り上げた居住コアだ。遠い昔から脈々と受け継がれる歴史や文化を護り続けている、今ではとても貴重な街だ。

巨大な運搬船が揺れるほどの大きな荷物の搬出は無かったはずだけど、確かにジュール号の船体が揺れている。

僕と美鈴さんが、互いに怪訝な表情で顔を見合わせたとき、部屋のインターフォンが鳴った。

「おいリスティ！居るか？」

切羽詰まった声は、機関士のモッズさんだ。

「そんなに慌てて、どうしたんです？まさか船のエンジンに火でもついたとか」

「馬鹿野郎、そんなヘマするかよ！いいから格納庫に来い！いいか？すぐにだぞ！」

冗談など言っていられる場合ではないようだ。そう早口でまくし立てて、モッズさんはインターフォンを切ってしまった。

「どうしたんだろう？」

船の揺れは、まだ続いている。

「美鈴さん。食べ終わったら薬を飲んで、ひと眠りして下さい」

「そうね、そうするわ。何か分かったら教えて」

素直な返事、美鈴さんも事態が気になるようだ。しかし、今の自分の体の状態では何も出来ないのが分かっているのだろう。

僕は椅子を立つと、急いで部屋を出た。

「うわっ！」

格納庫へやって来た僕は思わず声を上げる、揺れの正体が分かった。

振り回される鋼鉄の拳が、格納庫の内壁を叩く。

なんと、ブレイバーが動いていたのだ。

「おお、リステイ。来たか！」

「も、も、も、モッズさん。こっこれは一体!？」

「ドモってるんじゃないよ。何とか止める方法を考えろ！」
頭にげんこつを落とされた。

どうしてこの船のクルーは、口より手が先に出るのだろう？ 涙目の僕が頭を抱えて呻いていると、ブレイバーが頭をキャットウォークへと思い切りぶつつけた。

ああっ！ 塗装が剥げるっ！

じゃない！ 駄目だ。あれではそのうち壊れてしまう。

ふと気が付けば、格納庫で右往左往しているクルー達に混じって五、六人の子供達が歓声を上げている。

「？」

あの子達は何だ？僕は不審に思いながらも、乗降用リフトへ向けて走った。

「近寄るな。リステイ、危ねえぞ！」

「大丈夫です！ とにかく僕に任せて、皆さんは離れていて下さい！」

機体乗降用のリフトへ乗り込むと、アームを伸ばしてキャットウォークへと飛び移る。横目で眼下のブレイバーを見ると、酔っぱらいのようにたよたと足踏みする足下がおぼつかない。美鈴さんはブレイバーの姿勢制御を、コンピュータ任せにはいない。だから素人には、まともに歩かせる事など出来ないだろう。

ブレイバーはまるで酔っぱらいのようにふらふらしているだけで、ライフルなどの武装を取る気配はない。今のうちだ、僕はさっと天

井へ目を走らせた、うまい具合にクレーンが空いている。

僕はキャットウォークの手摺に掛かっていたワイヤーロープを一本外し、輪になっていいる両端のうち一方をフックに引っ掛けた。

そしてもう一方の輪っかに足を引っ掛けると、ワイヤーロープをしつかりと握り、依然ぎくしゃくと動いているブレイバー目掛け、思い切ってキャットウォークの手摺を蹴って跳んだ。

今だ！ ワイヤーロープから手を放し大きくジャンプした僕は、ひしっとブレイバーの頭部へとへばりついた。

でたために振り回されるマニピレーターの動きに注意しながら、僕は胸部装甲に取り付けられている梯子を伝って、腹部のкокピット付近に辿り着く。

小さなパネルを開け、非常時に外部からハッチの開閉を操作する手動コックを思い切り捻った。高圧エアの排出される音が響くと同時にブレイバーが緊急停止し、ハッチが勢いよく跳ね上がる。

「この盗人め、あちこち剥げちよろけになったじゃないか！ 耐熱樹脂塗料だって安くないんだぞ！」

大声で威嚇しながらкокピットの中を覗いた僕は、あぐりと口を開けた。

「こっ、子供？」

機体が緊急停止したときにシートから投げ出され、頭でも打ったらしい。кокピットの中では、一人の男の子が目を回して伸びていた。

ブレイバーのкокピットで目を回していた少年と、デッキではしゃいでいた子供達は格納庫でひとかたまりに集められ、皆一様に神妙な顔でうつむいている。

どうやら荷物搬出の作業中に、クルー達の隙を見て格納庫に入り込んだようだ。

「子供は、これくらいの元気がねえとな！」

そう言って、ガディさんは機嫌良く、がははと笑った。

小さな居住コアだが、『エディフィス』は大切なお得意先らしい。だからジュエル号からのきついお咎めは無しとしても、まあそれなりのお叱りは覚悟して貰わなければならないだろう。

「ほら！ ごめんなさいは？」

子供達を仁王立ちで見下ろしている女性……ミーシャさんが、強い口調で言った。

取り分けて美人と言うほどではないが、素朴で強さと優しさを感じる、そんな女性だ。

そして彼女のこめかみには、きつちりと大きな怒りマークが浮いている。

「エアン！」

十二歳くらいかな？ ミーシャさんが、最年長らしい男の子の頭にゲンコツを落とした。

うわ、痛そう。

コクピットで目を回していた男の子でミーシャさんの弟、エアンは少し顔をしかめたが仏頂面で僕を見上げ、

「ごめんなさい」

わりと素直に謝った。

「ごめんなさいい」

男の子三人に、女の子二人のお子様達も情けない声を合わせる。

「本当にすみません。子供達がご迷惑をおかけしました」

「いや、ははは……まあ、怪我もないようですし、剥げた塗装は塗り直せばいい事ですし」

深々と何度も頭を下げるミーシャさんを宿めるように僕は答えたが、引きつった口元はどうしようもない。

美鈴さんの看病で、船室と格納庫をひっきりなしに行き来していた僕は、ブレイバーをメンテナンスモードのまま放置していた。

だから、僕にも間違いない責任の一端がある。

ああ、剥げた塗装を直さなきゃ。

「ほら、帰るのよ！」

ミーシャさんの後をぞろぞろと、神妙な顔でお子様達がついて行く。

「はあ……」

僕は、深いため息をつく。

結局ブレイバーの整備と余分な補修作業は夕方近くまでかかり、その間僕は美鈴さんの世話もあるので、格納庫と船室をまた何度も往復しなければならなかった。

「ああ、大変な一日だった」

ひと仕事もふた仕事も終えて、涼しい風に当たろうとデッキをに向かつて歩いていた僕はぎよつとした。

今日の疲労の原因を作ってくれた少年の姿が、目に映ったのだ。物陰から顔を覗かせて、勝ち気そうな瞳できよろきよろする度に黒髪が揺れる。涼しげな衣服から伸びているな手足は、よく日に焼けていて元気そうだ。

ははぁん。

少年の魂胆が頭に閃いた僕は、死角からそろりそろりと近づくと少年……確か名前はエアンだったかな？ に、声を掛けた。

「おい、まだ懲りてないのか？」

「うわぁっ！」

エアンは文字どおり飛び上がって驚くと、その場に尻餅をついた。「残念だったな。いくら頑張ったところで、お前には動かせないよ」苦笑混じりに僕が言くと、恨めしそうに僕を見上げていたエアンは、ぶんぶんと首を横に振った。

「違うよ！ 俺、人を捜していたんだ！」

「人捜しだつて？ 一体誰を捜していたんだ？」

疑わしい目つきで問うと、エアンは僕を指さした。

「兄ちゃん、整備士なんだろう！？」

オフロードバイクの後ろに、エアンを乗せて走る。エアンに腕を引つ張られるままに、僕は夕暮れの街へと出た。もちろん、船長であるガデイさんに許可を取っての外出だ。

ただあまり長居は出来ない、美鈴さんの具合が気懸かりだからだ。
「エアン、この方向でいいのか？」

「うん！ へへへ」

とにかく一緒に来てくれと言ったきり、エアンは何も話そうとはしない。

何も分からない僕は仕方なく、慎重にバイクのアクセルを開けた。街はずれを抜け、薄暗くなってきた森の小道を疾走する。

まさか、昼間の仕返しでもする気じゃあないんだろっな？

「ほら、兄ちゃん。あれだよ！」

どの位走っただろう？ 後ろから、エアンが前方を指差す。

バイクのライトに照らし出された、その姿は。

あれって、ああっ！

驚いた僕は、思いきりブレーキをかけてしまった。バイクが横滑りを起こし、もうちょっとで転倒するところだった。

驚いた、暗い森の中に一機の装甲兵が鎮座していたのだ。

ライフルやシールドなど装備はそのまま、駐機姿勢ではなく脚を投げ出し、何かぐったりしたように頭を垂れている。僕はバイクから降りると、手にした大きめのマグライトを掲げた。

「へへ、格好良いだろ！ イリユーザーって名前を付けたんだ！」

エアンは嬉しそうに鼻の頭をこすると得意げに、むん！と胸を張った。

「強そうな名前じゃないか」

僕はそうエアンに答え、もう一度機体を見上げた。

マグライトの光に照らし出された機体は、薄いグリーンを基調としたボディカラーだ。

装甲兵の性能の進化は、それだけ戦争の激化を示している。これはブレイバーなどの『VX型』よりも、一世代前の機体。機体形式名は『VM-2型』だ。

「なあエアン。これ、どうしたんだ？」

僕の隣で同じように、機体を見上げているエアンに聞くと、

「半年くらい前に、兵隊が乗り捨てていったんだ」

頭の後ろで腕を組んだエアンがそう答えた。

「降りてきたパイロットがやってられねえとか、俺は死にたくないとかって、ぶつぶつ言ってたけど、さっさと歩いてどっかへ行っちゃったんだ」

おそらくは脱走兵の類だろう。気持ちは分かる、まあそう思うのも無理はない。

僕はとりあえず破損部分が無いか観察しようと、機体へよじ登った。

「こいつは動くのか？」

「ううん、ぜんぜん動かないんだ……」

下にいるエアンは口をへの字に引き結んで下を向き、悔しそうにつぶやいた。

「どうした、エアン？」

その落胆ぶりが気になったので装甲兵の脚から降りて側へ行くと、エアンが勢いよく顔を上げた。

「兄ちゃん！ 兄ちゃんなら、イリユーザーを直せるだろう？ こ

いつが動けば、盗賊達をやっつけられるんだ！」

「盗賊だつて？」

僕は眉根を寄せる、真っ直ぐに僕を見つめる少年の瞳は真剣だ。

闇に閉ざされた深い森の中は危険がつきまとう、僕はエアンを連れてコクピットへと潜り込んだ。

「エアン、詳しく話してくれないか？」

僕はそう言いながら、コクピット内の計器類をチェックを始めた。

機体には破損箇所もなく、程度は上々のようだ。

「もう、一年くらい前になるんだけど」

狭いコクピットの中で膝を抱えていたエアンは、ぽつりぽつりと話し始めた。

エアンの話では、街の北方にある山にならず者達の一団が居を構えたというのだ。ならず者達は時々エディフィスの街へとやって来ては、思うがままに暴れ回っているらしい。

街の人達にも、大勢の怪我人が出ているようなのだ。

強者が弱者を食い物にする、やるせない時代。

「あいつら、羽がある装甲兵を持っているんだ。敵うはずないよ」

エアンは、きつく唇を噛んだ。

羽のある機体、それはおそらく……。

詳しくエアンの話を聞いてみると、カラーリングこそディープパープルになっているようだが、やはり間違いない『セラフィム・タイプ』だ。

このご時世、あちこちにセラフィムや軍の装甲兵のスクラップが転がっている。部品を掻き集めれば、一体の装甲兵を組み上げることなど造作もないだろう。

ましてや、何の力も持たない街の人々にとって、たとえ出来損ないでも装甲兵という兵器はとてつもない脅威となるのだ。

「父ちゃんや大人達はみんな、黙ってあいつらの言いなりになるんだ。でも俺は嫌だよ、そんなの！」

エアンはぐつと拳を固めたあと何かに気付き、がっくりと肩を落とした。

そうか、それでブレイバーを動かそうと思ったのか。

子供は大人達が考えているように、無邪気なだけの存在ではない。彼等なりの尺度や、視点で物事を捉えている。

そして自分の出した結論が間違いなく正しい事なのに、その純粋な正義は上手く伝わらず、大人達には理解を示して貰えない。

大人達にはまた複雑な事情もあるのだが、子供はまだ自分自身の力が足りないことに、焦ったり憤ったりもするのだ。

「兄ちゃん、お願いだよ！」

少年の瞳は何処までも純粹で、汚れがない。

「エアン」

僕がぽんと頭に手を乗せるとエアンは案の定、子供扱いされたと思ったのだろう。不服そうな顔をした。

「まだお前には、装甲兵の操縦は無理だよ」

自分でもよく分かっていることなのだろうが、エアンは悔しそうに唇を噛んだ。

「諦めるなよ、ジュエル号にも装甲兵は積んである。盗賊退治は船長に掛け合ってみるさ」

まだ細い肩を叩きながらそう言うと、エアンが顔を上げた。

「ほんとに！？」

「ああ、それからイリユーザーは、僕がちゃんと直すよ」

僕はコクピット内を見回し、少々動きの固い操縦桿を握りしめた。

「兄ちゃん！」

「そうだ、僕の名前はリスティっていうんだ」

「うん！ リスティ兄ちゃん」

瞳を輝かせているエアンに、僕は約束した。

「ああ、困った」

エアンとの約束まで時間が無い、僕は美鈴さんの部屋の前でうろうろしていた。

出掛ける前に事情を話しておこうと思ったのだが、あまりにも早い時間なので美鈴さんはまだ寝ているらしい。

扉をノックをしても、返事がないのだ。

「大丈夫かな？」

何か音でも聞こえないかと、扉に張り付いて耳を澄ませていると、何やらとんとんと肩を叩く者がいる。

誰だよ、まったく。

「何やってんだい？」

「うひょおおっ！」

聞き覚えがある声、振り向いた僕の目の前十センチに、パメラおばちゃんの顔があった。その迫力に尻餅をついた僕は、脂汗を流しながら通路を後ずさる。

「なんだいまったく。人の顔を見るなり、失礼な子だね！」

僕を一睨みするパメラおばちゃん。

その手にはネコ柄のほんわかと膨らんだパジャマが載っている。

どうやら美鈴さんに、着替えを持ってきてくれたらしい。

「リステイ、あたしゃあんたを見損なつたよ。風邪で弱ってる女の子を襲おうなんて」

「いえ、そんな事は微塵も考えていませんから」

にやにやと笑うおばちゃんに、僕はきっぱりと否定した。

ああ、そうだ！

つまらなそうな顔のパメラおばちゃんに事の次第を話すと、おばちゃんは巨体を揺すりながら笑い「美鈴の世話なら任しておきな」と、言ってくれた。

「あたしとつちゃ、娘みたいなもんだからね。だけど風邪くらいで、あたしの娘達はこんなに手が掛からないけどね。ま、あんたに甘えているんだよ」

そう言うパメラおばちゃんの笑顔は優しく、とても楽しそうだ。

「本当にすみません」

僕は、深々と頭を下げ、おばちゃんに美鈴さんのことをくれぐれも頼むと、船長室へと向かった。

そして気合い十分で船長室に直談判に赴き、ガデイさんに事情を話して盗賊退治に協力して欲しいと相談したところ、見事に突っぱねられた。

「そいつは出来ねえ相談だな、坊主」

「そんな！ みんな装甲兵の扱いについてはベテランでしょう！
街の人々だって困っているんです。大切なお客様じゃないんですか？」

脅しに近い僕の言葉に、ガデイさんが険しい表情を見せた。

「大事な客に違いはねえが、そこまでは俺達の仕事じゃあない。盗賊退治は専門のお嬢に頼みな！ もっとも、お嬢もあの様子じゃあ、ブレイバーの操縦なんて出来ねえだろうがな」

「ばん！ 僕は力任せに船長室の机を叩いた。」

「そんな言い方をしなくても！」

信じられない。ガデイさんなら、きっと協力してくれると思ったのに。

「なあ、ちよつと落ち着けよ坊主」

ガデイさんはパイプをくわえ、椅子に深く背を預けた。大きくて黒い革張りの椅子が、巨体の重みでぎしりと軋む。ゆっくりと部屋に漂う紫煙。その向こうに見えるガデイさんの顔は暗く、そしてひどく真面目な表情だった。

「そう言うしかねえんだよ。こんな世の中じゃあな」

「え？」

「俺はな、ジュエル号の船長だ。この船のクルー達の命を預かっているんだよ」

ガデイさんは、よく使い込んだパイプをじつと見つめている。僕は、ガデイさんの背負っている責任の大きさを知った。

確かに盗賊退治など、運搬船ジュエル号の仕事ではない。

万一のことも考えられる、故郷の街でジュエル号の帰りを待っているクルーの家族達の気持ちを考えれば、ガデイさんの答えは船長として当然だろう。

「すみません、僕が軽率でした」

ガデイさんだって辛いのだ。

あまりにも薄っぺらな正義感だった。僕は思慮の無さを思い知ら

され、うつむいて拳を握った。

「すまねえな、坊主。バギーを貸してやる、船から修理道具を持って行け」

何かやりきれない様子のガディさんは話が終わったとばかりに、グラスに満たしたウイスキーを一息に飲み干すと大きく溜息をついた。

9・風に舞う少女の声（前）（後書き）

お風邪を召した美鈴さんです。

普段とは違う一面……可愛らしさを、ご覧頂きたかったものですか
ら。

いかがでしたでしょうか。

10・風に舞う少女の声（後）

「そうなんだ……」

齒切れが悪い僕の説明に、エアンはがっくりと肩を落とした。ガデイさんの話をそのまま聞かせるわけにもいけないので、荷物の搬入や搬出作業で人手が割けないのだと、仕方なく言い訳を繕うしかなかった。

「元気出せよ、エアン。僕は腕利きのパイロットを知ってるんだ」

「兄ちゃんが？」

「ああ、とびきりの美人パイロットだ。事情があつて今は手伝つて貰えないけど、まだジュエル号は四日も停泊しているんだ、何とか頼んでみるさ」

バギーから降ろした修理機器を準備しながら話す僕を、エアンがにやにやしながらじつと見つめている。

「どうした、エアン？」

「ねえ……その女の人って、兄ちゃんの恋人？」

「馬鹿、そんな訳無いだろ？」

僕はがっくりと肩を落とし、何となく装甲板に“ の ”の字を書く。いじけている暇なんて無い、僕は早速ぐつたりとうずくまる『V M-2型』の修理に取りかかった。

案の定、破損箇所は皆無だった。

この機体には気の毒だが、やはりパイロットに乗り捨てられただけのようだ。メインコンピュータが起動しないのは、機体の制御プログラムを記録した内蔵ディスクが長い間放置されているうちに、データ破損を起こしてしまったからだ。

僕が持っているディスクには、様々な装甲兵に使用されているプログラムが圧縮されている。必要なシステムを解凍してメインコンピュータに新しく記憶させるだけで、全ての不具合は解決してしまったのだ。

「リステイ兄ちゃん！」

「あ？」

メンテナンスモードでメインコンピュータを起動し、コクピットで各部の機能をチェックしていると、イリユーザーの足下から僕を呼ぶ声が聞こえた。

「どうしたんだ、エアン！？」

僕がコクピットから顔を出すと、下ではエアンが大きな包みを頭上に掲げていた。

「姉ちゃんが、お昼についてお弁当作ってくれたんだ！」

「ああっ、ありがとう！」

もうそんな時間になるんだ。

腹ぺこに気付いた僕は、機体乗降用リフトでイリユーザーから降りる。

エアンから包みを受け取ると、その場に腰掛けた。ミーシャさんに感謝してさっそく包みを開くと、色とりどりのサンドイッチがバスケツトの中に綺麗に並んでいる。

正直な僕のお腹の虫が、ぐう！ と鳴った。

「兄ちゃんってば、何度呼んでも返事しないんだもんな。俺、疲れちゃったよ！」

サンドイッチを頬張る僕に不満を漏らし、エアンはイリユーザーへと向かった。

「ああ、ごめん！」

機械類をいじり始めると、つい夢中になってしまふ悪い癖だ。

苦笑いしながら照れ隠しに頬を掻く。僕はミーシャさんお手製の美味しいお弁当を全て胃の中へと収め、もうひと頑張りしようと思いを上げた。

コクピットで計器類のチェックを始めると、エアンが興味深そうにその作業を眺めている。

「面白いのか？」

「うん！」

エアンは黒い瞳を輝かせて、大きく頷いた。

「兄ちゃん、装甲兵が好きなの？」

「いや、僕は機械つてものが好きなんだ」

そう、僕は取り分けて装甲兵が好きという訳ではない。

今やらなければならない事、自分の力が一番役に立つ事をしていくに過ぎない。

「機械？」

「そう、機械さ。組み合わされたひとつひとつの部品には、大きな部品も小さな部品もそれぞれの大切な役割がある。そんな部品をたくさん組み合わせれば、とても人の手には負えないような、大きな仕事をこなしてくれる機械だって作れるんだ！」

思わず興奮気味にしゃべってしまった。話が少し難しかったのかも知れない、きょとんとしたエアンが首を傾げて見せた。

ああ、何を熱くなっているんだか。僕がぱりぱりと頬を掻いていると、突然、轟音が深い森に響き渡った。

驚いた野鳥達が飛び上がり、森の小さな生き物が枝の上を逃げ去った。

大きく揺れる木々の枝の間、かすかに見える空を横切った三つの黒い影。

「兄ちゃん！ 盗賊だ、盗賊が街に向かったんだ！」

エアンが大声で叫ぶ。

「何だって！」

僕は慌てて、メインコンピュータを起ち上げた。

レーダーを作動させると、三つの光点が現れる。間違いない、三つの光点はエディフィスの街へと向かっているようだ。

「ど、どうしよう……」

ジュエル号は今荷物の搬入をしている最中だ。こんな所を狙われたらひとたまりもない。

美鈴さんだってあの具合では、まだブレイバーの操縦などおぼつ

かないだろう。

僕は慌ててヘッドセットを被り、通信機のスイッチを入れる、しかしどうチューニングしても、がりがりといひどいノイズが響いてくるばかりだ。

「くそっ！」

いまましいヘッドセットを投げ捨てる。

迷っている暇など、少しも無かった。

「エアン！」

僕は意を決すると、隣にいるエアンの肩を両手でしっかりと掴む。
「バギーの運転は出来るか？」

「た、多分出来るけど……どうするんだよ、兄ちゃん！」

心細そうな顔のエアンに、僕は無理に笑って見せた。

「僕が何とか奴らの足を止める。エアンはジュエル号に、この事を知らせてくれ！」

エアンは驚いたようだ。

「兄ちゃんはパイロットじゃないんだろ、無理だよ！」

「ところがやれるのさ！ 僕はまったくの素人って訳じゃない。色んな重機だって扱える、装甲兵だって同じ機械だよ！」

装甲兵に乗ることと、操縦することは大きく違うけど。

僕は今精一杯虚勢を張っている、爪を噛んで考え込むエアンの顔を、僕はしっかりと見つめた。

「う、うん、行くよ！」

コクピットから這い出したエアンは、ぱっと身を翻して、乗降用ウインチも使わず地上に飛び降りた。

「頼んだぞ、エアン！ 必ず街の手前で食い止めてみせる。そう伝えてくれ！」

急発進したバギーを運転するエアンの背にそう叫び、僕はコクピットハッチを閉めると、シートへと身体を固定した。

震える手で、メインスイッチを入れると、ジェネレーターが呻りを上げ始める。

ごくりと唾を飲み込み、両腕で操縦桿を引き起こした。

画面に映る起動チェックを全て強制的にカットすると、一度不機嫌そうに身震いしたイリユーザーが起動する。

「い、行くぞっ！」

躊躇などしてられない。

僕はフライト・ユニットへ思いっきり点火した。

「わーっ！」

思わず口から悲鳴が飛び出した。太い幹をした森の大木を叩き折り、イリユーザーはもの凄い勢いで空へと上昇する。

よ、よし！とっ、取り敢えずは飛んだぞ。

だけど、素人の僕なんかはどうにか出来る事態なのか？ そう思った瞬間、イリユーザーがこのまま墜落しそうな、頼りない心細さが沸き上がってくる。

震え出しそうになった僕の耳に、鈴の音のように綺麗な音が響いた。

それは柔らかな風につて、僕の耳をくすぐるように過ぎていく。

「なんだ？」

微かに聞こえる、これは声？

（……だよ）

「良く聞こえない」

じつと耳を澄ます、これは女の子の声？

（だいじょうぶだよ……）

ゆらゆらと揺れていた可愛らしい笑い声が、次第に薄らいで消えていった。

「大丈夫……か」

この際何でもいい。あんなに可愛らしい声なら、死神の類ではないだろう。

僕は服の上からぎゅっとペンダントを握りしめ、少女の言葉をお守りのように心に刻んだ。レーダーを使って、三機の消えた方角を確認する。

僕は思い切って、イリューザーを最大加速させた。

「み、見えた！」

前方でゆつくりと飛行している三機の装甲兵、盗賊達のセラフィムが確認出来た。

イリューザーの装備はチェック済みだ。ライフルにバルカン砲は、いずれも実弾使用。そして接近戦用のブレードが一振り。ブレイバーと違い、光学兵器は一切搭載されていない。

「で、でも不意打ちなら、なんとか！」

やけくそ気味に叫んだ僕はライフルを構え、機体をさらに加速させる。

しかし。

「ひええっ！」

装甲兵に限らず戦闘経験など無い僕は、最大加速する機体の速度感になど馴れてはいない。イリューザーはあつという間に、一機のセラフィムへと追いついた。

まさか、追っ手がいるなどとは思わなかったのだろう。最後尾のセラフィムが、緩慢な動作で振り向いた。イリューザーのメインモーターへ、大写しになる紫色の機体。

「わーっ！」

イリューザーは、振り向いたセラフィムへ向けてシールドを前面に構えたまま、思いつきり体当たりしていた。

シールドで頭部を力任せに殴りつけられたセラフィムが、のけぞって吹っ飛ぶ。

「あ、あれ？ と、取り敢えず一機撃墜！」

喜んでなどいられない。へろへろと地上へ落ちていく仲間に驚いた残りの二機が、戦闘態勢に入る。二機は腰の辺りに装備したラックから、斧の形をした接近戦用ブレードを引き抜いた。

な、何て凶悪な形の武器を持っているんだ、こいつら。

「とっ、飛び道具を持って無いんなら！」

僕はライフルの照準を絞り、操縦桿のトリガーを引く。

しかし発射された実弾を、セラフィムはいとも簡単に回避した。

「くそっ照準が……ブレて！」

ライフルの照準のせいだけではないのだろう、微調整が上手い
か？僕は焦った。

もたもたしている僕の隙を突いて突進してきたセラフィムが、大
きく斧を振りかぶる。

「わあっ！」

白熱化した凶刃がライフルの銃身をいとも簡単に切断し、僕は仕
方なく使い物にならなくなったライフルを投げ捨てた。イリユーザ
ーを囲む二機のセラフィムは、獲物をなぶるように旋回しながら、
じりじりとその包囲網を狭めてくる。

「ぶっ武器、武器は！」

武装の確認は、何度もしているはずだけど。

しかし二機の装甲兵を相手にしている僕の頭からは、そんなこと
は綺麗さっぱり消し飛んでいた。

「このっ！ このこのこのこのっ！」

汗ばむ手で操縦桿を握る、親指に当たったスイッチを押し続ける。
シールドに機体を隠してバルカン砲を休むことなく撃ちまくるの
だが、盗賊達のセラフィムはまるで僕をからかうように、のらりく
らりと弾を避けてしまう。

今まで続いていた機体の振動が、突然止まった。

「排気音だけ、たっ弾切れ！？」

バルカン砲の弾が切れ、この機を待っていたように突出してきた
一機のセラフィムが、斧を大きく振りかぶった。

「くっ！」

斧を叩きつける連続の斬撃。

機体に激しい衝撃が走り、ついに振り下ろされた斧がシールドを
溶解させ、高熱を発する刃がずぶりと食い込む。

シールドに深々と食い込んだ斧を、セラフィムが引き抜こうとし

た瞬間。僕はフライト・ユニットを全開にして、セラフィムに体当たりした。

斧が食い込んだままのシールドを投げ捨て、抗うセラフィムに強引に組み付くと、ラックから引き抜いた接近戦用ブレードを逆手に持ち、セラフィムのフライト・ユニットへ突き刺して最大発震させる。急激に振動を開始したブレードが、セラフィムのフライト・ユニットの内部機関を切り裂いた。

マニピレーターを外すと、ブレードが突き刺さったまま、フライト・ユニットから煙を噴き上げたセラフィムは落下していく。

「これで、二機っ……まだ！」

両肩を上下させ、荒い息をつく僕の耳を打つ甲高い電子音。コクピット内に接近警報が響いた。真後ろからの攻撃。しかし、イリューザーには武器など何一つ残ってはいない。

「まだだ、まだこんなところで死んでられないんだよ！」

心に深く根付いた、ただ一つの思いが頭を持ち上げてくる。

僕は勢い良くイリューザーを振り向かせると、背部のフライト・ユニットを切り離し、右のマニピレーターでぶら下がるようにして捕まった。

「これで、どうだっ！」

脚部スラスター、補助バーニアを全開にし、突進してくるセラフィムへ目掛けてフライト・ユニットを思い切り叩き付けた。

セラフィムに激突したフライトユニットが爆発し、その上半身部分が半壊する。

浮力を失ったイリューザーはセラフィムへ組み付いたまま、もつれるように森の木々を引き倒しながら小高い丘へと落下した。地面を大きく削りながら滑る機体が、バラバラにならなかったのが不思議なくらいだった。

どうやら森の木々のおかげで、墜落の速度が緩和されたらしい。朦朧とした意識の中、僕は歯を食いしばって土にめり込んだイリューザーを立ち上げさせた。

しかし鋭い警告音と振動が響き、がくんとイリューザーが力を失い、大地に膝を付く。

限界を超えてしまった関節各部の衝撃緩衝用のシリンダーから、まるで血のようにオイルが吹き出した。

イリューザーの足元にはぴくりとも動かない、半壊したセラフィムの残骸が転がっている。コクピットから這い出したのか、盗賊風の男が一人ぐったりとのびていた。

「か、勝った、勝ったぞ！」

呆然としていた僕は、我に返って大声を上げた。

後は、エアンの知らせを聞いたジュエル号が何とかしてくれるだろう。

今も続く心臓の鼓動は激しく、作業服はぐつしよりと汗で濡れ全身が怠いほどの疲労を訴え掛けている。操縦桿を握ったまま、固まっている指を苦勞して引き剥がすと、震える手でモニター上にマップを開いた。

エディフィスの街、手前一キロのポイントを現す光点が点滅している。

「本当に止めたんだ。やった、やったーっ！」

ガッツポーズで叫んだ瞬間、激しい衝撃に僕はシートから投げ出された。

「いてて」

どうやら、イリューザーが前のめりに転んだらしい。

コクピット内が警告灯の光で真っ赤だ。

ふらつく頭を振ってモニターに映る機体情報を見た僕は、ぎよつとした。

左腕上腕部より大破……欠損！

何が起こったのだろう、イリューザーの左腕は無かった。しかし右腕一本でも、バランスが働いていれば問題ない。イリューザーが立ち上がった瞬間、またも激しい衝撃を受けて今度は仰向けに転んだ。この時になって、僕はやっと気が付いた。

コクピット内には、接近警報が響いていたのだ。

ノイズがちらつくモニターへ映っているのは、こちらを見下ろしているセラフィムの姿。

「最初に体当たりした奴が、生きてたのか」
切れ切れにつぶやく。

またもや衝撃、今度は右腕が切断された。イリユーザーに上体を起こさせてみたが、両腕を失っているのでもならず、また思い切りセラフィムに蹴り倒された。

モニターへセラフィムの足の裏が迫ってくる。
ざ……。

二度三度踏みつけられ、衝撃にモニターの映像が激しく乱れる。

『この野郎、やってくれたじゃねえか』

装甲板を通じて、コクピットの中に酒に灼かれた濁声が響いてくる。

甘かった。

薄れる意識をなんとか繋ぎ止め、僕はモニターへと映るセラフィムを睨み付けていた。

コクピットハッチを踏みつけたセラフィムが、白熱化している斧を大きく振り上げる。

あの熱く焼けた刃がコクピットへ振り下ろされれば、僕の身体は蒸発して無くなってしまふのだろう。セラフィムの動きがまるで映画機のスローモーションのように、スクリーンであるモニターへと流れる。

その時、右の方向から何かがフレームインして来た。

「あれは……」

僕は目を見開く。

「紅の天使？」

僕が叫んだのと同時に、フライト・ユニットのバーニアを全開にしたブレイバーが、セラフィムを思いつ切り蹴り飛ばしたのだ。

まるでボールのように、地上を二度三度バウンドして、もうもう

と土煙を上げるセラフィム。

その映像を僕が知覚したとき、時間の流れが正常に戻った。起き上がろうとするセラフィムにライフルを向けたブレイバーは、躊躇することなく速射の四連射でセラフィムの四肢を撃ち抜き、行動不能にしてしまった。

「リステイ！」

動きの悪くなったメインカメラの視点を動かそうとしていると、怒気を含んだ声と共に、美鈴さんのどアップがモニターへ映し出された。

「あ、あの」

「この馬鹿野郎！」

凄じい剣幕で怒鳴られた。

可愛らしいネコ柄パジャマのままの美鈴さんが怒っている、もの凄く怒っている。

「あんたの馬鹿さ加減には呆れたわよ。一人じゃなんにも出来ないクセに、いっちょ前にかっこつけようとしてんじゃないの！ 怪我したら痛いよ？ちゃんと解っているの？！」

牙を剥いて怒鳴り散らすモニターの中の美鈴さんを、僕は呆然と眺めていた。

そりゃあ、僕にも言い分の一つや二つあったのだが。そんなこと、今はどうでも良かった。

「美鈴さん」

「なっ何よ？」

なおも怒鳴り散らしていた美鈴さんは、はっとして口をつぐんだ。「熱は下がったんですか？」

ぶっつ！

その瞬間回線が切れ、モニターから美鈴さんの姿が消えた。

「あれ？」

故障かな？ 僕が首を傾げて操作盤に手を伸ばそうとすると、「その機体、もう動かないんでしょ？早く降りなさい、帰るわよ」

ややくぐもった音声のみが聞こえてきた。

ひよっとして、風邪がぶり返したんじゃないだろうな？

そんな心配をしながらハッチを強制排除して外へ顔を出すと、ちょうどジュエル号の装甲兵リヤリオット二機が、僕が叩き落としたセラフィムを太い腕で引きずってくるところだった。

ジュエル号は、居住コア『エディフィス』を発した。

総出で船を見送ってくれた街の人々、そしてエアンの輝く笑顔を忘れない。

美鈴さんと、ガディさんにはこっぴどく叱られたものの……。

僕を“勇気ある男”と讃えてくれた、エディフィスの街の人々。

たくさんのご馳走を振る舞われ、ミーシャさん達女性が伝統的な踊りを披露してくれた。

夜空を焦がす大きな炎を取り巻いて、激しく踊る女性達。

男達が演奏する太古の打楽器が、大地の息吹にも聞こえる振動を伝え、女性達がそのリズムに乗って躍動感あふれる踊りを続ける。

激しい踊りが表現する命の力強さを、僕は深く心に刻み込んだ。

「俺、兄ちゃんみたいに立派なジャンク屋になるよ！」

大きく手を振りながら、大声で宣言したエアン、エディフィスに住む人々の清々しい笑顔。誰がエアンにそう教えたのだろうか？将来はジャンク屋を目指す豪語する弟に、額に手を当てて首を振る困った表情のミーシャさん。

そんな事を思い出しながら、おでこに貼った大きな絆創膏をいじっている、

「きゃーっ！」

通路の向こうから絹を引き裂くような悲鳴が聞こえ、パタパタと軽い足音が近づいて来る。

「あ、リステイ！」

パジャマ姿のままスリッパ履きで駆けて来た美鈴さんが、僕の背中に隠れてしまった。

「なっ、何事ですか！」

背中 of 美鈴さんに問いかけた僕は、何やらぞつとする寒気を感じて振り向く。そこには白衣がぴつちり、やや小太りのテロップ船医が立っていた。

美鈴さんを追いかけてきたのだろう、息を切らせ大きく肩を上下させている。

ふーふーと荒く息をつき目がぎらついている。正直に言うと、ちよつと危ない。

「さあ、美鈴君、医者困らせるんじゃない。注射を一本打てば楽になるから！」

「あたし、注射嫌いなよ！」

僕の背中に隠れている美鈴さんは、枕をしっかりと抱いている。完全に風邪をこじらせてしまったらしい。それにしても、美鈴さんが注射嫌いななんて可愛らしいところがあるんだ。

「さ、美鈴さん。ちくつとするだけですから、さっさと済ませてしましましょう」

僕がちよつとした優越感に浸っていると、その時鼻がむずむずして……。

「はっ、びえつくしゃん！」

大きくしゃみをしてしまった。

「あゝ」

「ほほう……ぼうず、風邪でもひいたのか？」

鼻水をすする僕のくしゃみの先には、間の悪いことに偶然通りかかったガディさんが立っていた。

首に掛けたタオルで顔を拭う、ガディさんのこめかみの辺りがぴくぴく動いている。

「す、すみません。あ、あはは」

「おつと……。ちょっと待て、ぼうず！」

ガデイさんに乾いた笑いを返すしかない僕は、首根っこを鋼鉄の筋肉が盛り上がる腕で、がっちりと極められてしまった。

こうなつてはもう、いくらあがこうと逃げられない。

「めっ！美鈴さ〜ん」

情けない声で僕が助けを求めると、もうそこに美鈴さんの姿は影も形もなかった。

ひどい！ひとりで逃げたんだ。

「へへっ、ちょうど良いや。ぼうず、テロップ先生に診てもらいな
！」

ああっ！ ガデイさん。どうしてそんなに楽しそうなんですか！
「リステイ君」

とき。

恐る恐る顔を上げると、妙に嬉しそうなテロップ先生と目が合った。

「ちょっと目がトロソとしてるね、顔もなんとなく火照っているよ
うだ」

「え？」

「美鈴君にうつされたのかな？これは間違いなく、風邪の症状だね
え」

にんまりと微笑むテロップ先生が、注射器を片手ににじり寄ってくる。迫り来るのは、よく見ればやたらとでかい注射器。

おいおい、何でこんなに太い針なんだよ。これじゃチクツ！じゃなくて、ぶすう！ だぞ？ 美鈴さんの助けも期待出来ない……あ
あ、絶体絶命。

後になつて聞いた話だが、テロップ先生の注射は、とてつもなく
痛いと評判だった。

「ぎいやあああっ！」

迫る注射器、僕の悲鳴はジュエル号の広い艦内に、くまなく響き渡った。

10・風に舞う少女の声（後）（後書き）

いつも頼りない主人公、リスティに頑張らせてみました。
かなりテンパっていましたが、いかがだったでしょうか。

風邪を引いた美鈴。頑丈なんですけどね。

11・廃墟を護る聖女（前）

強い太陽に炙られながらジュエル号が進むのは、なだらかで小さな丘が何処までも続く丘陵地帯。視界には薄い筋状の雲が広がる空の青と、地平線の赤茶色との境界がくつきりと分かれて見える。背が低く乾いた土地でも生育する植物がちらほらと見かけられるだけで、他の植物は何も自生していない。

この辺りには居住コアも無く、あまりに厳しい環境のため暮らしている人はいないだろう。

しかしその環境は、旅をする運搬船にとっては利点になる。

この辺りは身を隠す場所が少なく、従って盗賊達も待ち伏せなどする事が出来ない。ジュエル号は襲撃者への警戒を緩め、のんびりと航行していた。

ジュエル号の後方にある大きなドーム状の展望台で、溜息混じりにぼんやりと流れる景色を見つめていると。

突然、地震のように足下から大きな揺れが突き上げて来た。大きく揺れる船内でクルー達が騒然とする。堪えきれず倒れそうになった僕は慌てて手摺を掴んだ。

どうやら、ジュエル号が急激に減速したらしい。

『ブリッジより各員に通達、至急警戒態勢に移行！ 繰り返します、ブリッジより各員に通達、至急警戒態勢に移行して下さい！』

けたたましい警報と共に、船内へ流れるミホロさんの緊迫した声。クルー達も驚いたように動きを止め、船内に流れる放送に耳を傾ける。こんな場所で襲撃なんて、いったい何が何処に隠れていたんだ？ 「ガディさん、どうしたんですか！」

「来たか、坊主。盗賊の類なのかまだわからねえが、船の進路に装甲兵が立ちはだかつていやがる」

僕がブリッジへと駆け込むと、キャプテンシートに座るガディさんがざらつく顎を撫でながら眉根を寄せている。

「このまま睨み合いじゃ、どうにもならねえな。威嚇で一発ぶつ放してみるか？」

そう言つて、にやりと不敵な笑みを浮かべる。

ガデイさんは豪快な男だが、いつも慎重で冷静な判断を下す。己が判断を誤ればクルー達の命に関わる、その重責を担っている事を充分に承知しているからだ。

僕はブリッジの遙前方に目を凝らした、確かに一機の装甲兵が滞空している。

あれはブレイバーと同じ「VX-4F型」じゃないか？

「前方の機体、モニターに出せますか？」

僕がそう問うと、ブリッジの天井から吊られているモニターにジュエル号の前で滞空している機体の姿が拡大して映し出された。

やっぱり、間違いない。白を基調としたカラーリング、量産機らしい特徴に乏しい機影。

「何事なの！？」

真剣な表情で、ブリッジへ駆け込んで来た美鈴さん。

僕が説明するより前に、モニターの拡大映像へ目を移した美鈴さんの黒曜石の瞳が、一瞬にして大きく見開かれた。

「メノア！」

美鈴さんの鋭い叫び声。

「ミホ口、通信機を貸して！」

「あ、はいっ！」

その剣幕に驚いて、ブルーの瞳をぱちぱちとさせたミホ口さんが慌てて通信機を渡す。

美鈴さんは受け取ったヘッドセットを耳に当てて、マイク的位置を調整すると発信する周波数を合わせるためにダイヤルを捻る。

「メノア、聞こえる？ 私よ、美鈴！ 応答しなさいメノア、メノア・リグレイ！」

美鈴さんが何度も呼びかけを繰り返すが、答えは返ってこない。
「メノア、答えなさい！」

厳しい表情で叫ぶ美鈴さんは、苛立たしげにヘッドセットを外して赤く染めた唇を噛んだ。

「メノアって、まさか……」

僕にはその名前に覚えがある、美鈴さんと初めて会った時に聞いた名前だ。

美鈴さんと同じ部隊の人だったはずだけど。

だとしたら、あの機体はやはり「VX-4F型」だ。

「リステイ！ ブレイバーは出られる！？」

「は、はい！ 大丈夫です！」

鬼気迫る美鈴さんの表情に、僕は驚いて頷く。

美鈴さんは僕の答えをみなまで聞かず、身を翻すとブリッジを飛び出してしまった。

長い黒髪をなびかせる美鈴さんの後ろ姿を見送った後、僕はもう一度モニターを凝視する。

白い機体の左肩に描かれているエンブレムは、剣を抱いた美しい女神だ。そして記された機体番号は「MINERUBA 06」ブレイバーの機体番号は「MINERUBA 02」美鈴さんと同部隊に所属する機体の証だ。

ジュエル号の進路の真つ正面で滞空している「MINERUBA 06」は、まったく動きを見せない。停止しているジュエル号も、迂闊に動く事が出来ない膠着状態。

しかしエレベーターに乗ってカタパルト上に姿を現した、ブレイバーのフライト・ユニットが折り畳まれていた翼を広げた次の瞬間。それまで動くことがなかった「MINERUBA 06」が、いきなりライフルを斉射した。一条のエネルギー弾がブレイバーのすぐ脇を掠め、発進準備を進める真紅の機体を照らす。ブレイバーを掠めたエネルギー弾は、ジュエル号の船体……外装の一部を焼け焦がした。

「美鈴さん！」

エネルギー弾が掠めた船体が激しく揺さぶられる、僕はブリッジの風防にへばりついて叫んだ。

駄目だ、あのままでは狙い撃ちされてしまう。

だがそれは、美鈴さんもよく分かっているようだ。ブレイバーはカタパルトを使用せず、数歩ステップを踏むとフライト・ユニットを最大出力にして轟音を響かせ、空へと舞い上がった。

「メノア、私に気付かないの？」

発信する周波数に間違いは無い、通信は届いているはずだ。

機体が真紅に塗り替えられたので、ブレイバーだと分らないのだろうか……。

いや、識別信号は発信されているはずだ。攻撃するする気がないことを示すためにブレイバーは武器を装備していない。気持ちばかりが焦る美鈴は、操縦桿を強く握りしめた。

「メノア、メノアっ！」

美鈴はブレイバーの通信機で何度もメノアが搭乗していると思われる「MINERUBA 06」へ向けて呼びかける。

あの日、秘匿通信を使って不安を打ち明けた、メノアの震える声が耳に甦ってきた。

「お願いだから返事をして！」

『うるっさいなあ、もう！』

すがるような気持ちで通信機のマイクへと叫んでいた美鈴は、コクピット内に響いた声を耳にして凍り付いた。

それは、メノアの声ではない。

頭が混乱している美鈴は、もう一度呼びかけようとしてその言葉を飲み込んだ。

『さつきからメノア、メノアって。あたしは名前が違ったから、返事のしようが無いでしょっ！』

癪に障る少々トーンが高い声。まだ少女のような声が紡ぐ言葉がたどたどしい。

『痛い目を見ないうちに、さっさとここから消えなよ!』

「MINERUBA 06」が高く舞い上がり、ブレイバーへとライフルの銃口を向ける。

「くっ!」

瞬時に思考を戦闘態勢に切り替えた美鈴は、浴びせかけられるライフルのエネルギー弾をすんでの所で回避した。

どうやら「MINERUBA 06」に登場しているのは、メノアではないらしい。

「どうして……」

喉の奥から絞り出す声が震えている、美鈴が操縦桿を折れんばかりに強く握りしめた。

「どうしてメノア以外の者が、そこにいるっ!」

激昂した美鈴が、「MINERUBA 06」へ向かってブレイバーを突進させる。

激情に駆られたその行動は、普段の美鈴からはとても考えられない。何しろブレイバーは、肩部に内蔵されているバルカン砲以外の装備を全て外しているのだ。

しかし、凄まじい勢いで迫るブレイバーに「MINERUBA 06」のパイロットは恐怖を感じたようだ。

慌てた様子で、ライフルを乱射しながら後退する。

でたらめに放たれる数発のエネルギー弾が、ブレイバーの右肩と左脚部を掠め、高速で飛行するブレイバーの姿勢がぐらついた。

しかし美鈴はすぐさま怯んだ機体を立て直し、浴びせ掛けられるエネルギー弾に構わずさらに加速する。ブレイバーは「MINERUBA 06」へ激突するほどの勢いで迫り、機体を急激に回転させた回し蹴りでライフルを叩き落とした。

間髪を入れずに「MINERUBA 06」の機体を捕まえ、胸部装甲に強烈な膝蹴りを見舞う。そして膝蹴りを受けてのけぞった

「MINERUBA 06」の頭部を、ブレイバーのマニピレーターが驚掴みにした。

「今すぐに、その機体から降りろっ！」

『待つて下さい、少尉！ 李 美鈴 少尉！』

長い黒髪を振り乱して叫び声を上げた美鈴が、荒れた大地に「MINERUBA 06」の機体を叩き付けようとした瞬間。

ブレイバーのコクピット内に、凜とした声が響いた。

「メノア……なの？」

モニターへと映る黒いフードと、顔を隠すヴェール姿の人影を食い入るように見つめ、乱れた黒髪を掻き上げた美鈴の声がかすれている。

『はい……少尉』

懐かしく響く声で美鈴にそう答え、人影が黒いフードと顔を隠すヴェールを外すと、碧い瞳をした美しい少女の顔が現れる。さらさらと長い銀色の髪が肩から流れ落ちた。

「メノアっ！」

『……お久しぶりです少尉、よくご無事で』

涙声で何度も名を呼ぶ美鈴に、モニターの中のメノアが静かに微笑んだ。

11・廃墟を護る聖女（前）（後書き）

美鈴の願い……同部隊のメノアに再会する事が出来ました。
クールに見えても、激情に駆られる美鈴です。

12・廃墟を護る聖女（後）

『地下通路のゲートを開きます、誘導灯に沿ってゆっくりと進入して下さい』

地下への入り口である扉が、大きく迫り上がり砂塵が舞う。メノアさんの指示によって、ジュエル号は巨大なゲートからゆっくりと進入した。

薄暗く巨大な地下通路をしばらく進むと、途端に視界が開けて明るい空間に出る。

広い空間は天井が高く、結構な明るさだ。

大型船のジュエル号よりも、遙に小さな船体の砂上船が二隻駐められていた。

砂上船に並ぶようにして、静かに停船したジュエル号は、その巨体の唸りを止める。

外界から上手く太陽光を取り入れられているからだろう。

暗い通路に目が慣れていた僕は、眩しさに思わず目を細めた。

次第に目が慣れてくると、まばらに立ち並ぶ小さな家の屋根がぼんやりと視界に入ってくる。

そこには、小さな集落が存在していた。

いつの間にこんな集落が出来たのだろう、僕は感心しながら辺りを見回して頷いた。

工夫がなされたことにより幾分明るくなっているので、以前とは雰囲気異なっている。

そうだ、僕はこの場所をよく知っている。

もっともその頃、ここは試作部品の研究施設だった。巨大な発電装置が設置されていて、外界からの関わりを完全に遮断することが出来るこの場所は、安全な居住空間になり得るのかも知れない。

僕にはひと目で、この集落がそれを有効に利用している事が分かった。

「メノア！」

船を降りた僕達を迎えてくれた女性……メノアさんの姿を見て、美鈴さんは彼女へと駆け寄った。

そして小さな体を強く抱きすくめると、銀色の長い髪を優しく撫でる。

「メノア、良かった……メノア！」

「少尉こそ、よくご無事で」

「こりゃあ、感動の再会だな」

後から追いついたガディさんの声に、美鈴さんが腕に込めた力を緩めた。

抱擁を解かれたメノアさんは、ガディさんへ深々とお辞儀をした。

「私はこの集落の責任者、メノア・リグレイと申します。この集落を狙う盗賊かと思い、警戒させていたのですが……。こちらの非礼をお詫びいたします、本当に申し訳ありませんでした」

「いや、まあ、実害つても外装がちょっと焦げたくらいだしな、そんなにかしこまらないでくれよ」

丁寧に頭を下げるメノアさんへそう言って笑ったガディさんは、ちらりと美鈴さんの方を見た。

「こつちこそすまねえが、出来ればここで船を少し休ませてやりたんだよ。辺境の集落じゃあ物資の調達も大変だろう？ 食料や生活物資を格安で卸すが、この条件でどうだい？」

「ありがとうございます、とても助かります。このような場所ですが、ご遠慮なくお休み下さい」

知性的で整った顔立ちに、輝く碧い瞳と長い銀色の髪。ブリッジ内の全てのクルーが、ぽかんと口を開けて見とれている。ふとジュエル号を振り上げば、美しいメノアさんをひと目見ようと、舷側にたくさんのクルーが群がっていた。

まったく、船がひっくり返っても知りませんよ？

ガディさんは、美鈴さんとメノアさんがゆっくりと話せる時間を作ってたのだらう。それが分かった僕は、並んで歩き出した二人の後を追わずその場に残った。

それにしても小さな集落だが、きちんと生活様式が確立されている。粗末な造りの家が並ぶが、大人達や走り回って遊ぶ子供達の表情はとても穏やかで明るい。

どうやらこの集落で暮らす人々はジャンク屋のように、地上に散らばるスクラップなどから回収した電子部品を修理して調整を施し、その品を砂上船に載せて居住コアを巡っているようだ。様々な街でその品を売ることと利益を得て、食料など生活に必要な品を買い求めているのだらう。

厳しい環境で暮らすのは食料や物資も不足して大変だ。

しかし、それが必ずしも不幸という訳ではない。小さな幸せを少しずつ分け合い大きくしていく喜びを、この集落の人々は知っているのかもしれない。

巨大な地下施設なんだけど、まるで森の中の日だまりの暖かさを感じる。

僕は駐機姿勢を取っている「MINERUBA 06」の機体を見上げた。以前のブレイバーと同じ白い機体は、あちこちに損傷が目立っている。何とか補修はされているようだが、腕などはスクラップからの代用品なのだらう、左右で形状が異なっている。

おそらく、この機体の性能は充分に発揮されていない。

白い耐熱樹脂塗料に残る焼け焦げたような痕に、僕の心は酷く疼いた。

「あゝあ、やられちゃった。あいつ、おっかねえ女だな。もうちょっとでのされちまうところだったぜ！」

耳に響く甲高い声の方を見ると、腰に手を当ててぶつぶつと文句を言っている、パイロットスーツに身を包んだ女の子がいた。

長い金色の髪を、頭の両脇で縛っている。くるくるとよく動く碧い瞳、尖らせた桜色の唇はとても不機嫌そうだ。

「おっ！」

憤慨していた女の子は、僕の姿に気付いたらしい。ととつと、軽い足どりでやって来た。

さっきまで「MINERUBA 06」の脚の陰に隠れて、恐い顔でずっと美鈴さんを睨んでいた少女。どうやらこの少女が「MINERUBA 06」を操縦していたみたいだ。

「よお！ お前、あの運搬船に乗ってんのか？」

可愛い顔に反して、言葉遣いはぞんざい。

ちよつと舌つ足らずな喋り方をする少女、多分十五歳に満たないだろう。

「あたしはリオネル！ リオって呼んでくれていいよ」

リオネルと名乗った少女は、不機嫌そうな表情は何処へやら、人懐っこい笑顔を見せた。

「僕はリステイ、リステイ・マフィンって名前だよ、この船で整備士をしているんだ」

「へーなんか食い物の名前が混じってるけど。まあいいや、よろしくな！」

リオネルは僕を見上げてぱんぱんと腕を叩くと、急に眉根を寄せ僕をじつと見つめる。

可愛らしい女の子の碧い瞳に見つめられて、僕は何となく照れてしまう。

「そうだ！ お前、整備士ならあたしの『ライオネル』を整備してくれよ！」

リオネルは僕の存在を自分よりも下に見積もったのか、すでにお前呼ばわりだ。

「ラ、ライオネル？」

「へへ、格好いい名前だろ？ あたしの愛機さ！ ここにいる整備士は、みんな素人同然でさ。つぎはぎだらけだし、いくらいじって貰ってもしっくりこないんだよな」

リオネルは、メノアさんの「MINERUBA 06」に「ライオネル」という名前を付けているらしい。

あはは……美鈴さんみたいだ。

それに、何だかりオネルと名前が被っている。

損傷箇所が多数ある「ライオネル」は、整備の前に修理を行わなければならない。

ジュエル号には「VX-4F型」の余剰パーツがある、特殊なフレーム構造のブレイバーには使用出来ないノーマル仕様の部品だ。

それらを使えば「ライオネル」を元通りにしてやれるはず。僕はまずガディさんに許可を貰うため、ジュエル号に向かうことにした。美鈴さんとメノアさんは、どんな話をしているんだろう？

ふと気になった僕は、トラップを上りながら一度振り返ると、二人が歩いていった方向をじっと見つめた。

「聖女様！」

「あのっ、聖女様！」

言葉少なに二人で並んで歩いていると、メノアの周りに人々が集まってくる。

「皆さん。もう大丈夫ですから、心配しないで下さい。ジュエル号は一般の運搬船です」

彼らがメノアに向けるのは畏敬の眼差しだ、メノアの答えを聞いて集落の人々に安堵の表情が広がった。

「聖女様……か」

黒い長衣に身を包んだメノアの姿は、神にその身を捧げた修道女のように感じられる。

頭をもたげる嫌な予感に眉根を寄せた美鈴は、小さな声でつぶやいた。

「少尉。どうぞお入り下さい」

メノアに案内され、美鈴は小さな家の扉をくぐった。ここはメノアが住んでいる家らしい、広くはないが住み心地は悪くなさそうだ。いくつかの家具が置かれただけの質素な部屋。床には絨毯が敷かれ、小さなベッドの脇には数冊の本が積まれている。薄いクッションを腰に当てた美鈴に、メノアは深々と頭を下げた。

「ご心配をおかけしました。申し訳ありません、安否について連絡を怠った事をお詫びいたします」

「もういいのよ。あなたが無事だったから」

「ありがとうございます」

メノアはもう一度深く頭を下げる、真面目な彼女らしい仕草だ。だが終わる事のない戦いの中でも、彼女が失う事がなかった少女の輝きは、すっかり失われている。

美鈴は、お茶の準備に取りかかったメノアへ声を掛けた。

「メノア、この集落の責任者って？」

「はい、話せば長くなりますけど。リオネルと共に、何度か盗賊の襲撃を退けた事があるのです。そんな理由で集落の皆さんにお願いされて」

メノアは簡素なキッチンで、カップを用意している。

「そうです、リオネルの……私の機体を操縦していた娘の非礼をお許し下さい。きちんと指示していたのですが、どうにもまだ子供で」

「あの子が、この集落の警備を？」

「彼女は卓越した操縦技術を持っています。もし襲撃者があっても、私が直接出て行く事は出来ませんから」

聖女と慕われ信頼されているメノアは、集落全体をまとめなければならぬのだらう。

少し痩せたような、メノアの後ろ姿。

美鈴自身と、そしてメノアも触れる事を避けている話。美鈴は彼

女のぎこちない手の動きを目で追いながら覚悟を決めて息を吸った。
「メノア、みんなの行方が分からないの。識別信号も反応無し、機体だつて残骸すら発見出来ない、あなたは連絡が取れなかったの？」

美鈴の問いに、メノアは一度びくりと震えて動きを止め、

「私にも分かりません、そんな余裕はありませんでしたから」

お茶の葉の入れ物を手に持ったまま、沈痛な面持ちで美鈴の問いに答えた。

「そう。あれからもう、数ヶ月も経つのよね……」

メノアの答えを聞いて、うつむいた美鈴の黒髪が肩からこぼれる。

「そうよ！ あの時トゥリープは、あなたの機体をフオーローしていたはずよね、彼は！？」

美鈴は勢い良く顔を上げる。

望みを捨て切れない美鈴に、メノアは寂しそうな笑みを浮かべた。

「少尉、トゥリープの所へご案内しますね」

お茶を飲んで落ち着いている気分にもならず、美鈴とメノアは再び家の外へと出た。

ゆっくりと歩きながら、メノアはぼつりぼつりと話し始めた。

「あの時、私達の部隊を襲った光の衝撃波にのみ込まれて……気が付くと、私の機体はまだトゥリープが支えてくれていました。奇跡的に助かった私達は、運良くこの集落へと戻る砂上船に拾われたのです」

苦しそうに、瞳を伏せたメノア。

光の衝撃波を浴びた瞬間の恐怖は、彼女の心をどれほどに痛めつけたのだろう。

「凄まじい高温に炙られたコクピット内で、トゥリープが負った熱傷は酷い状態でした。彼が……彼が私の機体を庇ってくれたのです」

静かに話を続ける、メノアの表情が苦しげに歪む。

「治療の甲斐もなく、トゥリープは衰弱していきました。でも彼は無理に笑顔を浮かべて、私を励まし続けてくれて」

しばらく歩き続け、そして美鈴が案内された場所、それはいくつ

もの盛り土が並ぶ墓場だった。

彼女の小さな手が指し示した先には、土を盛り木の板を組んで作られた墓標が建てられている。やはりメノアが身に纏う黒い長衣は喪服なのだろう、美鈴は胸が締め付けられるような苦しさ襟元をきつく握った。

「ここに、トゥリープが眠っています……」

瞳からすうつと一筋の涙が頬に沿って流れ、うつむいたメノアはそつと手を組んで小さく祈りの言葉を紡ぎ出す。

青い瞳を持っていて、女の子にだらしない色男。

気取って金髪を掻き上げる仕草が憎らしい、美鈴と同期の士官だった。

彼は最後まで、自分を慕ってくれるメノアの前で格好良く振る舞ったに違いない。

「よく、メノアを守ってくれたわね。まったく、あなたにしては上出来よ……トゥリープ」

静かに続く祈りの言葉を聞きながら、美鈴は涙が溢れる黒曜石の瞳をそつと伏せ、土の下で疲れを癒す仲間へと静かに黙祷を捧げた。

ジュエル号の格納庫で、「ライオネル」の修理を始めて二日目の朝。

深夜まで続けた作業に疲れ果ててそのまま眠ってしまった僕は、周囲の明るさに目を覚ましてのろろと顔を上げた。機体の足下では毛布にくるまったりリオネルが、すうすうと気持ち良さそうに寝息を立てている。

どうやら僕はリオネルに気に入れたらしく、彼女は機体の修理作業中もずつと僕にくっついて離れない。ごろごろと喉を鳴らす子猫のようなリオネルを邪険にする訳にもいなくて、僕は彼女の好きにさせていた。

そう言えば夜遅く、ジュエル号へと戻って来た美鈴さんの目が赤く腫れているのを見て驚いた僕は、何があつたのかと声を掛けたら……。

なぜか美鈴さんに思いつ切りぶん殴られた、そのおかげでまだ首の調子が悪い。

ライオネルの修理と、機体整備は完了した。

僕は痛みで動きにくい首を気遣いながら立ち上がった、毛布を畳んで脇へと寄せ眠っているリオネルの様子を見る。

彼女が口を開けば、その言葉遣いにげんなりするが、寝顔はとても可愛い。

あんまり気持ち良さそうなので、起こすのもどうかと思案していると、

「おはようございます」

背後から、鈴の音のような声が聞こえてくる。

「あ、メノアさん。おはようございます！」

僕は振り返り、この集落を束ねる美しい聖女様へ朝の挨拶をした。「すみません、リオが無理なお願いをしてしまいました」

「いいえ、僕は傷んでいる機体を見てもらえないんですよ。機体の状態は良好です、リオが上手く扱ってくれるでしょう」

毛布にくるまったまま、ころんと転がったリオネルを見ながら僕は答えた。

しかし疲労と寝不足で僕の頭は半分も動いていない、真剣な顔をしたリオネルが身振り手振りで語る武勇伝を、ずっと聞いていたせいだ。

「リオを迎えに来ました、そろそろきちんと寝かせないと」

メノアさんはリオネルの側へ寄ると、そつと小さな体を揺する。

「リオ、起きなさい。帰りますよ、リオネル！」

「む」

揺り起こされ、むっくりと体を起こしたりオネルはごしごしと目を擦る。まだ寝たりないのか酷く不機嫌な表情だ。

無理に起こさなくてもいいと思うんだけど、メノアさんの嫉は厳しいのだろうか。

「リステイさん、リオネルに気に入られたようですね。それが何故か分かりますか？」

「え？」

「リステイ・マフィン……いえ、リステイアード・セレスティ。私は、あなたを知っています」

メノアさんの唇が動いて零れ出た名前に、僕の心臓が一瞬跳ね上がった。

『リステイアード・セレスティ』

聞いた事もないその名前。

それは、僕の名前なのか？

「私もリオネルも……そしてあなたも、同じ種類の人間だからです。あの子はそれを敏感に感じ取っているのですしょう」

同じ種類の人間だって？　メノアさんの言葉に、僕の頭はさらに混乱した。

メノアさんとリオネルと僕に、いったいどのような共通点があるのだろうか。

「……メノアさん」

鍵が掛かっているような僕の記憶について、何かの手掛かりがあるのかも知れない。

「メノアさん、教えて下さい！」

僕は聖女に救いを求めるように、思い切って両手を広げて問い掛けた。

「僕には、過去の……過去の記憶の一部が無いんです。お願いです、何か知っているなら教えて下さい！」

過去を封じた扉を開ける鍵が手に入るのならば、僕はどんな事だつてするだろう。

しかしメノアさんは、硬い表情のまま首を横に振った、その碧い瞳が湛えるのは悲しみの色。

「思い出せないのなら、それはあなたにとって幸運な事かもしれない
せん」

救いを求める僕を、聖女と呼ばれる女性は素気なく突き放す。静
まらぬ心臓の鼓動が、じんじんと耳の奥にこだましている。僕は彼
女とは初対面の筈だ、どうしてメノアさんは僕を知っているのだろ
う？

『リースティード・セレスティ』それは本当に、僕の名前なのだ
ろうか。

「あの、メノアさん！」

震える声で、なおもメノアさんへ問い掛けようとした時だった。

「おいリースティ、急いでブリッジへ上がれ！ 外の様子ががとんで
もない事になっているぞ！」

格納庫へ飛び込んだのは、血相を変えているリュウジさん。

「リュウジさん！？」

いったい何が起こったというのだろうか？

僕は仕方なく、渦巻いているすべての疑問を頭の隅に追いやった。

12・廃墟を護る聖女（後）（後書き）

ほんの少しだけ、主人公であるリスティの謎が明らかに。
メノア、リオネル、リスティ……。

それぞれの得意分野で、通常の人間よりも高い能力を発揮します。

13・双壁の翼（前）

ブリッジへ飛び込んだ僕は、重い空気に一瞬たじろいだ。

ガデイさんをはじめ、主要なクルー達がブリッジに集まって難しい顔で立ちつくしている、こんな光景を見るのは初めてだった。

「ガデイさん！」

「来たか、ぼうず。こいつを見るよ」

ガデイさんに促され、僕はモニターへと映された外の様子を見て息を飲んだ。

念のためジュエル号は監視カメラを廃墟の外に設置していた、そのカメラが写した映像は、滞空する無数のセラフィム・タイプの姿を捉えている。

純白に輝く機体……盗賊がスクラップを修理した寄せ集めの機体ではない。

間違いなく、海上都市ヴィラノーヴァから飛び立った機体だろう。精巧に重なり合う一枚一枚の羽根、白い翼がはばたく度に燐光が煌めき大気に溶けていく。柔らかな曲線に形作られたしなやかな機体、その姿は人々にとって守護者となるべき役割を担うに相応しい。

……しかし、ヴィラノーヴァという神の城へ無謀にも剣の切っ先を向けた人間に、天使の名を持つ装甲兵は死の宣告という重い罰を与え続ける。

連合軍が運用する『VX-F型』を遥かに凌駕するセラフィムの機体性能、それは連合軍に『VX-F型』後継機の開発を断念させるほどの衝撃だった。

「盗賊なら何百機集まったって、問題無いんだけど」

顎に手を当てて、美鈴さんがつぶやく。

ヴィラノーヴァの直属である、いわば本物の『セラフィム・タイプ』と幾度もの交戦を経験している美鈴さんの言葉が、ブリッジ内の空気をさらに重くした。

「監視行動ではないのですか？」

「それはないわね。監視行動なら五機の編隊のみ、こんなにぞろぞろ集まったりしないわ」

首を傾げるミホロさんへ、美鈴さんはレーダーを指し示して説明した。

セラフィムは間違いなく、この研究施設を目標にしている。モニターを睨み付ける僕は、唇をきつく噛んだ。

「さあて、俺達は袋のネズミって訳だな」

ガデイさんが太い腕を組んで唸った。

モニターを見つめる他のクルーからも、有効な意見は出ない。僕は美鈴さんへ視線を送ったが、彼女は厳しい表情のまま首を横に振った。

「船では、正確な状況が把握出来ないようですね」

静かなブリッジ内へと響いた涼やかな声。

ブリッジの入り口に、真剣な表情のメノアさんが立っていた。

「メノア」

「こちらへ来て下さい、有効な対策も立てられるでしょう」

美鈴さんに厳しい表情で頷いたメノアさんは、さっと踵を返した。

メノアさんに案内されたのは、発電システムの集中コントロール室だ。

膨大な電力の発電と利用可能な電圧への変圧、各受変電設備への供給のための送電などを制御している。

「先ほどから数機のセラフィムが、この地下施設を何度も探査しているようです」

メノアさんへ、オペレーターが状況説明の補足をする。

忙しなくコントロールパネルを操作している数人のオペレーター達は、システム関係に詳しい経歴を持っている集落の人々だろう。

メノアさんはデータシートを持ち寄った彼らと、真剣な顔でやり取りをしている。

「警戒システムを起動しました、以後この場所を発令所として使用します。刻々と変わる外部の状況を正確に把握する事が可能です」
どうやら、議論がまとまったらしい。

メノアさんが、ジユエル号のブリッジクルー達に、最新の状況説明を始めた。集落の発電を制御している場所には、この研究施設を守っていた警戒システムがある。

実験データ收拾の終了と共に、ヴィラノーヴァの中央制御システムはこの研究施設を廃棄と位置付けていたはずだ。利用可能なデータは、すでにこの研究施設には残っていないだろう。

セラフィムが、ここを入念に探査しているという事実。用済みになった研究施設へ人間の生命反応がある事を、ヴィラノーヴァ中央制御システムが察知したのだろうか。

それとも、やはり僕が狙われているのか……。

「彼女は優秀よ、情報分析の信頼度は高いわ」

メノアさんを褒めた美鈴さんだが、その表情にはどこか影がある。一度、黒曜石の瞳を伏せた美鈴さんは顔を上げて、大きなモニターへ映されている映像を睨み付けた。

「ざっと、四十機位ね。順番に一機ずつ相手が出て来るのなら、まだ勝算があるのに」

美鈴さんの険しい表情。

「三分の一くらいは、私一人でも撃墜出来ると思うけど。一度に相手をするのは、まず不可能……」

三分の一を撃墜出来ると豪語する美鈴さんも凄いけど、確かにブレイバーも無限に攻撃を続けられる訳ではない。

ライフルに充填された、エネルギーにも限りがある。そして、接近戦用ブレードの耐久性も考慮しなければならない。

元々『VX-F型』の設計思想では、長時間の単独行動を想定していないのだ。

頼みの綱、ブレイバーを駆る美鈴さんに不可能と言われれば、僕達にはもう打つ手が無い。

その時、メノアさんが発令所内を見回した。

「少尉、私に提案があります。リオ！」

「あいよ！」

軽い調子で答えたりオネルが、ぴよんと撥ねて前に出る。メノアさんはリオネルの髪を撫でながら、くりくりとした碧い瞳をじっと見つめた。

「リオ、よく聞いて。この区域からセラフィムを排除しなければならぬわ。あなたの役目はセラフィムの陣形を崩す事です、撃墜する事は考えないで」

「えゝなんでだよ」

メノアさんに優しく髪を撫でられ、碧い瞳を細めてくすぐったそうな顔をしていたリオネルが、途端に唇を尖らせた。

「リオ、お願い。あなたの行動は、いつものように私がサポートします。セラフィムの撃墜は小尉に任せて」

リオネルは不服そうに頬を膨らませているが、どうやら承諾したようだ。

メノアさんは、ばん！ とリオネルの頭へ手を置いて頷くと顔を上げた。

「少尉、リオがセラフィムを攪乱します。陣型が崩れたら、セラフィムを各個撃破して下さい。牽制の必要が無いため、ライフルのエネルギー消費も極力抑えられます」

「メノアさん、待つて下さい！ たった一機で攪乱なんて、リオネルに危険はないんですか？」

僕にはメノアさんの提案した作戦が納得出来ない。

セラフィムの機動力は『VX-F型』を大きく上回る。ノーマル仕様のライオネル一機では、攪乱するどころか逆に包囲されてしまう危険が高いからだ。

「大丈夫、リオは特別な子です。それから、リオの身は私が守りま

す」

僕の不安そうな表情を読みとったのだろう。メノアさんがきつぱりと言った。

しかしそんな言葉だけでは理由になっていない、僕がさらに問いただそうとすると、

「お前、あたしを心配してくれるのか？」

にんまりと笑ったリオネルが、猫のように僕にまとわりつく。

「安心しなよ。メノアがいてくれれば、あたしは大丈夫だから！」

どんな絆が存在するのか僕には分からないが、リオネルはメノアさんを絶対的に信頼しているらしい。そんな僕の気も知らず、僕へ無邪気にじゃれつくりオネル。

僕が困っていると、ずいっ！との目の前に立った、美鈴さんの瞳が半眼になった。

（え！？）

そう思った瞬間、美鈴さんの右手がすっと僕の顔面に伸びて来た。まずい！僕は咄嗟に、身を固くする。

「痛たたっ！」

予想通り美鈴さんに思いつ切り額を弾かれて、目の前にいくつも星の残像が見えた。

「この馬鹿！ 鼻の下伸ばしているんじゃないの。死にたくなかったら、きびきび動きなさい！」

ずきずきと痛む額を押さえてうめく僕を挟み、リオネルと美鈴さんの間に険悪な雰囲気が渦巻いている。僕には何が何だか分からない、二人のコンビネーションを必要とする作戦なのに。しゃがみ込んで渗んだ涙を拭う僕をよそに、その間にもメノアさんは次々に指示を出してゆく。

「ガディ船長、ジュエル号は装甲兵を積載しているのですか？」

「ああ、チャリオットが三機あるぜ？」

メノアさんの問いに、ガディさんが無精髭でざらつく顎を撫でながら答えた。

「では実弾装填式で構いません、ライフルを装備して下さい。最終防衛ラインへの配置をお願いします。セラフイムが集落へと入り込むような想定外の事態が起こらない限り、発砲はしなくても結構です……おそらく危険は少ないでしょう」

「分かった、すぐ準備に掛からせる。おい、ミホロ！ お前はここに残れ、船との連絡役だ」

ガデイさんの指示に、メノアさんがミホロさんへと通信機のヘッドセットを差し出す。

「通信士の方ですね。では、お任せ出来ますか？」

「は、はい。頑張ります！」

直立不動になったミホロさんが、緊張した面持ちでメノアさんに敬礼する。

「少尉とリオはすぐに各自の機体へ搭乗して下さい。リステイさん、少尉のバックアップはお任せします！」

「はい！」

僕は大きな声で返事をしたけど、美鈴さんは不機嫌そうな表情で僕を睨み付け、

「張り切ってるんじゃないの。私は、あんなにか当てにしていないわよ」

そんな刺だらけの言葉を僕に投げつけると、「ふん！」とそっぽを向いた。

美鈴さんは、いったい何を怒っているんだろう？

「リステイ、あたしに任しておけよ！」

そして美鈴さんは僕へ手を振り続けている、リオネルの首根っこをむんと掴む。

「ああっ、何するんだよっ！」

「いいから、あんたも早く来るのよっ！」

肩を怒らせた美鈴さんは、ジタバタと暴れるリオネルを引きずって発令所を後にした。

13・双壁の翼（前）（後書き）

海上都市ヴィラノーヴァは、何の意図でセラフィムの編隊を送ったのか。

狙うは「危険因子」リスティの命なのか。

美鈴とリオネルのコンビネーションは……大丈夫でしょうか？

14・双壁の翼（後）

美鈴さんが搭乗する真紅のブレイバーと、リオネルが搭乗する白いライオネルが空へと舞い上がる。

その二機を待ち構えるように空に浮かぶ、セラフィムの白い機体。それが祝福を与えてくれる姿であれば、どんなに神々しく瞳に映るのだろう。ブレイバーとライオネルを捕捉したのだろう、セラフィムの陣型が変化していく。

『メノア、準備が出来た！』

『ブレイバー、美鈴より発令所へ！ 配置に付いた。メノア、セラフィムが迎撃体制を取りつつある、指示を！』

発令所内へ響いた声。メノアさんの元へ、美鈴さんとリオネルからの通信が入る。

「集落からの避難は、進んでいますか？」

「はい、すでに完了しています！」

集落の人々の不安を取り除きたいのだろう、メノアさんが小さく微笑んだ。

「ありがとうございます。心配しないでと、みなさんにそう伝えて下さい」

メノアさんはオペレーターに声を掛け、再びモニターを見据える。

「小尉、その位置でしばらく待機願います。リオ、聞こえますか？」

『了解、ブレイバーは現状のまま待機する！』

『メノアの綺麗な声、聞こえるよ！』

「了解です少尉。リオ、端的に答えなさい。いいですか？ リオ。

作戦開始と同時に中央突破、迎撃態勢を取るセラフィムの陣形を、真つ二つに分断しなさい」

「ええっ！」

メノアさんの指示に、僕は驚いた。無茶だ、いきなり正面から突撃させるなんて。

「リオ、準備はいい？」

『おっけー!』

しかし、どこまでも気楽なりオネルの返事。

「ミツシヨン・スタート!」

メノアさんの合図と同時に、フライト・ユニットを全開にしたライオネルが最大加速に移る。突入して来るライオネルを迎撃しようと、散開した数機のセラフィムがライフルを斉射した。

虹色に煌めく光が殺到する。

直撃を受けそうになる寸前で機体を幾度も回転させるライオネルは、浴びせ掛けられる全てのエネルギー弾を回避した。その白い装甲は、目映いエネルギー弾が通過する軌跡を映すだけだ。

「そんな! どうやったら、あんな回避行動が出来るんだ!？」

ひよつとしたら、リオネルにはライフルのエネルギー弾が止まって見えてるんじゃないのか? 目の前の光景がとても信じられない、僕は頭を抱えた。

そうだ、ライオネルは間違いなくノーマル状態なのだ。ブレイバーほどに、カスタム化されている訳ではないのに……。

舌を巻いている僕を置き去りに、セラフィムの真っ直中をあつさり突き抜けたライオネル。リオネルの奔放な挑発に煽られ、よるめいた数機のセラフィムの隙を美鈴さんは逃さない。ブレイバーの射撃がセラフィムの機体胸部、コントロールユニットを撃ち抜く。

いくつもの爆光が広がり、セラフィムがブレイバーへと攻撃目標を変更する動作を見せた。しかし、セラフィムの間を突き抜けて急旋回したライオネルは、再び機体を捻ると錐揉み状態で突進する。

リオネルは、どんな平行感覚をしているのだろうか?

錐揉み状態のままライフルを構え、的確な射撃で攻撃行動に移ろうとするセラフィムの勢いを削ぐ。

セラフィムの陣形を細かに分断しながら、縦横無尽に空を駆けるライオネル。

翻弄されるセラフィムは、再度攻撃目標をライオネルへと変更しようとして動きを止め、その際に生まれた隙を逃すことなく、美鈴

さんが次々とセラフィムを撃墜していく。

その繰り返しだ。

「機体速度そのまま！ 二時の方向へライフル発射、他は無視しなさい！ リオ、まだ加速が足りません！」

作戦開始と同時に、モニターを見つめながらリオネルに指示を出し続けるメノアさんは瞬きを全くしていない。無表情の碧い瞳は見開かれたまま、モニターに映るライオネルの姿を追っている。

「後方より三機！ 左に捻りなさい。機体を沈めて右方向の二機を牽制、後は少尉に任せて！ 機体の高度が低下、失速します。バーニア全開、高度を上げなさい！」

矢継ぎ早に繰り返される、メノアさんの指示。

しかもその指示は、セラフィムの数瞬後の行動を的確に予想している。まるで、無人機としてプログラムされたセラフィムの行動パターンを、全て把握しているかのようだ。

そんなコンピュータの様な事が、人間に出来るのだろうか？

「リオ、下から二機急速接近！ ただの威嚇です、逆噴射で減速、後退！」

メノアさんの指示へ鋭敏に、そして正確に反応したライオネルがスラスター、フライト・ユニットのバーニアを逆噴射、急制動をかけて後退する。

「上昇した二機はそのまま放置！ 少尉の射程圏内です。右バーニア全開、機体反転！ 後方二機、セラフィムのフライト・ユニットへライフル斉射！」

メノアさんがリオネルに与える指示は、まさに予言だ。

彼女が与える、全ての指示通りにリオネルが機体を操り、セラフィムを絶妙に美鈴さんの射程圏内へと追い込んでゆく。

メノアさんの状況予測と、リオネルの機体制御……。

この二つが重なり合わなければ、絶対に成立しない作戦。

そしてリオネルの動きに隠れて目立たないが、プレイヤーを操る美鈴さんの射撃は正確無比。目まぐるしく対空位置を変えながら、

確実にライフルの一撃でセラフィムを撃墜していく。美鈴さんとリオネルのコンビネーションで、セラフィムはその数を半数以上減じている。

「撃墜数が、二十機を超えた！」

僕は思わず、身乗り出す。

『機体が軽くて、思いのままに動くぜ！ サンキュー、リスティ！』
セラフィムの数が減って気が緩んだのだろう、リオネルの軽口が発令所に響く。

「リオ！ 油断をしてはいけません！」

メノアさんがリオネルを注意しようと叫んだ直後だった、セラフィムが放ったライフルのエネルギー弾が、リオネルのフライト・ユニットの片翼を掠めた。

衝撃は軽いものの、リオネルの機体が一瞬怯む。

「リオっ！」

彼女の計算が狂った瞬間なのか、メノアさんが叫び声を上げる。

ミホロさんが、思わず顔を手で覆った。

リオネルが、バランスを崩した機体の制御を行う間もなかった。突出してきたセラフィムが振り降ろしたブレードが、リオネルのマニピレーターが握るライフルの銃身を切断する。続けざまに浴びせ掛けられる凄まじい斬撃に、左腕に装備されたシールドと各所の装甲が吹き飛ぶ。

防御も回避もままならず、動きが止まったリオネルへ迫る数機のセラフィムが、再びブレードを振り上げた瞬間だった。リオネルへと肉迫したセラフィムの頭部へ吸い込まれるように、一振りのブレードが深々と突き刺さる。

ブレイバーが自機に装備されている、接近戦用ブレードをセラフィムへと投じたのだ。

そしてフライト・ユニットが燃え尽きんばかりに加速したブレイバーが、なおもリオネルへと攻撃を仕掛けるセラフィムを蹴りつけ、勢いに任せて振り抜いたブレイバーの右足が、セラフィムの頭

部を粉碎した。

窮地を脱したライオネルと、ブレイバーは互いに背中を合わせて滞空する。

『借りが出来たな、美鈴！』

『返さなくても結構よ、リオ！』

発令所に響く美鈴さんとリオネルの会話に、僕はほっと胸をなで下ろした。

「小尉……」

安堵した表情、メノアさんが胸の前で手を組んだ。

『行くよ、美鈴っ！』

セラフィムの頭部に突き刺さっていたブレードを握り、双剣を振りかざすリオネルが、次々とセラフィムを両断していく。

『メノア！』

「了解です少尉。リオネルの援護をお願いします！」

リオネルの無事を確認し、エネルギーが切れたライフルを投げ捨てたブレイバーが、天空に突き上げた左腕を勢い良く振り下ろす。

左腕に装着したシールドから姿を現し、前方へと真っ直ぐスライドした長大な刀身が、唸りを上げて振動を開始した。

接近戦に転じた、ブレイバーとライオネル。

その二機に向かって、集中砲火を浴びせようと数機のセラフィムがライフルを向ける。しかし、二機を照準に捉えたセラフィムのライフルが火を噴くことはなかった。

幾発もの直撃弾を受けて、セラフィムが空中で釘付けになる。

ライフルを構え、地下通路から姿を現した三機のチャリオットが、セラフィムへと景気良く発砲している。

ガディさんの指示なのだろうか？ 血気盛んなジュエル号のクルー達の事だ、居ても立ってもいらなかったのかもしれない。

機体の半身ほどの長さを持つブレードを、易々と振りかざすブレイバー。

刀身が巻き起こす旋風は、まるで竜巻に引き込むようにセラフィ

ムの機体を巻き上げて切断する。チャリオットからの援護が功を奏し、残りのセラフィムは完全に統制が取れなくなったようだ。

こうなれば、もはや掃討戦でしかない。

そして最後の一機へと迫ったライオネルが、鮮やかにその胴を薙ぎ払った。

発令所内に、安堵が広がっていく。

荒れた大地で燃える撃墜されたセラフィムから立ち上る噴煙が、まるで狼煙の様に幾筋も立ち上っている。

バラバラになって横たわるセラフィムの残骸、それはあまりにも凄惨な光景だ。

「セラフィム、全機撃破ですっ！」

涙をこぼしながら叫ぶミホロさん。

モニターから目を離れたメノアさんも、やっと肩の力を抜いたようだ。しかし、僕はリーダーに映った光点を睨み付けていた。喜んでなどいられない。

本当の敵は、すぐそこまで迫っていた。

14・双壁の翼（後）（後書き）

美鈴とリオネル、メノアの連携で、セラフィムを撃破ですつ！
でも、本当の驚異にリステイは気付いていました。
今度は、リステイが頑張りますっ！

15・死神を運ぶ船

空へと立ち上り続ける、黒々とした不気味な噴煙。

戦闘を終えたブレイバーが、地上へと降り立った。踵から飛び出したフックが乾いた大地に食い込み、真紅の機体を安定させる。

「まだ、何か来る！」

残存するセラフィムがいないかと警戒していた美鈴は、レーダーへと灯った光点に気付き、ヘルメットのバイザーを開けて叫んだ。ブレイバーのレーダーに映った影、とてつもなく巨大な飛行物体がゆっくりと接近して来る。

ただならぬものを感じた美鈴は、ブレイバーに残されている武装を確認して鋭く舌打ちした。

エネルギー切れのライフルは、すでに投棄している。ブレイバーの接近戦用ブレードはリオネル機が使用しているが、もはや耐久限界を超えているだろう。

そして左腕のシールドに装備した大型の接近戦用ブレードも、あと数分程度しか稼働時間が残されていない。残る武器は、肩部に搭載されたバルカン砲のみ。

これでは、ともに攻撃など出来ない。

近くに着陸しているライオネルは、フライト・ユニットに深刻なダメージを受けているはずだ。

しかし、今から補給や補修をしている時間は無いかもしれない――

美鈴は、手を伸ばして通信機のスイッチを入れた。

「ブレイバーより発令所へ！ そちらのレーダーは何か捕捉している？ こちら側の故障でなければ、巨大な飛行物体が接近している

と思われる、こちらへ至急情報を！」

発令所へと響いた、美鈴さんの緊迫した声。

間違いなく発令所のリーダーにも捕捉されている、最大望遠にしたモニターへと映った機影。真っ直ぐにこちらへと近づいて来る、それは死神を乗せた船。

あの巨大な戦闘空母は、殲滅戦を主たる目的とした『死神の船』

だ。僕は睨み付けていた目の前のリーダーを、力任せに殴りつける。大きな音が響いて、皆が息を飲んだ。湧き上がったいた発令所が、水を打ったように静まり返りついている。僕が殴りつけたコントロールパネルがひしゃげ、その様子を見てびくりと後退りするミホ口さん。発令所にいる誰もが、驚いたように僕を見つめていた。

しかし僕には、そんな視線などまったく気にならない。

怒りのあまり叩き付けた拳に血が滲んでいるが、僕は少しも痛みを感じなかった。

「あんな物まで……あんな物まで、引つ張り出すのか！」

体の中から吹き出す憤激、まるで全身の血液が沸騰したようだ。

「くそっ、ふざけるなよ！」

壁を力任せに殴りつけ、僕はコントロールルームを飛び出す。

無意識にエレベーターを使おうとしたが、稼働していない事に気が付く。エレベーターの横に階段がある事を思い出し、僕は扉を思い切り蹴破った。

「こんな凄惨なやり方をしてまで、お前らに人間を裁く権利があるのか！」

憤激に突き動かされ、地下へと続く冷たい階段を駆け下りていく。無機質な壁が続く建物の中を走る、道順を間違える事など絶対にあり得ない。

この研究施設の地下には、大規模な発電システムが設置されている。

そして――。

僕は階段の終わりに見えてきた扉に近づくと、作業服の左胸のポ

ケットから一枚のディスクを取り出し、急いで扉のロックシステムに読み込ませた。

しばらく待つとディスクが挿入口から戻される、ロックが解除されて分厚い扉が音もなく開いた。

僕はディスクをひったくると、無造作にポケットへと戻して室内へと駆け込む。その扉の向こうにあるもの、それは巨大な実験設備だ。

扉に掲げられているプレート、記されている文字は。

『Light spear of God』……そう、それは神の光槍。

高出力のエネルギー衝撃波を発射する、巨大な砲台の実験装置。

凄まじい威力を発揮するこの兵器を装甲兵に装備させる為、小型軽量化の実験が繰り返し行われた。この土地の厳しい環境は人を寄せ付けない、実験にはとても都合の良い場所だった。

僕は、何度も条件を変えて実験の指示を出した事を思い出した。

今になって思えば、その行為は禁忌に触れる事だったのか。

そして光の槍の前に、僕の心は竦んでしまいそうになる。

僕は以前、身を隠していた廃墟でこの光の槍に灼かれるところだったのだ。

駄目だ――。

怖がつてなどいられない、そんな思いに捕らわれている時間など微塵も無い。

調べてみたが砲台の制御システムは全く痛んでいない、電力さえ供給出来ればすぐにでも稼働するはずだ。

薄暗い施設内でおぼろに照り返す「神の光槍」を放つ砲身を睨み付け、シートに座り制御システムの起動スイッチに手を掛けた時、「あなたはやはり、この実験装置をご存じなのですね？」

実験室内に響く澄んだ声。

驚いた僕が振り返ると、そこにはメノアさんの姿があった。

「メノアさん!？」

僕は心臓が止まるかと思った。

「メノアさん、僕は……」

「リスティさん、話は後です。時間がありません、発射準備に掛かりましょう」

口籠もる僕に構うことなく、メノアさんがコントロールパネルの操作を始める。もう時間が無い。そうだ、彼女の言うとおりだ。

システムの起動スイッチを入れると、実験施設が稼働を開始する。室内に明かりが灯り、コントロールパネルの計器類が振れる。微かに機器の冷却用ファンの音が聞こえ始めた。

「絶対に撃墜しないと」

コントロールパネルを操作していると、外すのを忘れていた通信機から美鈴さんの声が聞こえた。

『リスティ、聞こえる? いったい何をやっているの!??』

「美鈴さん、リオネルと一緒に後退して下さい。『殲滅戦用空母』が接近しているんです!」

『殲滅戦用空母? 何よそれは!』

美鈴さんの声音に、彼女の苛立ちを感じる。戦場に於いて発揮される鋭敏な勘が、大きな危険を知らせているのだろう。

「あれは巨大な爆撃機です! 攻撃圏内に入る前に撃墜します」

『爆撃機? あんなうすノ口、あたしがコントロールユニットを破壊してやるよ!』

「それは駄目だ、リオネル!」

僕の鋭い叫び声に驚いたのか、リオネルが押し黙る。

「ごめん。ごめんな、リオネル!」

『リスティ、理由を説明しなさい!』

美鈴さんには『殲滅戦用空母』の脅威が、理解出来ないのだろう。
「リスティさん、通信機を私に貸して下さい」

僕は通信機のヘッドセットを外して、メノアさんに手渡した。

「少尉。時間がありません、簡易的ですが説明します。殲滅戦用空母には、ひとつのユニットに数百体の機人兵がセットされています。空母に積載されているユニットはおおよそ十基、攻撃対象の直上で次々と本体からユニットを投下します」

地上に投下されたユニットから現れた千体以上の機人兵は、センサーに感知する生命反応を頼りに殺戮を始める。

彼等に与えられた命令は、殲滅……それこそ、すべての命を根絶やしにするように。

「機人兵がセットされている全てのユニットを一撃で破壊しないと、個々に独立しているユニットが、次々に地上へ投下される仕組みなのです。投下された機人兵は目標へ殺到し、破壊と殺戮の限りを尽くすでしょう」

空母に搭載されているユニットの全てを、一瞬で焼き払わねば大変な事になる。

「殲滅戦用空母は大戦末期、ヴィランーヴアが運用を開始するとう噂がありました。機体データも情報部にはあったようですが。劣勢の連合軍が混乱を避けるために、ひた隠しにしていた情報です」

美鈴さんと会話をしながらも、キーボードを叩くメノアさんの素早い手捌きは止まらない。まるで全ての操作手順を熟知しているように、流れるようにシステムをコントロールしている。

「この集落の地下には、海上都市の技術によって建造された実験兵器があります。私達が独自に調査を進めていたので、動作確認は完了しています」

メノアさんは、一度僕へと視線を向けた。

「コントロールシステムの起動が完了しました、リステイさんに砲手を任せます。コントロールシステムの操作、照準及び射撃のサポートは私が行います。少尉はリオネルと共に、しばらく待機しててください」

『了解。いま、私に出来る事はなさそうですね。ブレイバーは現状で待

機する、ただし情報は逐一転送して！」

「了解です、少尉！」

同部隊だった事を窺わせる、二人の通信のやり取り。

メノアさんは一通りの事を美鈴さんに答えると、通信機のヘッドセットを僕へと差し出した。

「不思議ですか？」

「え？」

「あなたの言葉を借りるのなら、記憶の一部を封じた鍵を外した状態なんです。私も、そしてリオネルも」

僕を見つめる真剣な表情のメノアさん瞳が一瞬だけ、哀しげな光を映した――。

「入力数値、分かりますか？」

「は、はい！」

我に返った僕が示す最も有効なエネルギー衝撃波の収束効率の数値を、メノアさんが再び目にも留まらぬ早さでキーボードを叩き入力していく。

全ての入力を完了させると発射ボタンの赤色灯が灯り、僕の目の前に銃のグリップを模した発射装置が迫り出す。

使い込まれた砲身の引き金だ。

しかし。同時に施設内に大きな振動が起こり、メノアさんの前のモニターへと警告を発するメッセージが表示された。

「砲身を地上へ出すためのエレベーター、及びハッチの動作が不能です！」

「そんな！」

メノアさんが表示された警告の要因を読み上げ、それを聞いた僕は思わずシートから腰を浮かせた。廃棄された研究施設なので、メンテナンスなど全く行われていなかったからだろう。

くそっ！ こんなところで、つまずくなんて！

『リステイ！ 何か問題が発生したの？』

「エレベーターの故障です。このままでは砲身が地上に出せないん

です！」

美鈴さんの通信に、僕は現状を報告した。

『ブレイバーでハッチを破る、それで発射は可能なの？』

「それだけでは駄目なんです、砲身を載せたエレベーターの動作不良がどうしようもない！」

美鈴さんは、しばらく考えていたようだ。ほどなくして、ブレイバーから通信を求める電子音が響いた。

『ひとつ質問するわ、ブレイバーでランチャーを発射する事は可能！？』

「それは可能ですが……ブレイバーでは照準しか制御出来ません。トリガーはコントロールセンターで受け持つ事になります。まずは砲身を地上へ持ち出して、各種の接続部品を繋ぐ作業が必要です！」
「もう時間がない、やってみるまでよ！ ブレイバーへマップデータを転送して！」

美鈴さんは本気だ。

マップデータの詳細情報呼び出すために、メノアさんがすぐさまキーボードを叩き始める。

『砲身のエレベーターハッチの場所を、ブレイバーへ転送します！』

「リオ、付いて来なさい！」

『あいよ、分かった！』

メノアの通信を聞いたあと、モニターへ開いたマップのマーカーを確認した美鈴は、踵のフックを外しフライトユニットを最大噴射して、ブレイバーを跳躍させた。上空でマップが示す光点と地形を一致させると同時に左腕を振り上げ、稼働限界が近い大型接近戦用ブレードを最大発振させる。

「そこだっ！」

ブレイバーが大地を分断するとき勢いで、ブレードを思い

切り叩き付ける。

凄まじい衝撃と共に砂塵が吹き上がり、乾いた土の下へと隠されていた鋼鉄の開閉式ハッチが破られた。

「エレベーターハッチの破壊を確認。ブレイバー及びライオネルは、施設構内に進入してランチャーを確保する！」

破壊したハッチを大きくこじ開けて進入口を確保し、構内にブレイバーとライオネル機が入り込む。

薄暗い構内でエレベーターに乗っている、その長大な砲身。

「何よ、これ……」

「ほへ、大きくて、長い大砲だあ」

美鈴が息を飲む、ライオネルの驚嘆する声も流れてきた。

砲身の長さはブレイバーの全長の倍以上ある、エレベーターへと固定されている砲身には、様々なケーブルが接続されていた。

「リオ！ 手を貸して、この大きなランチャーを取り外して地上に出すわ」

「ええっ！ こんな長い持ち出して、どうするんだよ！」

「ブレイバーでこいつを撃つのよ。リオ、早く手伝って！」

美鈴は稼働限界を超え、用済みになった左腕の大型接近戦用ブレードをその場に切り離すと、急いでランチャーをエレベーターから取り外す作業に取り掛かった。

モニターへと映っている両翼を左右に広げた巨大なエイを思わせる『殲滅戦用空母』は、真っ直ぐに向かって来る。

鋼鉄の鎧を纏う、死に神を解き放つために――。

もう、一刻の猶予も残されてはいない。

15・死神を運ぶ船（後書き）

迫り来る、死神の驚異。

ブレイバーとライオネルは、既に戦闘行動を取る事は不可能です。

神の光槍……リスティは、この実験施設を知っていました。

少しずつ、リスティという青年を語ります。

16・神の光槍

長大な砲身をエレベーターから外す作業は、ブレイバーとライオネルにより難なく終了した。二機は構内から砲身を運び出し、同時に各種ケーブルとチューブ類と、その接続プラグを引きずり出した。ブレイバーが、背部に装備したフライト・ユニットを切り離す。肩部と腰部から数本のアンカーを射出、機体をワイヤーで大地に繋ぎ止めて固定すると、ランチャーを鋼鉄の両腕でしっかりと保持させた。

「リオ！ コントロールケーブルとエネルギー注入用チューブを、ランチャーへ接続して！」

「うえーこんな複雑なの、分かんないよ！」

「ぐだぐだ言わない！ 知恵を絞るのよ！」

美鈴はレーダーを監視しながら、ブレイバーの姿勢制御の数値を変更する。

リオネルは複雑なケーブルの接続に泣き言を漏らしながらも、器用にマニピレーターを操り、全てのケーブル及びチューブをランチャーへと接続していく。

長大な砲身を高々と振り上げたブレイバーは、真っ直ぐに向かい来る殲滅戦用空母へとその砲口を向けた。

その黒く巨大な機体は、もう肉眼で確認出来るほどに接近している。

「メノア、照準をコントロールシステムと同期して！」

『了解、同期開始……同期完了です！』

「こちらも確認した、コントロールシステムへ照準のリアルタイムデータ転送を開始する！ 現在射程内でのエネルギー収束率は計算通り、照準誤差は範囲内！」

次々と発射態勢が整っていく。

僕は震え出す右手を掴み、荒い息をつきながら体を丸めた。

「ランチャーの薬室内へのエネルギー供給開始、完了と同時に圧縮に入ります！」

メノアさんの報告。

僕はトリガーへと震える指を掛けた……しかし。

怖い、とても怖い。

不安と恐怖が、僕の体に覆い被さってくる。

『リステイ。状況はどうなの、答えなさい！』

突然、美鈴さんの声が響いた。

「リステイさん、もう距離がありません。殲滅戦用空母が攻撃態勢を取れば最後です。薬室内へのエネルギー充填完了から圧縮、ライフリングの正常回転まで、どのくらいの時間が掛かるか分からないんですよ！？」

冷静なメノアさんも、焦り始めている。

「でも、でも美鈴さん。やっぱり無茶です！ こんなランチャーを保持して射撃すれば、ブレイバーも無事では済まないですよ！」

『この大馬鹿野郎！ 誰がそんな事を心配しろって言った！』

耳に当てた、通信機からの音が割れるほどの怒声が響いた。

今までで一番激しい怒り、美鈴さんが本気で怒っている。

『メノアあ、美鈴が怖いよ』

美鈴さんの貫くような鋭い叫び声に、驚いたリオネルが泣きそうな声を出した。

「リオ、大丈夫です。あなたは少尉の機体をバックアップすることに専念しなさい。後はしっかりと操縦桿を握って機体の姿勢を固定すること、大丈夫だから」

『……うん』

しゃくり上げるリオネルはメノアさんの優しい声に励まされ、機体をブレイバーの背後へ移動させて固定する。

『リステイ、あんたも男なんでしょう？ 怖がっていないで、しゃきつとしなさい！』

「分かっています、でも！」

僕は美鈴さんの照準と、圧縮した高圧のエネルギーを解放させるトリガーとのタイミングを合わせなければならない。

画面上で、射撃対象への照準が揺れている。

単に撃墜するだけなら難しくないが、確実に殲滅戦用空母の胴体部分への着弾を成功させなければならない。兵器の小型化を目的とした実験装置なので、精密な射撃精度や連射性を考慮されているわけではない、しかもランチャーを保持して照準をコントロールしているのはブレイバーなのだ。

もともと固定式の砲台だ、装甲兵が保持して射撃すること自体に無理がある。美鈴さんが作業用のスティックで行う、マニピレーター（マニピレータ）の繊細な操作は神業に近い。

しかし、どうしても微妙に揺れている照準に僕は焦った。

次弾のエネルギーを薬室内に装填、圧縮するにはかなりの時間が必要になる。第一射に賭けなければならない、これを外せば全てが終わってしまう。

そうだ、僕がしくじればどんな惨劇が起こるのか目に見えている。絶対に失敗は許されない、それを考えただけで急に体が震え出した。

恐ろしさのあまり手の震えが止まらず、僕にはトリガーを引く事が出来ない。

『リステイ、よく聞きなさい！』

その時、僕の耳に響いた美鈴さんの声。

「美鈴さん……」

『いい？ 息を止めては駄目よ』

僕の耳に届くのは、美鈴さんの落ち着いた優しい声。微笑む黒曜石の瞳で見つめられたようだ。

『目を閉じなさい、私と呼吸を合わせるの。はじめに大きく吸ってから吐く、私が三つ数えたら目を開くのよ、オーケー！？』

僕は美鈴さんの言葉を聞き逃さぬように耳を澄ます。

通信機から聞こえる美鈴さんの息づかいに合わせ、ゆっくりと呼

吸を繰り返した。

焦る気持ちが無くなるわけではないけど、随分と胸の辺りが楽になった気がする。

『三、二、一！』

美鈴さんの合図で目を開く。

『目を開いたら、あの馬鹿でかい相手の姿をしつかりと見据えなさい。いい？ あいつらの目的は何？ 殺戮よ！ 大地に川のように血が流れ、多くの屍が晒されるわ。そんな事が許されるの！？』

少しずつ、美鈴さんの口調が激しくなってくる。

そして僕の心に強い感情が芽生え、頭を持ち上げた。

そうだ、みんなを守りたい。

『あなたなら出来るわ！ でも、あなた一人で立ち向かうんじゃない……聞こえる？ いいわね、あなたの側には私がいる！』

何よりも心強い、美鈴さんの言葉。

『分かった！？』

『はい！』

僕はグリップを握る手に力を込めた、ふっと美鈴さんの両手が僕の手に重ねられたような錯覚を感じる。

「薬室内のエネルギー充填及び圧縮完了！ ライフリングの回転安定しました、発射準備完了！」

メノアさんの叫び声。

その瞬間。照準が固定されて、殲滅戦用空母の黒い機体がロックされた。

『今だ、叩き落とせっ！』

美鈴さんの叫び声と同時に、僕はトリガーを引き絞る。

ブレイバーが構える長大な砲身から、目映い純白のエネルギー衝撃波が迸る。

体を揺さぶる激震と轟音、激しい砂嵐が吹き上がった。

「美鈴さん、リオネルっ！」

僕は思わず叫び声を上げた。

発射された高圧のエネルギー衝撃波の余波、バックファイアをまともに受けて、ランチャーを保持しているブレイバーの頭部が全壊し、両腕の装甲、関節、マニピレーターがバラバラに崩壊していく。

機体を固定していたワイヤーが千切れ、大地に打ち込んだ全てのアンカーが弾ける。

衝撃に耐えられなくなったブレイバーは、背後でバックアップしていたライオネルを巻き込み、二機は遙か後方へと吹き飛ばされて大地の上を転がった。

放たれた光はまさに、『神が携えし閃光の槍』

地表を包む熱い大気をさらに灼きながら、一直線に伸びていく純白のエネルギー衝撃波は狙い変わらず、殲滅戦用空母の胴体部分を呑み込んだ。

光の槍は死に神の船を貫き、構成する全ての部品、悪夢を撒き散らす千体以上の機人兵を溶解させていく。

光に刺し貫かれた巨大なエイが、空中で苦悶するように身をよじった後、大気を震わせる轟音と共に巨大な爆光に包まれた。

「撃墜……です」

呆然としたメノアさんの声。

そうだ、僕が投げた光の槍は滅びや破壊をもたらすものではない。大切な命を守り、繋いでいくための希望の光だ。

全身から力が抜けていく。ぼんやりと画面の中の爆光を見つめながら、僕はいつの間にか涙を流していた。

「皆さんの事をよろしくお願いします」

メノアさんは、ガディさんへ深々と頭を下げた。

この研究施設跡に留まるのは危険だ。集落で暮らしているすべての人々を、ジューエル号が安全な居住コアへと送り届ける事になった

のだ。聖女様と慕うメノアさんと分かれる事を集落の人々は拒んだが、彼女の熱心な説得によりやく応じてくれた。

「この研究施設は、私が責任を持って処分します」

メノアさんは愛した人の墓標の前で、泣き笑いの表情で美鈴さんに言った。

「もう少し、トゥリープの側に居させて下さい」

美鈴さんは、メノアさんを連れて行くつもりだったようだが、メノアさんの言葉に黙って頷いただけだった。

「安心しろよ、メノアにはあたしが付いてるんだから、ちゃんと守るよ！」

おでこに大きな絆創膏を張ったリオネルが、満面の笑顔で僕にウインクした。

「はっ！ 笑わせないで、守ってもらうの間違いじゃないの？」

「何だよ美鈴、喧嘩売ってんのか！？」

よせばいいのに、リオネルを挑発する美鈴さん。

二人の視線が真っ正面からぶつかり、ばちばちと火花が散っている。

呆れて二人を眺めていると、メノアさんが僕の側に立っていた。

「リステイ・マフィン。私は、あなたを信じていますから」

メノアさんは、僕の首に掛かっている銀のペンダントへそつと指で触れる。

強い光を湛え、静かに微笑んでいる碧い瞳。

「どうかあなたに、安らぎの日々が訪れますように……」

ジュエル号は、再び荒れた大地を進む。

向かうのは最大の居住コア「クレイバーク」だ。

「ねえ、まだ終わらないの？ ほらほら、盗賊が出るわよ」

汗だくでブレイバーの修理作業を続ける僕の背に、美鈴さんが投

げつける容赦のない言葉。僕はそんな彼女の言葉を黙殺し、ただ黙々と体を動かし続ける。

ブランドイさんの加工した内部フレームは、あれほどの衝撃を受けても微細なダメージで済んでいる、僕にとってこれは大きな救いだ。

ドラム缶に背を預けている美鈴さんは、体のあちこちに打撲を受けて包帯を巻いているが、いたって元気そうだ。

…… 案外、頑丈なんだ。

「ほら、盗賊が」

「あゝっ、うるさいっ！」

ついに我慢が限界の頂点を越えた、僕はスパナを足下に投げつけて勢いよく振り返る。

「気が散るんです、少し静かにして下さい！」

怒鳴った僕は、ふとメノアさんの事を思い出した。

急に頭の中が冷静になる。あの場所に一時でも留まる事が、彼女の心を苦しませはしないかと心配になった。

「美鈴さん。メノアさんは大丈夫でしょうか」

「心配要らないわ。リオがちゃんとメノアを守るわよ」

僕の問い掛けに、美鈴さんはのんびりと頭の後ろで腕を組んだまま、ぼつりと答えた。

へえ……。

「美鈴さん。リオネルの事を、きちんと認めてるんですね」

「う、うるさいわね！」

感心したように僕が言うと、我に返った美鈴さんは急にふいっとそっぽを向いた。

気のせいかな、頬がほんのり赤くなっている。

「い、いいから早くブレイバーを修理しなさい！ いま盗賊に襲われたら、私はチャリオットで出なきゃならないの、あんなサルっぱい機体は絶対に嫌よ。せめてブレイバーみたいに、真っ赤に塗ってくれなきゃ乗らないからね！」

「はいはい」

「ちよつと、リステイ！ 何をへらへら笑ってるのよ、ちゃんと分かつてるの？ いい？ 私はね……！」

騒いでいる美鈴さんをあしらいながら作業を続ける僕の心の中で、メノアさんが残した言葉が今も揺れ続けている。

彼女は、僕に言った。

メノアさんと、リオネルが発揮した力。それは優れた情報処理と演算能力、驚異的な動体視力、反射神経と運動能力。しかしメノアさんは、救いと真実を求める僕に答えを与えてくれる事は、ついに無かった。

記憶の『鍵』を開いた時、僕の心は砕けてしまつ……そんな事があるのだろうか。

でも、彼女の人間離れした能力を見ていれば分かる。それは、メノアさんの思いやりなのかもしれない。

大きな手掛かりだったのに……。

僕は仕方なく、大きな疑問を心の隅へと追いやった。

あと幾日もすれば、ジュエル号は母港である「クレイバーク」へと帰港するはずだ。

そして、僕は――。

ひとつの決断を迫られていた。

16・神の光槍（後書き）

次回……花嫁が抱く祝福の花束。
リスティは、ひとつの決心をします。

17・決意／祝福の花束

ジュエル号は旅の最終目的地、ガディさんの故郷である最大級の居住コア『クレイバーク』へ到着した。クレイバークは大戦以前に栄えていた、かなり大きな都市の跡を利用している。

人口も多く、様々な運搬船がひっきりなしに出入港を繰り返す。

この世界で避難所の役割を担う居住コアがどんなに栄えても、先に未来があるわけではないが……。

多くの人々が暮らすクレイバークは賑わっている。

ジュエル号のクルーには、クレイバーク出身者が多いらしい。港と呼ばれる運搬船の発着場に掲げられた旗、色とりどりの紙テープ、クルー達の家族や友人が大勢出迎えに来ていた。

「すごいですね」

「ほんと」

いつも驚いてしまうその光景、超巨大運搬船に積み残されている信じられないほど大量にある物資。

搬出作業の邪魔にならないようにと、隅っこでじっとしている僕と美鈴さんは、久しぶりに見る人波の賑わいをぼんやりと眺めていると、

「お父さん！」

大きな声が聞こえた、手を振りながら一人の女性が駆けてくるのが見える。

二十歳位かな？ 柔らかな色のワンピースを着ている、清潔なイメージの綺麗な人だ。

「おお、レイチェル！」

いきなり聞こえたぶつとい声……こ、この声は。

ちらりと横を見ると、美鈴さんが固まっている。

そして僕の横を「筋肉ダルマ」じゃなかった、ガディさんが凄い

勢いで走って行った。

おとうさん、お父さんって、え？ お、親子？

ひしっ！ と、抱き合う親子の感動的対面シーン。

僕と美鈴さんが放心状態になっていると、ガディさんは娘さんと思える女性と一緒に、こちらへやってきた。

「紹介するよ、レイチエル……俺の娘だ」

微笑んだレイチエルさんが、ぺこりとお辞儀をする。

ごつい歯を剥き出しにして笑うガディさんは、どこことなく照れている様子だ。

「何処で誘拐してきたのよ」

半眼でぼつりと言う美鈴さん。

そう思えてしまうのは確かだけど、よりによって何て事を。

僕がびびりまくっていると、ガディさんは真っ赤になってトロンと鼻下を伸ばし、レイチエルさんは手を口に当てて、くすくすと笑った。

「んふふふ、見てくれ嬢ちゃん。これが俺の妻でな。カトリーヌっていうんだ、いい女だろ？」

ガディさんが、大切そうに懷から取り出した写真には、小さな女の子を抱いている一人の女性が写っていた。

それを見て、あんぐりと口を開けている美鈴さん。

おそらく、抱かれているのはレイチエルさんだろう。良かったねレイチエルさん、お母さんに似てて。

「数年前に、病気で先に逝っちまったがな」

少し寂しそうなガディさんが、心なしか肩を落とした。僕の苦手な、しんみりとした空気が辺りを覆う。

「ね、お父さん」

急に歳を取ったようなガディさんの背に、そっと手を置いたレイ

チエルさんは努めて明るい声を出した。

「約束よ。帰って来たら、式に出てくれるって言ったわよね？」

レイチエルさんが振り向くと、いつの間にか所在なげに立っている青年が、ぺこりとお辞儀をした。

「ははは、全く気が付かなかった。」

「おお！そうか、そうだったなあ！」

そう叫んだガデイさんは、驚いている青年に向かって突進した。青い顔で身を引いた青年を捕まえると、頭を大きな手で撫で回している。

「わはははははは、娘を頼んだぞ！」

え？　っていう事は。

「レイチエルさん、ひよつとして？」

「ええ、あたし達、結婚するんです！」

レイチエルさんは、とびきりの笑顔で嬉しそうに答えた。

「おめでとう！」

「おめでとうございます！」

「お二人とも……ありがとうございます」

レイチエルさんが頬を染め、恥ずかしそうにうつむいてしまう。

そこへ、果報者の青年を担いだガデイさんが戻って来た。

「二人とも聞いて驚け！　結婚式は明日なんだ。ジュエル号の帰港を祝ってパーティも開かれる。盛大な結婚式になるぞ！」

そしてガデイさんは、くしゃくしゃにした青年をぽい、と放り出して手を打った。

「ぼうずにお嬢！二人はジュエル号の恩人だ。ぜひ、式に出てくれ！」

「あ、いや、その……」

僕が返答に困っていると、

「お二人とも、ぜひ！」

へろへろの青年を介抱しながら、レイチエルさんもそう言うてくれた。

「私、飲んべえよ？」

お酒に目がない美鈴さんが、黒曜石の瞳をきらきらと輝かせている。

その飲みっぷりたるや……。

僕が途方に暮れていると、

「おお。頼もしいぜ、お嬢！　ひと樽でもふた樽でも、遠慮なく空けてくれ！」

ガディさんは豪快に笑った。

その日の夜更け――。

クレイバークより数キロほど離れた場所で、僕はオフロードバイクを降りた。

宵闇から冷たい風が吹き付けてくる。暗闇にぼんやりと浮かんでいる廃墟、海上都市ヴィラノーヴァの支援研究所跡は、気持ち悪い事この上ない。

辺りに人影が無いことを確認すると、僕は肩に吊ったホルスターから拳銃を抜いた。

鈍い銀色の自動拳銃は大型で、扱い馴れない僕の手には余っている。

弾倉を開けて弾の有無を確認すると、静かにスライドを引く。ブレットの中心に超鋼を仕込んだ『対機人兵用特殊徹甲弾』が、薬室内に装填された。

使うことが、なければいいけど。

扉の横へ目をやると、建物への通電設備はまだ生きている。

作業服のポケットから取り出したディスクを、セキュリティシステムのロック機構へ読み込ませると、小さな画面にはパスワードの

入力を求める表示が灯る。

支援研究所全てのパスワードを、僕は知っている。

キーボードを数回叩いて入力を済ませると、微かな電子音と共に扉のロックがはずれた。

ぎっ……。

レールが歪んでいるらしく、扉は不自然な動きで開いた。

僕はポケットにディスクをしまつと、注意深く様子を伺いながら建物の中へと踏み込む、建物の内部が荒らされた様子はない。拳銃を握る手に、じっとりとした汗が滲むのを感じる。

人が近づかないのをいいことに、盗賊のねぐらになっている可能性だつてある。

僕は壁に背を預けながら、そろりそろりと薄暗い通路を進む、目的の部屋はすぐに見付かった。

はやる心を抑えて、慎重にセキュリティシステムをクリアする。

解錠して部屋の中へ入った僕は、光量を極力抑えたマグライトを点けて、背負っていたリュックを降ろし、中から取り出した情報検索用の小型端末を起動した。

僕はジュエル号で旅をしながら、こうして廃棄された海上都市ヴィラノーヴァの支援研究所跡へと忍び込んでいた。

僕の目的は、ひとつのプログラムを記録したディスク。データルームに保管されているディスクを、片っ端から端末に読み込ませる。しかし千枚以上のディスクを検索しても、目的のデータを記録したディスクは見付からなかった。

心の中では、ほぼ諦めていた。支援研究所になど、置かれているはずなど無いのだ。

「やっぱり駄目か」

予想した通りだった。

落胆した僕は山のようにディスクが散らばるその場に、ぺたんと座り込んだ。

「はは……は」

乾いた笑いが漏れる。

何気なく時計を見ると、もう午前二時を過ぎていた。

翌日は、新しい人生を歩き出した二人を祝福するかのように、気持ち良い快晴になった。

「おめでとう！」

「レイチエル、幸せにね！」

結婚式に参列した人々は、口々にお祝いの言葉を二人に投げかける。

紙吹雪が舞い、新郎は新婦の手をとってゆつくりと教会の扉から現れた。幸せ一杯の二人に、僕は心からの温かい拍手を送る。

レイチエルさんの放ったブーケを受け取った女性が、うつとりとブーケを胸に抱きしめている。

そして寝不足でへろへろになっている僕の隣には、ドレスアップした美鈴さんがいた。淡いブルーバイオレットのドレスに白い花のコサージュは、落ち着いた雰囲気的美鈴さんを際立たせている。

光りを弾く、美しい黒髪に薄化粧。唇には柔らかなピンクのルージュ。今日の美鈴さんは、いつもの颯爽としていて、格好いい美鈴さんとは雰囲気が違う。

「どうしたの？　しゃきつとしなさい！」

見とれている僕の額を指で弾いて笑う。普段は氷の微笑をたたえている美鈴さんの、暖かい笑顔を見るとなんだかほっとする。

僕は嬉し泣きをしているレイチエルさんを見ながら、ぼんやりとそんなことを考えていた。

そうそう。お幸せにね、レイチエルさん。

教会前の広場では、無礼講の酒宴が始まった。沢山の酒樽が開けられ、誰彼ということなく酒が振る舞われ、皆それぞれに心からの酔いを楽しんでいる。

あくまでも、それぞれに。

僕は喧騒を避け、ベンチに腰を下ろした。

幸せそうな人々の顔、顔、顔。

こうしていれば、世界が今置かれている切迫した状況など、忘れてしまいそうだ。

そうだ。

忘れてしまえば、どれだけ幸せか。

「あゝりいすてい、たあのしんでるう〜？」

「わあっ！」

うつつ酒臭い。背後から美鈴さんに抱きつかれ、僕は大声を上げてしまった。

「なあに、おどろひているのろよう〜」

ああもう、この酔っぱらいは。

美鈴さんは酒瓶を持ったまま、ふらふらとした足取りで僕の横へ来ると、すんとベンチへ座った。

「へへへ、あらひにかふおうなんら、いつひえんおくねんとうかはらひのひよ」

美鈴さんが胸を張る。飲み比べでもやらかしたのか、公園の芝生で累々と酔っぱらい達が倒れているのが見える。どうやら「あたしに勝とうなんざ、一千億年と十日早い！」と、言っているようだ。

誰もがこぞって美鈴さんに勝負を挑んだようだったが……美鈴さ

んはたった一人で、二十人からの挑戦者を撃退してしまったようだ。
「ふははははははは！」

ひたすら得意げに笑い続ける美鈴さんは、こめかみを押さえて頭痛に耐えている僕の首に腕を回した。黒い瞳がとろんとして、頬が上気している。

「ね、リスティ」

「何ですか？」

また酔っぱらいの戯言だろう。

僕がめんどくさそうに返事をする、美鈴さんは僕の首に回した腕に、ぐいつと力を入れた。

「夕べ、何処に行ってたのよ？」

「え？」

僕に詰問を浴びせる、美鈴さんの鋭い口調。

ほ、本当に酔っているのか？

「あらひ、みたわひよ」

あ、あれ？

「く」

身体を一瞬堅くした僕だったが、ふと気が付くと美鈴さんは、僕の肩に頬を寄せて眠っていた。ほっとした僕は、美鈴さんが握っている空の酒瓶をそつと手から取って地面に置く。

幸せそうな寝顔。

顔におちた黒髪を掻き上げてあげると、美鈴さんは何やらむにゅむにゅと、寝言を言った。

「やれやれ、お嬢は眠っちまったのか？」

美鈴さんの寝顔を見ている僕の頭上から、ガディさんの声がした。
「ええ」

見慣れぬタキシード姿の巨体を見上げた僕が頷くと、

「こりやまた、可愛い寝顔だ」

赤い顔をしたガディさんはこつ歯を見せて笑い、僕の横へ腰を

下ろした。

「ところで坊主。今更の話だが、お嬢は連合軍所属って事になるんだろっ？ 所属部隊名は聞いているのか？」

「美鈴さんの、所属部隊名ですか？」

僕はガデイさんのいきなりの問いに、美鈴さんと初めて逢ったときの事を思い出した。

「ええと、確かミネルバ隊って聞きましたけど。それが何か？」

「ほう」

興味深げに聞いていた、ガデイさんの目がぎらりと光った。

「お前、ジャンク屋なんかじゃねえな？」

ガデイさんの低い声に、僕の小さい心臓が一瞬跳ね上がった。

「へへへ、どうやらそうらしいな。まあいいや」

ドングリ眼でじつと僕を睨んでいたガデイさんは、すつと広場に目を向けて綺麗に無精ひげを剃った顎を撫でて笑った。

「坊主、お前は知らないようだが、ミネルバ隊は連合軍選りすぐりのエース・パイロット達の部隊だよ」

僕は思わず、ガデイさんの横顔を見た。

美鈴さんが、旧連合軍のエース・パイロット……。

「驚いたよ、俺も初めて拝んだんだからよ。お嬢の機体の左肩に描かれたエンブレム、剣を携えた女神、ミネルバ隊のマーキングをな！」

ガデイさんは、僕の頭を鷲掴みにした大きな手にぐつと力を入れた。

「ジャンク屋連中の話じゃな、ミネルバ隊は神ともあがめられているのよ。旧連合軍が壊滅寸前の打撃を受けた一戦で、ヴィラノーヴァのセラフィムを数百機撃墜したのさ……量産型の装甲兵がたったの六機でな。お前ほど装甲兵に関しての事情通が、知らない訳がねえだろっ？」

そ、そうなのか？

気付かなかった。いや、ガデイさんの言つとおり僕は知らなかつ

たんだ。

「もつとも、そのおかげで死神扱いさ。それで降、新しい連合軍の上層部に恐れられるのも無理はねえ。軍の監視下で危険な作戦行動ばかり……要するに厄介者さ。でなけりやお嬢のブレイバーも、軍があんな状態で運用する訳がねえ」

ガデイさんの話を聞きながら、僕は端で見ても分かるほどに狼狽し、背中にはびっしりと冷や汗をかいている。

恐る恐るガデイさんの方へ目を向けると、ガデイさんは僕を一睨みした後、にいつと笑った。

「そんなこたあどうでもいいんだ。なあ坊主、お前自身の事に関しちゃあ、俺はこの際聞かねえことにする」

「ガデイさん？」

僕がちよつと身を引くと、

「へへ、この果報者が！」

ガデイさんはいきなり僕の首にぶつとい腕を回した。

「え？ え？ え？」

そのまま、ぎりぎりと締め上げられる。

苦しい、僕は目に涙を浮かべて逃れようと懸命にもがく。

「ミネルバ隊の一員やってたお嬢がどんな娘か、ずっと観察してたんだけどよ」

ガデイさんは、美鈴さんの寝顔をちらりと見た。

「やつぱりなつて思ってたよ。お嬢はまさに『抜き身の剣』ってところだな。それに、いつもどこか綺麗な顔に、冷たい氷の仮面を張り付けてるじゃねえか」

ガデイさんが評する美鈴さんのイメージは、おおむね正しい。

「心に一線を引いて、どんな事があってもそこから先は人を寄せ付けねえ。絶対に氷の仮面を外したりしねえくせに、お前にだけはこうやって気を許してるんだぜ？ どう思うよ、おい？」

どう思うつて聞かれても。

「さあ？」

「まったく……てめえはよ」

「ごっ！」

首を傾げた僕は、また石みたいなげんこつで殴られた……痛い。

「まあいい。こいつは宿題だ、よく考えな！」

ガデイさんは「ガハハ」と、笑って賑わう酒宴へと目を向けた。

「おかしいだろ？」

「ガデイさん？」

「飲んで、食って、歌って、踊ってどんちゃん騒ぎさ。明日……いや次の瞬間、憎らしい羽付き野郎の攻撃で、全てが跡形もなく消し飛んじまうかも知れねえってのにな」

僕は思わず、ガデイさんの日に焼けた精悍な横顔を見つめた。この巨大な居住コア「クレイバーク」も、セラフィムに幾度もの攻撃を受けているようだ。

それは所々破壊された街の様子から、容易に想像することが出来た。

「だからだよ、皆忘れたいのさ」

ガデイさんの横顔に、不敵な笑みが浮かぶ。

「だがそれだけじゃない。今この一瞬を大切に生きようとしている。そして俺達は、決してあきらめねえ！ このままじゃ終われねえんだ、羽根付き野郎も何もかも、みんな綺麗に片付けてやる！」

それは聞いているだけで心が熱くなる、頼もしい言葉だった。

今日この日を、祝福の花束を抱えた人達の笑顔を、僕は絶対に忘れない。

——そうだ、僕の心は決まった。

小さな寝息をたてている美鈴さんを見つめ、僕は胸元で輝くペンダントをきつく握りしめた。

17・決意、祝福の花束（後書き）

リスティの決心、それは……。
別れの時、輝く未来はあるのでしょうか。

18・別離

「おはよう、リスティ……」

レイチエルさんの結婚式の翌日。

ジュエル号の格納デッキに立ってブレイバーを眺めていると、背中から美鈴さんの声が聞こえた。

「おはようって、美鈴さん。今何時だと思ってるんですか？」

「え？ お昼前だと思ったんだけど、違ったかしら」

しれっと答えた美鈴さんは、やや乱れた黒髪を手櫛で撫でつけながら、キャットウォークの手摺へと背を預けた。

ぷし、片手で器用にドリンクパックの栓を開ける。

「昨日、あんなに飲むからですよ」

美味しそうにドリンクを飲んでいる美鈴さんに、僕が皮肉たつぷりの口調で言うと、彼女は別段気にした様子もなく、ぷあっと息をつき、

「頭が痛いわ、ちょっとハメを外し過ぎたみたいね」

照れくさそうに笑った。

あれがちよつとですか？ 凄い飲みっぷりだったって、みんなに聞きましたよ？

僕は朝から緊張していた、美鈴さんに話さなければならぬ事があるからだ。

うまい具合に辺りに人影はない。そうだ、チャンスは今しかない。

僕は、最大限の勇気を振り絞った。

「あの……美鈴さん」

「なに？」

美鈴さんは、気楽な調子でうんと伸びをしていたが、僕の真剣な顔に気が付いたのか、怪訝そうな顔をした。

「どうしたの？ リスティ、怖い顔して」

そこまで言った美鈴さんは、はっとして顔を強ばらせた。

「や、やだ……あたし、昨日酔っぱらってまた何かした？ほら、とか、▼とか、あつ！∞な事とかしちゃったりした？」

またつて。そんな癖があるのか、この人は。

そんなことを話したいんじゃない！ 我に返った僕は、ぶるぶるつと首を激しく振った。

「め、美鈴さん、あ、あの、じ、実はっ！」

緊張して、はつきりと言葉が出てこない。

焦れば焦るほど舌が絡まり、喉の奥から言葉が出てこない。

「だ、だから何よ！ 酔ってないから、ちゃんと聞いているわよ！」
うつつ、これはまずい。

美鈴さんの機嫌が悪くなってきた。

僕は大きく息を吐き出し、肺に残った少しの空気を声にした。

「僕をヴィラノーヴァへ、海上都市へ連れて行って下さい」

「なんですって!？」

一瞬、何か肩すかしを喰らったような表情をしていた美鈴さんの黒曜石の瞳が、すうつと細くなった。

彼女が瞬間的に、氷の刃を抜いたような錯覚を覚える。

「リステイ、本気で言っているの？」

口紅を引いていない形の良い唇が小さく動き、美鈴さんがそうつぶやいた。

全てを見透かされそうで、黒曜石の輝きを持つ瞳をまともに見ることが出来ない。

「ヴィラノーヴァがどんな場所なのか、知っているはずよね？」

僕は、小さく頷く。

「理由は？」

「あの……」

「言えないの？」

沈黙するしかなかった。そう、言えない。

歯を噛みしめて、うつむいた、肩が小刻みに震えているのが分か

る。

僕がしようとしていることは、まさに自殺行為なのだ。

「めっ！ 美鈴さん。あ、あのっ！」

ことり。

美鈴さんは、静かにドリンクのパックを置いた。

「理由も教えてもらえないなんて、危険な依頼内容にはあんまりな条件なんじゃないの？」

僕を射貫く黒曜石の瞳。本当はこの瞬間に、すべてを美鈴さんに話すべきなのだろう。

しかし、僕にはどうしてもそれが出来ない。

「すいません」

甘かった。

僕は消えて無くなりそうなほど身体を小さくして、美鈴さんに深く頭を下げた。

「しょうがないわね」

「え？」

僕は自分の耳を疑い、まるでバネ仕掛けのおもちゃのように、勢い良く顔を上げた。

ぷし。美鈴さんは、二本目のドリンクの栓を空けたところだった。

「付き合ってあげるって、言ったのよ」

そう言っただけ美鈴さんは、いつもそうするように僕の額を人差し指で弾いた。

「出発は、明日の未明。ちょっと頭が痛いから、私はもう一眠りしておくわ。長距離飛行になるから、ブレイバーの整備をお願い。それと携帯食料の調達もね。分かっていると思うけど、見付かつては駄目よ」

いつかと同じだ。すたすたと歩きながら僕に何も言わず、勝手に予定を決めた美鈴さんだったが、ふと振り返った。

「リステイ、あなたも徹夜なんかしちゃう駄目よ、それから……」

「はい？」

「高くつくわよ」

空になったパックを振りながら、美鈴さん。僕の頬は引きつった。

僕はそれから、一心不乱にブレイバーのチェックを重ねた。今までの戦いとは違う、ほんの少しの油断が死に直結するだろう。場合によっては、数百機のセラフィムから追われる事になるのだ。逃げる手段だけは、しっかりと確保しておかなければならない。僕はフライト・ユニットの整備を、特に念入りに行った。

そしてスイフリーさんが厨房の片付けと、翌日の仕込みを終わらせたところで、そろりと厨房に忍び込む。泥棒みたいな真似は心苦しいが、この際仕方がない。薄暗い厨房できよろきよろしていると、何故か大量の携帯食料が調理台へと山のように積まれている。

ちょうど良い、これだけあれば十分だろう。

それにしても、消費期限が近いのだろうか？　僕は罪の意識にさいなまれながら、大きな背負い袋に大量の携帯食料を詰め込んだ。

そして、次の日の未明――。

ガディさん達に、別れを告げられないのが心残りだったが、ヴィラノーヴァへ行くと言えば、必ず止められるだろう。

そう思っていたのだが、僕と美鈴さんはブレイバーの格納されている薄暗がりのデッキで二人並んであんぐりと口を開け、揃ってブレイバーを見上げた。

「ち、ちよつとリステイ！　なによ、これ！」

「くっ苦しい。それは僕が知りたいですよ！」

美鈴さんに胸元を捕まれ、僕はじたばたともがく。

格納デッキに立つブレイバーの容貌が、一変していたのだ。ライフル、肩部ビームバルカン、接近戦用大型ブレードなどの基本装備の他……ミサイルポッド、バズーカ二丁、ライフル固定用グレネードランチャー、ビームガトリング……。

ブレイバーの火器固定用のアタッチメント全てに武器が固定され

ており、まさにハリネズミのような武装状態だ。

そして真紅の機体は、ネイビーブルーの迷彩柄に塗り替えられている。僕が整備を行った時には、こんな事無かったのに。

その時いきなり格納デッキに照明が煌々と灯り、思わず目が眩んだ。

「がはははははは！」

空気を震わせるほどの、ぶっとい笑い声。

ガディさんが、プレイヤーの足下からひょっこりと現れた。そして皆で隠れて待っていたのだろう、デッキにジュエル号のクルー達が勢揃いしたのだ。

「ガディさん……どうして」

眩しさに手をかざした僕がそう問うと、ガディさんはばつが悪そうに頭を掻いた。

「いやあ、そんなつもりはなかったんだがな、聞こえちゃったんだよ」

「あの……ガディさん、僕は！」

ガディさんは片手をあげて、僕の言葉を制した。

「いいんだよ、坊主。お前の事は聞かねえって言っただろ。ヴィラノーヴァへ行こうって言うんだ、これくらいの装備は必要だろうが」

ガディさんはのっしのっしと歩いてくると、大きな手で僕の頭をぽんぽんと叩いた。

「ま、お前なんざどうでもいいけどよ。水くさいぜ、お嬢……」

ジト目で睨む僕をこつい歯をむき出して威嚇した後、ガディさんは美鈴さんにそう言った。

「言ったら間違いなく止めるでしょう？ それにね……」

美鈴さんはくすりと微笑み、ガディさんに捕まっている僕の腕を掴んで自分の方へ引き寄せた。

「このぼんやりくんの側に、ついていないと心配で」

美鈴さんが返した答えに、ニヤリと笑ったガディさんが肩をすくめ、とよどよっとクルー達がざわめく。四方八方から、僕の身

体に容赦無く突き刺さるやつかみの視線。

早く出ていかないと殺される。

「さ、行くわよ。リステイ」

まるでピクニックにでも出掛けるような、軽い口調の美鈴さん。

「あ、はい！」

僕と美鈴さんは、機体乗降用のリフトに乗った。

ヘルメットを被り、美鈴さんがブレイバーのコクピットへ滑り込む。

「今まで有り難うございました。みなさんの事、一生忘れません！」
大声でそう言った僕は、ガディさんをはじめジュエル号のクルー達に深々と頭を下げた。

リュウジさん、ベルドさん、モッズさん、パメラおばちゃん、ス
イフリーさん、テロップ船医……。

みんなが見送ってくれる。僕は作業服の袖で、ごしごしと顔を強く擦った。

この荒れた大地、荒んだ世界で出会った、大切な人達。僕は、束
の間の安らぎを与えて貰ったのだ。

「馬鹿野郎！ 辛気くさい挨拶をするんじゃない。いいか？ 必ず
帰って来いよ、リステイ！」

ガディさんが、初めて僕を名前で呼んでくれた。僕は、一人前に
認められたようで嬉しかった。もう一度、深々と一礼するとコクピ
ットに潜り込み、改良して少しはましになった美鈴さんの後ろのシ
ートへ座る。

ハッチが閉まり、操縦桿を引き起こした美鈴さんがキーボード、
各種コントロールパネルを操作する。

ブレイバーが起動した。

前面モニターへと映し出される、起動チェックの数々。

「リステイ、覚悟は良いわね！」

「はい」

僕は、少し緊張して答えた。

ジュエル号のカタパルトデッキに誘導灯が灯り、ブレイバーのフライト・ユニットが力強く呻りを上げていく。

夜明け前の、冷たい大気の振動。

この星はまだ、死んではない。

カタパルトの両脇で大歓声をあげるクルー達が、モニターに写っている。

美鈴さんは、彼等にひとつウインクを送った。

そしてブレイバーはカタパルトに絡みつく朝靄を蹴立て、今だ明け切らぬ宵闇の中へと飛翔した。

18・別離（後書き）

リスティと美鈴は、海上都市を目指して旅立ちました。
温かな人々との別離です。

危険を冒してまで、海上都市へと向かうリスティの目的とは……？

19・闇に浮かぶ魔城

絶え間なく明滅する光の群。暗闇の中に浮かび上がる海上都市、ヴィラノーヴァ。

中央にそびえ立つ美しい尖塔は、まるで魔王でも住んでいるかのような禍々しさを感じる。ついこの間までは、人々の希望の象徴になるはずだったのに。

僕はついに、この魔城となってしまった海上都市へと帰って来た。
「……う」

美鈴さんの肩越しにモニターの映像を見つめていた僕は、身体に震えを感じて思わず声を漏らした。

「どうしたの？ リステイ」

僕の様子を案じてくれているのか、美鈴さんが優しい声を掛けてくれる。

プレイヤーはヴィラノーヴァへと向かって、暗い夜の海上を低空飛行していた。波をたてないように、微妙に高度を調整する。僕はコンパス片手に、地図でもう一度進入路を確認した。

「進路、このままね」

「はい。もう少し、時間があります」

ヴィラノーヴァを守る、綿密に組まれたセラフィムの警備ルートを僕は知り尽くしている。地図と時間を照らし合わせると、僅かながら警備ルートの空白が浮かび上がるのだ。

プレイヤーは警戒するセラフィムとは遭遇することも無く、海上都市へと辿り着いた。

様々な光が乱舞する、華やかな海上都市において、ここはどうしようもなくさびれている。それもその筈、この区画は海上都市建設の足がかりとなった場所で、今では全く必要のない部分だ。

放置されたままの建設用重機を集めた倉庫の陰に入ると、美鈴さんはプレイヤーに出来るだけ低く駐機姿勢を取らせて、コクピット

のハッチを開いた。

「さて、何の用があるのか知らないけど。準備はいいの？」

「ちよつと、待って下さい！」

ヘルメットを脱いで、ライフルを肩に掛ける美鈴さんの腕を、僕は慌てて掴んだ。

「何よ、まさか腰が抜けたなんて言うんじゃないでしょうね」

ジト目の美鈴さんに睨まれた僕は、ぶんぶんと首を横に振った。

「何だっというのよ？」

「美鈴さんは、ここに残って下さい」

「何ですって！」

美鈴さんは細腕とは思えない力で、僕の胸ぐらを掴み上げた。

「素人が何を馬鹿な事を言っているの？ あんたみたいな、ぼくつとした奴がほてほてうるついていたら、すぐに殺されちゃうのよ！」

「は、話を聞いて下さいよ！」

美鈴さん、その言い種はあんまりです。

吊されたままの僕は、揺さぶられながらも声を絞り出した。美鈴さんが手を離し、どさりとシートへ落ちる。

「二時間もあれば帰ってきますから、美鈴さんは退路を確保して置いて下さい」

「退路って言っても、あなたが生きて帰ってこなかったら、意味が無いでしょう」

「必ず帰りますよ。どうしても、手に入れなければならない物があるんです！」

強い口調で言うと、僕の顔を睨み付けていた美鈴さんは、渋々だが頷いてくれた。

「お願いします」

僕はリュックを背負うとサブマシンガンを肩に掛け、ベルトに予備のマガジンを二本ねじ込んだ。後は肩に吊ったショルダーホルスターへ、銀色の自動拳銃を一丁。

自分の貧弱な体力を考えると、これが限界の装備だった。

「リステイ……」

機体乗降用ウインチを使おうとすると、美鈴さんに呼び止められた。

暗くてよく分からなかったが、美鈴さんの顔色がいやに青白く見える。

「気を付けてね。そうでないと、私……」

胸元で手を組み合わせる、潤んだ黒曜石の瞳。

美鈴さん、僕を心配してくれてるんだ。

「タダ働きになっちゃうから」

はいはい、そうですよね。

揺れ動いた気持ちをしっかりと固定して、僕はとっととウインチを使いブレイバーを降りた。

「二時間で戻れるかな？」

建物の陰に隠れて機人兵をやり過ごした僕は、茂みの中で壁に背を預けると、ため息をひとつついた。サブマシンガンのグリップを握る掌に、じつとりと汗が滲んでいる。暗視用ゴーグルのベルトが、顔にくい込んで痛い。

最重要施設のブロックへ侵入するまで、かなりの時間がかかってしまった。

僕の目的は、あるプログラムが書き込まれた一枚のデータディスクだ。

ディスクの検索は、ものの数分で終わるだろうが、それを考慮してもぎりぎりの時間だろう。ゆっくりと歩く機人兵達、血を連想させる赤いモニターレンズの光が暗闇に浮かび上がる。彼等は僕達にとって、頼もしい護衛だったのだ。

しかし今、彼等を統率している中央制御システムの警備プログラムは、僕達はおるかこの世界に生きている全ての人間を、排除すべ

き存在と認識している。

暑くもないのに頬を伝う汗。

サブマシンガンを連射したくなるような恐怖と戦いながら、僕は慎重に目的地を目指す。そして道へとへばりつき、機人兵と鉢合わせになりそうになったりしたが、なんとかヴィラノーヴァの研究本部棟の前へと辿り着いた。

見慣れた建物、感傷に流されている暇など無い。僕は辺りを窺い、カードを使って手早く解錠した。セキュリティシステムが変更されていたらどうしようかと一瞬肝を冷やしたが、それは杞憂だったようだ。

道順など知っていて当たり前。しかし僕は、この研究本部棟へ入るのが怖かった。

僕の脳裏に焼き付いた死体の山、通路を濡らす血の海……

白衣を血に染めて、必死に走り続ける自分の姿。

しかし信じられぬ事だが足を踏み入れた研究所の内部に、惨劇の痕跡は全くなかった。

ともすれば萎えてしまう心を叱咤した僕は、手にしたサブマシンガンの重さを心の支えに、通路を進む。通路の緊急用隔壁とも呼べる厚い扉、セキュリティシステムのパスワードの順番は、道なりに記憶している。

何の障害もなく、僕はデータルームへと入った。

……おかしい。

こんなに警備が手薄な筈はない、しかしあれこれ疑っている時間も無い。

とても危険な賭けだが、僥倖と見るしかないのだ。

暗がりの中、僕は保管ケースへと駆け寄った。

『リステイ・マフィン』……自分のネームが入ったディスクケースを解錠すると、そのままケースを引き抜いて、机の下へと身を隠す。

目的の物はすぐに見付かった、銀色の『マスターディスク』だ。

背中からリュックを降ろし、小型情報端末を起動する。震える手でディスクを挿入してパスワードを入力した。

ややあつて端末の基本プログラムが起動する、くそっ！ 数分でも惜しいっていうのに。

焦りで震えが止まらない手で、懸命にキーボードを叩く。

データの確認と照合……間違いない。

データが改ざんされた形跡もなかった、僕のマスターディスクだ。ディスクをケースに収め、大事に懐へとしまう。

電源を落とした端末機をリュックへ投げ込み、急いで背負った僕は立ち上がる。

その時、僕は背後に人の気配を感じた。しかし、このヴィラノーヴァに人が居るなんて。

『……リスティ、君は心を繋ぐ絆を信じられるかい？』

「え？」

耳に響いたこの声は、間違いない。ヴィラノーヴァの統率『フレグランズ・ウイスラー博士』！

「博士！」

瞬時に頭の中を駆けめぐる様々な思いに駆られ、僕は勢いよく振り向こうとした。

その瞬間。

殴られたような衝撃と共に、僕は真横へ吹っ飛んだ。

壁に激しく身体を叩きつけられ、息を詰まらせる。気が付くと、背負っていたリュックがずたずたになっている。小型情報端末など、リュックの中身は床にぶちまけられ、木っ端微塵になっていた。

ああ、そうだ……。

フレグランズ博士は、既にこの世の人ではないのだ。

耳につく電子音、機人兵の間接部に使用されている小型精密モーターの駆動音だと気が付いた。

撃たれたのだ、発見された！

僕がその時とった行動は、自分でも信じられないほど鋭敏だった。サブマシンガンを握った手だけ机の上に出し、扉へ向けて全弾を叩き込んだ。机上で暴れる銃。天井に当たって跳ね返る、焼けた空薬莢が床一面に散らばる。

機人兵へ着弾しているのか、金属の打撃音が激しく響いた。がちり。

サブマシンガンのイジェクションポートが開いて止まった、マガジンの弾が無くなったのだ。同時に、重量物が固い床に打ち付けられる音が響く。

恐る恐る顔を出すと、特殊徹甲弾を全身に受けて半壊した機人兵が倒れていた。

助かった……そう思う間もなく、室内にけたたましく警報が鳴り響く。

早くここから逃げなくてはならない。

僕はサブマシンガンの弾倉を交換すると、機人兵の残骸をまたいで通路へと走り出た。

幻聴まで聞こえるなんて。自分の荒い息づかいが思い出と重なり、あのときの光景が甦る。

絶え間なく、建物中に響き渡る銃声。

逃げまどう研究所の所員、仲間達の絶叫。

そんな研究本部棟の混乱など、まったく意に介していない様子でウィスラー博士は僕の腕を掴んだ。

「こつちに来るんだ、リステイ！」

その言葉と同時に、博士は小型拳銃の銃口を僕へと向けた。

僕の乾ききった口は恐怖に引きつり、何も答えられなかった。

開いたエレベーターの中へと押し込まれ扉が閉まる瞬間、博士は寂しそうな笑みを浮かべて拳銃を自らのこめかみへと当てた。

「君は生きるんだ、そして……」

博士の言葉が、耳に届く。

降りていくエレベーター、銃声が遠くに轟いた。

博士の言葉を、覚えているのが不思議だった。

殺到する機人兵……。

僕は、涙と鼻水で顔をくしゃくしゃにしながら、ひたすら逃げ続けた。

身体を掠める弾丸。

怖かった、とても怖かった。

「ちくしょう！」

心の中で無様に泣きじゃくっている、あの時の自分自身を蹴り飛ばし、僕は振り向いて追いつがる機人兵へとサブマシンガンを乱射する。

吹っ飛ぶ何体かの機人兵達、だがその数は増える一方だ。

弾が無くなり、無用になったサブマシンガンを投げ捨て、肩のホルスターから拳銃を抜く。

弾は七発。僕に残された武器はもう、これだけしかない。

目的のマスターディスクは回収した。もし、僕が命を落とすようなことになったとしても、ディスクを美鈴さんに渡して一言二言を告げるだけ口が動けばいい。

扉をくぐり抜け、パスワードを入力して扉を閉めると、キーボードを銃で撃ち抜く。バラバラに吹っ飛んだキーボードから、火花が散った。

システムを物理的に破壊したのでアクセスは不可能だ、これでしばらくは時間が稼げる。

そうやっていくつかの扉を通り抜け、僕は建物の外へ出ると、ほぼスクラップに見える一台の車を見つけた。

研究員が研究棟の連絡用に使っていた物だ。バッテリーは弱っていたが、モーターはなんとか動いてくれた。

背後からの銃撃に、いきなりサイドミラーが吹っ飛ぶ。

続けざまに無数の弾丸がボディに撃ち込まれる。僕は車内に伏せると、アクセルを力任せに踏み付けて車を急発進させる。

セラフィムのエネルギー弾に灼かれなかったのは、もう奇跡としか言いようがなかった。

ヴィラノーヴァの道路網を、僕は爆走していた。

流れてくる額の汗を拭いたつもりだったが、手の甲には血が付いた。フロントガラスは碎けて無くなっている。

どうやらその時の傷らしい。

セラフィムは、むやみにやたらとライフルのエネルギー弾を発射することが出来ない。ヴィラノーヴァの研究棟付近の地下には、重要な役割を担う様々なケーブルが埋まっているからだ。

激しく金属を打ち付ける音に首をすくめる。ボンネットに連続で着弾し、フロントガラスの残りが完全に粉碎した。

僕は断末魔の喘ぎを訴えるような車のモーター音に構わず、アクセルを踏み込んで車を加速させると、銃を撃ちながら立ちはだかる数体の機人兵を跳ね飛ばした。

あっと、思う間もなかった。

無茶をやり過ぎたらしい。

ハンドル操作を誤り、車はスピンを繰り返してガードレールに車を擦り付けながら止まった。ドアを蹴破り、ふらつく頭を押さえ、車外へと出る。ここまで走ってこれたのが不思議なくらい、車はぼろぼろになっていた。

もうろうとする意識の中で胸元を探ると、服の中にはしっかりと堅い感触がある。良かった、ディスクは無事だ。しかし安堵していただける状態ではなかった、僕を捉えているのは暗闇に浮かび上がる赤い光。

ここで諦めるわけにはいかない、僕は敵わないまでも無数の機人兵へと銀色の銃を構える。

その時……ふわりと風が舞った。

「え？」

ぼんやりとしている視界、僕は我が目を疑った。

風に揺れている、薄桃色の柔らかな長い髪……。

僕を守るように機人兵達に向かい、両手を広げている少女の背中が瞳に映った。

19・闇に浮かぶ魔城（後書き）

恐ろしい過去から逃げることなく、正面から向き合うリスティです。
リスティを守るとする少女。

ディスクに記された、プログラムとは？

20・黒翼の守護神

機人兵達の前に毅然と立つ、少女の薄桃色の髪が大きく風になびいている……。

これは幻影なのか？ 僕が数回瞬きしたとき、

「伏せなさい、リスティ！」

鋭い叫び声の後、何かが僕の脇をすり抜けていった。

その刹那――。

僕の目の前で激しい閃光が煌めき、爆煙が上がった。

爆風をまともに受けて転がった僕がのろのろと顔を上げると、ロケットランチャーを構えた美鈴さんが立っていた。

「お帰り、時間ぴつたりよ」

美鈴さんはロケットランチャーの全弾を発射すると、僕の手を引いて立ち上がらせてくれた。

「目的は！？」

美鈴さんの問い掛けに、僕はやつの事で肯いた。

「達したのね？ じゃあ、ずらかるわよ！」

おどけたように言くと、美鈴さんがぱつと走り出す。

背後では炎と煙の中で、機人兵達が全滅していた。

僕はその様子をちらりと見た後、美鈴さんの背中を追って走った。確かに少女の姿が見えた。

……あの娘は。

くそつ、名前が思い出せない。

「セラフイムが出てくるわね」

僕の襟首を掴んでコクピットの後ろへ放り込んだ後、美鈴さんはブレイバーの起動に取りかかった。軽傷とはいえ怪我してるんだ。

もう少しいたわって欲しいけど、今はそんな事を言っていられない。

『ハッチ閉鎖……待機モード終了』

操縦桿を引き起こす美鈴さんの細腕、素早い指さばきに再起動したブレイバーが震えた。

メインモニターが灯り、ブレイバーの頭部に搭載されたメインカメラが外の様子を映しだした瞬間。

「ふっ！」

美鈴さんは鋭く息を吐き、フライト・ユニットと脚部バーニアを強制点火し、機体をもの凄い勢いで後方へ発進させた。

「わあああああああ！」

シートに座れず、ひっくり返った僕はあまりのことに叫びまくった。

美鈴さんは後退しながら、右手のライフル、グレネード。フライト・ユニットの高出力ビームカノン、ビームバルカン、あらゆる火器を前方へ向けて闇雲に乱射したのだ。

モニターには爆光と、立ち上る爆煙しか映っていない。

「め、美鈴さんっ！」

正直、僕は彼女が錯乱したのかと思った。

「リストエイ、掴まりなさい！」

激しい衝撃。

美鈴さんはさらに機体を加速させると重機や大量の資材を薙ぎ倒し、脆い倉庫の壁と屋根を体当たりで破壊したあと、ブレイバーを飛翔させた。爆発ボルトが作動し、弾切れになったフライト・ユニットの高出力ビームカノンと、ライフル固定のグレネードランチャーが自動的に切り離される。

「ど、どうしたんですか！」

身を乗り出してモニターを覗いた瞬間、僕は絶句した。

「何なの、あの機体は？」

美鈴さんの攻撃で、全壊し炎上する倉庫の群。

立ち上る黒煙から姿を現したのは……。

優雅で流麗、黒く輝く美しい姿をしたその機体。僕のイメージの中では、純白の機体だったはずだ。

「エスペランゼ……」

僕は喉の奥から声を絞り出すように、その黒い装甲兵の名をつぶやいた。

ふわり――。

長大なビーム・ランスを携え、機械とは思えぬ大きくしなやかな翼を広げ、漆黒の機体が宙へ浮き上がる。

「馬鹿にしているの？ 今更こんな大型の機体でっ！」

美鈴さんはブレイバーを反転させて逃げようとしたが、エスペランゼはそれを許さなかった。信じられない機動力で突進してくる黒い旋風、エスペランゼに煽られたブレイバーが、大きくバランスを崩す。

「こいつ、なんて動きをするの！」

エスペランゼは無人なのだ。

ブレイバーの頭上を押さえたエスペランゼから、雨霞と浴びせかけられるビームガトリング。美鈴さんは何とか地上すれすれで機体を捻り、激しい砲火をぎりぎり回避する。

目標を失ったエネルギー弾が地上に着弾し、大規模な爆発が起こる。海面へと迫り出している、廃棄区画の一部が大きく崩れて海中に落ち、巨大な水柱を上げる。

ビームガトリングで、恐ろしいほどの破壊力だ。

エスペランゼの隙について、ブレイバーがライフルを放つ。

その精密な射撃。しかし幾筋ものエネルギー弾はエスペランゼを貫くことなく、堅牢な黒い装甲にあっさりと弾かれて霧散した。

メインモニターを睨む僕は、両の肩をきつく抱きながら歯噛みしていた。

エスペランゼが完成しているのなら、いくらカスタム・タイプでも所詮量産機であるブレイバーでは絶対に勝てない。

海上都市ヴィラノーヴァの守護神たる装甲兵『エスペランゼ』、僕は人々の希望と信じていた。

しかし。

圧倒的なエスペランゼの力。焦燥感が募るコクピットの中に、電子音が響く。

「通信、誰？」

驚く美鈴さん。

僕は後ろから精一杯に手を伸ばし、通信機のスイッチを入れた。

『……の見る夢。それは荒れ果てた大地に花咲く、ささやかな希望』
合成された機械音声。深くて低いそれは、エスペランゼの声。

「な、何？ 何なの？」

美鈴さんの声が、震えている。

『私は、必ず実現させる……』

エスペランゼが、漆黒の翼を広げた。

『光無き深淵の闇で、自らの罪を償うがいい。必要無き者達よ』
来る！

「美鈴さん、ヴィラノーヴァの尖塔を背にして下さい。盾にするんです！」

僕が叫ぶと、美鈴さんは反射的にブレイバーを操った。

ブレイバーがヴィラノーヴァにまわりつく魔風を切り裂き、尖塔を目指して加速する。

エスペランゼは一瞬躊躇したが、やはり追って来る。

しかし、発砲はしない。

「エスペランゼの基本性能は、ブレイバーとは比べ物になりません。最大出力、装甲材、機動力。全てにおいて、量産機と比較できるレベルにないんです！」

僕は今のうちに、エスペランゼの装備を含む、機体のデータを美鈴さんに伝えることにした。

「主装備は手に持つビーム・ランス、これは接近戦用に特化された機体だからです。左腕のシールドは、既存の装甲兵が標準的に装備している接近戦用ブレードを受け付けません。ビームガトリングの威力は、目の当たりにしたでしょう！」

「何よ、化け物じゃないの！」

美鈴さんはブレイバーを左右へと大きく振りながら、撤退の隙を窺う。

眼前に迫り来る美しい尖塔、この海上都市にそびえるコントロールタワーだ。

「絶対に尖塔を離れないで下さい……あっ！」

「そうも言つてられないっ！」

上空から、尖塔の外壁を滑り降りてくるように、三十機ほどのセラフィルムが攻撃を仕掛けてきたのだ。

その時僕は気付いた。美鈴さんの身体が小刻みに震えていることに。

「この木偶どもがっ！」

美鈴さんの鋭い叫び声と共に、ブレイバーのフライトユニットが唸りを上げた。

エネルギー弾の集中砲火をかわしながら、美鈴さんはいきなりミサイルポッドの全弾を発射した。まるで意志を持っているかのように複雑な弾道を取り、ミサイルがセラフィルムを目掛けて突き進む。

ミサイルは確実にセラフィルムの機体を捉えて弾ける、幾つもの爆光が闇を灼き、十機以上のセラフィルムが粉碎され、バラバラと落下していく。

一度機体を反転、離脱させた美鈴さんは空になったミサイルポッドを切り離し、ブレイバーを再び上昇させた。

落下するミサイルポッドが、セラフィルムの一斉射撃で瞬時にして粉碎される。

ブレイバーを逃すまいと、執拗に迫るセラフィルム。

「必要無いですって！？ 言わせないわよ、そんな事っ！」

美鈴さんが叫び声と共に連射したライフルのエネルギー弾を、白い翼を広げて機体をコントロールするセラフィルムが容易く回避しながら突進して来る。

美鈴さんはブレイバーを後退させながら、腰部のバズーカを一挺放り出した。次の瞬間、肩部のアンカーワイヤーが作動する。

踊り狂うワイヤーをブレイバーの左マニピレーターが掴み、勢い良く引くとアンカーへと繋がっていたバズーカが振り子のように大きく振れて、突進してくるセラフィムの一機に絡み付いた。

「捕まえたっ！」

ブレイバーが発射したライフルのエネルギー弾が、バズーカの弾倉を撃ち抜き装填された弾が誘爆する。

大規模な爆発が、セラフィム数機を巻き込んだ。

「そこを、どけえっ！」

叫んだ美鈴さんは、エネルギーの切れたライフルを投げ捨ててブレードを抜く、ブレイバーは接近戦用ブレードを振りかざし、五機のセラフィムを叩き斬った。

「……美鈴さん」

半数以上のセラフィムを撃墜し、美鈴さんは肩で大きく息をしている。

しかし、ブレイバーも無事ではなかった。

ほとんどの武装を使い果たし、各部の装甲に被害があることがモニターに表示されている。あれだけの激しい戦闘で、この程度の損傷で済んでいるのが奇跡だとも言える。

これまでに無い激しい空中戦にふらつく頭を押さえた僕は、左のモニターへと目をやった。

「あっ！」

僕の声と同時に鋭く響く接近警報。

大きく黒翼を広げたエスペランゼが、凄まじいスピードで接近してくる。

「きつ、来ました！」

「見えているっ！」

エスペランゼが突き出した凄まじいビーム・ランスの一撃を、ブレイバーは辛うじてかわしたが、長槍の光刃になぶられた左肩の装甲、ミネルバ隊のマーキングが消失した。

美鈴さんは、ブレイバーをじわじわと後退させながら、残ってい

るバズーカをエスペランゼへと向けて発射する。

五発全弾が着弾し、エスペランゼが爆光に包まれる。だがその程度の攻撃では、エスペランゼの堅固な装甲に傷一つ付けられない。

爆煙の中から現れたエスペランゼは、咆哮し黒翼を広げた。

しかし、いまでもブレイバーに肉迫しようとしたエスペランゼが、突如バランスを崩して失速する。まるで悔しさを表現するように、ビーム・ランスを一振りしたエスペランゼは、黒翼を大きく羽ばたかせて少しの距離を後退した。すると、エスペランゼの機体に紫電が走り、力をみなぎらせたがエスペランゼが再び大きく吼える。

「そうか！」

その様子をじつと観察していた僕は、思わず大声で叫んだ。

「リステイ、何？」

「美鈴さん、助かるかも知れませんよ！」

僕は、思わずシートから身を乗り出した。

「どういうこと？ 余裕がないわ、的確に説明して！」

「どの機関なのかは特定出来ません。でも、エスペランゼの動きはまだ完全じゃありません。海上都市のエネルギーフィールドに接触することで、エネルギーの供給を受けているようです」

「……じゃあ」

美鈴さんも気付いたようだ。

稼働するだけで莫大なエネルギーを消費するエスペランゼは、今の段階ではエネルギーの供給を受けるため海上都市を離れられない。残ったセラフィムは十数機、ブレイバーの速度なら逃げられる。

「美鈴さん！」

「了解！」

ブレイバーが行動を起こしたと同時に、僕達の会話を聞いていたように、突出してきたセラフィムが、ブレイバーを包囲しようと散開する。

ジュエル号で貰った武器はほとんどなくなっていたが、美鈴さんは背部に残っていた大型のビーム・ガトリングをブレイバーの両手

に構えさせた。

「帰ったら、船長にお礼言わなくちゃならないわね！」

ビームガトリングが火を噴き、エネルギー弾を喰らったセラフィムが、木っ端微塵に吹っ飛ぶ。

そして弾切れのビームガトリングを投げ捨てた美鈴さんは、頭上に広がる虚空へと掲げたブレイバーの左腕を、勢いよく振り下ろした。次の瞬間、ブレイバーの半身ほどもある長大なブレードが大きくスライドし、白熱化して唸り始める。

「大人しく、道を開けなさい！」

遠心力を利用し、ブレイバーが左腕を振るう。

凄まじい威力を発揮する刀身が、片っ端からセラフィムを両断していく。ブレイバーに接近するすべてのセラフィムは、まるで激しい竜巻にでも巻き込まれたように、バラバラに粉碎されていく。

これで逃げられる！ 少し安堵した僕は、尖塔の付近に浮いているエスペランゼの様子に気付いた。

巨大な両の黒翼を大きくいからせたその姿……その黒翼の一部が大きく開き、迫り出している長い砲身にまわりつく青白い光。

あれは、『神の光槍』！

間違いない、あれはエスペランゼに装備させるために開発されたのだ。

「美鈴さん！ 逃げて下さいっ！」

僕が叫んだその瞬間、エスペランゼの黒翼が輝いた。

同時にエスペランゼの両翼の先端が弾けて粉碎し、砲身から目映い純白の閃光が迸る。

膨大な光の衝撃波に飲み込まれたセラフィムが、一瞬にして蒸発していく。

それはまさに、すべてを貫き灼き尽くす『神が携えし閃光の槍』

「エスペランゼ、お前はっ！」

僕は絶叫した。

闇を裂く純白の光熱波が、ブレイバーを飲み込もうとした。

『だめえっ！』

僕には、はっきりと見えた。

そう、僕はこの娘を知っている。

向かい来る閃光の槍に立ちはだかろうとする、薄桃色の髪の少女。

そうだ、彼女の名は『ミウルフラウゼ』

美鈴さんの悲鳴と、少女の叫びが交錯する。

そして僕の意識は、光の中へと弾けて消えた。

20・黒翼の守護神（後書き）

美鈴とリスティの前に立ちはだかった、黒翼の装甲兵「エスペランゼ」

ブレイバーを守ろうと、両腕を広げた少女のイメージ。
彼女の名は「ミユルフラウゼ」

リスティと美鈴は……。

21・告白

封環……繋がり合う小さな金色の輪が、涼やかな音を立てる。
それは、魂を揺さぶる音色。

——木漏れ日が、ゆらゆらと揺れていた。

微風が草の香を運んで来る。

この争いに明け暮れる世界で、後どのくらいこの風を感じていら
れるのだろうか。

まどろむ意識、薄桃色の髪をした少女の姿がぼんやりと見えた。

「兄様！」

弾ける笑顔を見せる少女が抱きつく。

「こら、はしたないよ」

「まあ！ やっぱり兄様は私よりも、セラフィム達の方が大切な
ですね」

少女は拗ねたようにそう言って、つん！ とそっぽを向いた。

困ったな、それは大きな誤解だ。

機嫌を直して、はにかむ少女の碧い瞳。

彼女の小さな両手に握られた綺麗な花冠。

——終わる事なき戦い。

とめどなく流れる涙。

雨に濡れる小さな墓標の前で、ずぶ濡れのまま力なく立ち尽くし
ていた。

失われた、少女のささやかな夢。

——別離。

「ヴィラノーヴァのプロジェクトに参加するだ？　馬鹿な事を言うな！」

射貫くような視線。親友である彼の瞳には怒りが宿っていた。

「封環を施せば、もう此所へ戻る事は出来ぬ。お前はすべてを失うのだぞ！」

「それは、承知の上だ」

「目を覚ませ、お前ほどの腕を持つ男が！」

彼の憤激はおさまりそうにもない。

「俺は今日から『リステイ・マフィン』だ、それ以外の名は忘れてくれ」

金色の封環が奏でる音色が、次第に遠ざかっていく。

人の心を通じて、僅かながらも干渉し合い存在している平行世界。ふたつの異なる世界を隔てるために、記憶を封じた鍵は心の奥底に沈められた。

「う……」

網膜に焼き付いた閃光の槍、エスぺランゼの黒い機体。

そして、ミウルフラウゼ。

僕は、暗闇の中で目を開けた。鈍く痛む額を撫でながら、ゆっくりと身を起こす。

どうやら生きているらしい。

ブラックアウトしたメインモニターには『CHECK MAIN SYSTEM』の赤い文字が点滅していた。

靄がかかっていた意識が、次第にはっきりしてくる。そして僕は、コクピットに美鈴さんの姿が無いことに気が付いた。

「美鈴さん、美鈴さんっ！」

ぐるりとコクピットの中を見回す。

シートから投げ出されたとはいえ、狭いコクピットの中で彼女の姿に気付かぬ筈がない。

「あ？」

コクピットハッチが開いたままになっている。

僕は体の向きを変えて、コクピットから恐る恐る顔を覗かせた。

「これは……水？」

自分がいる場所を確認する、ブレイバーは水溜まりの中に墜落していた。

力なく座り込むように頭を垂れている姿。僕は苦勞してコクピットから這い出すと、機体を見上げて絶句する。

ブレイバーは酷い状態になっていた。

メインカメラを収めた頭部の装甲が全壊。右の上腕からミニユピレーターは、修理不可能なほど溶解してひしゃげている。耐熱樹脂塗料は黒く焼け焦げ、胴体の装甲やメンテナンスハッチのほとんどが欠損して、内部機関が剥き出しになっていた。

この状態で、よくも逃げられたものだと思う。

「ごめんな、ブレイバー」

ざらりとした装甲をそつと撫でた。

僕は思い切つてブレイバーの膝から飛び降りる、着地した際に体がふらついて水溜まりへと落ちそうになったが、何とか堪えた。

しばらくすると、暗闇に目が慣れてくる。

幾本もの錆びた鉄骨が天井に伸びている、どうやら大きな建物の中らしい。鉄骨に沿って見上げると、屋根に空いた大穴から夜空が見える。あらためて辺りを見回した僕はぞつとした。廃棄された発電所か何かの貯水槽に墜落したのかと思ったが、それにしても規模が小さ過ぎる。

ただの廃工場だろう。

僕は再び目を凝らし、暗い建物の中を注意深く見回す。暗闇への本能的な恐怖から、自然と肩に吊ったホルスターへと手が伸びる。

しかし、どこかで落としてしまったのか、僕の銀色の拳銃は無くなっていた。

「美鈴さん！」

心配が募り、心細くなった僕は大声で叫んでみたが、暗い建物の中に僕の声が虚ろに響くだけだった。美鈴さんは、外の様子でも見に行っているのだろうか。

一人になってしまい、訳が分からない僕は仕方なくその場に立ち尽くしていると。

その時、いきなり暗闇に生まれた目も眩むような光が、僕を暗闇から照らし出した。

「な、何だ……？」

耳にからみつく、調子悪い発電機の音。強い光に手をかざしてじっと見据えると、僕を照らす大きなサーチライトの傍らに美鈴さんが立っていた。

「めっ！美鈴さん！」

嬉しくて思わずうわずった声で叫んだが、僕はそのまま凍り付いた。長い黒髪が揺れ、美鈴さんがゆっくりとした動作で僕に銃口を向けたのだ。

銃身が銀色の鈍い光を放っている。あれは、僕の拳銃だ。

鋭い視線に射抜かれて、何も言葉が出てこない。僕を見据えて、美鈴さんが静かに氷の微笑を浮かべた。

「あなたは、一体何者なの？」

温かさの欠片もない声。

彼女の問いに、ぎゅっと胸が締め付けられた。

「そろそろ話してもらおうかしら？」

僕は視線を足下に落としたまま、ただじつと美鈴さんのよく通る声を聞いていた。

あの黒い装甲兵を『エスペランゼ』と呼んでいたわね。あなたは
何を知っているの？」

美鈴さんは、僕の返答を待っているのだろう。沈黙が、辺りを支

配した。

「リステイ……」

不意に名を呼ばれ、僕が顔を上げた瞬間。美鈴さんが構えた拳銃が火を噴いた。

びくりと震える体、僕は息を飲む。暗い廃工場の中に轟音がこだまする。僕の顔のすぐ横を、弾丸が通り過ぎていった。

「物騒な弾丸……対機人兵用の特殊徹甲弾ね」

美鈴さんはそう言って、続けざまに二回発砲した。

暗闇の中に跳弾の火花が散る。僕は顔を上げて真っ直ぐに立ち、しっかりと美鈴さんを見つめた。クレイバークでもそうだったが、美鈴さんは僕がジャンク屋などでは無い事に勘付いていたのだろう。「『エスペランゼ』……あの黒い装甲兵は、この星に残っているすべての人間を、根絶やしにしようとしているんです」

渴いた喉の奥から、苦勞して声を絞り出す。

『惑星再生計画』

僕は海上都市ヴィラノーヴァの統率者、フレグランス・ウイスラー博士が率いる再生プログラムを遂行するチームの一員だった。

この星と人々を救うため、ありとあらゆる技術を導入する大規模なプロジェクト。それはこの瀕死の星にとって最後に残された、ただひとつの方策だった。

チーム内で僕が主任として担当したのは、当初は予定外の計画だったヴィラノーヴァを護る装甲兵の開発。

連合軍による攻撃が激化し、各地の支援研究所がいくつも壊滅してしまふ状態。

強力な「セラフィム・タイプ」に拠点を防衛させていたのでは、人類への被害が拡大してしまう。

かといってこれ以上支援研究所を失えば、プロジェクトは立ち行かなくなる。そんな事態を考慮した上での、緊急的な開発計画だった。

ウイスラー博士の意見により、現状の人類すべてに畏怖を与える

ための絶対的な存在が必要とされたのだ。幾たびの試行錯誤を繰り返した僕は、一機の装甲兵の図面を書き上げた。

唇をきつく噛みしめる。

「そうです……」

血でも吐くような呻き声が、喉の奥から漏れ出した。

「エスペランゼは、僕が造ったんです！」

エスペランゼ、その背に神々しい翼を広げる装甲兵。

大空を舞う、純白の守護神。

僕は再生計画の守護者となったエスペランゼが滅び行く世界を救い、人々に希望の光を与えてくれると信じて疑わなかった。

自分自身の声が、ひどく遠くから響いてくるように感じられる。

美鈴さんの表情は変わらない、しかし僕に向けられている銃口がほんの少し揺らいだ。

「リステイ。あなたが、ヴィラノーヴァの研究員」

かすれた美鈴さんの声に口を噤むしかない。僕は世界の人々にとって、悪鬼のごとく死と破壊を撒き散らすセラフィムを操る、呪われた海上都市の亡者なのだ。

力が抜けていく上体を、両腕できつく抱く。

……そしてあの日、僕の脳裏から決して消える事が無い血の惨劇。ウィスラー博士は、海上都市を警備している機人兵のプログラムを書き換え、研究所内のすべての研究員を殺すようにと命令を出した。

そして中央制御システムへは、現人類の抹殺命令を出したのだ。

『君は絆を信じられるかい？』

ウィスラー博士が、いつも僕につぶやいていた言葉。

それは、彼の深い絶望が語らせた言葉だったのだろう。

いくら訴えかけようとも、何処までも憎み合い傷つけ合おうとする人間など、救いの手を差し伸べる価値もない。

ならばすべて消し去ってしまえばいい。

そして彼が率いていたプロジェクトチームは、僕ひとりを残して壊滅した。

ずっと胸に抱えていた想いを、言葉として紡ぎ出すたびに僕の意識は冴えていく。

心に固く誓った、ただひとつの思い。

「僕は、エスペランゼを破壊しなければならないんです！」

心臓をポイントしているはずの銃口を真っ直ぐに見つめ、大声で叫んだ。

「美鈴さんに出会った廃墟で、僕は一機の装甲兵を造っていました」
「ヴィラノーヴァへ潜入し、エスペランゼを破壊しようかと何度も考えた。」

しかし、僕にはそんな能力が欠片も無い。

胸のポケットから、ケースに入った五枚のデータディスクを取り出す。ずっと肌身離さずに使っていた、僕の大切な切り札。

「骨格や動力部、装甲と武装まで、約六十パーセントくらいの完成度でした……でも」

五枚の内、一枚を手に取り美鈴さんに掲げて見せる。

「新しい方式の機体制御プログラムを、海上都市から脱出する際に研究所から持ち出すことが出来なかったんです。コンピュータネットワークを使って、何とかデータをダウンロードしようとしたんですが」

「失敗して、居所知られてしまった」

「はい」

僕はうなだれた。

「迂闊な行動でした。ヴィラノーヴァの中央制御システムに、僕が生きている事を察知されているのを承知していたはずだったのに」
「ヴィラノーヴァの中央制御システムは、エスペランゼ、セラフィムに命令を送り続けている。僕が隠れている廃墟へと、機人兵を引き連れたセラフィムが殺到して来たその空域で、美鈴さんのミネルバ隊はセラフィムと遭遇したのだ。」

ヴィラノーヴァの中央制御システムは、僕を恐れている。

そう、エスぺランゼを破壊しうる可能性を秘めた装甲兵を新造する事が出来る僕を、生かしておく訳にはいかない。

だからエスぺランゼが未完成の上、超長距離射撃になるにも関わらず、小型化に成功しエスぺランゼの黒翼に搭載された「神の光槍」を発射させたのだ。

そして美鈴さん達ミネルバ隊が、その光熱波に巻き込まれた。

「僕のミスで、ミネルバ隊は……」

ずっと口にすることに怯えていた、僕は五枚のディスクを静かに置いた。

「このデータディスクがあれば、もう一度エスぺランゼに対抗出来る機体を作り上げることが可能です」

顔を上げると銃を構える美鈴さんを見据え、ゆっくりと目を閉じた。

「それが、僕の責任だったんです」

大切なことは、全て伝える事が出来た。

裁きを美鈴さんに委ねる、彼女に撃たれるのなら本望だ。

だが覚悟をしているものの、いつまでたっても僕は生きている。

……どうしたんだろう？

「ごりっ！」

耐えられなくなった僕が目を開けると同時に、銃口が額に押しつけられた。

美鈴さんが、いつの間にか目の前に立っていたのだ。

「うわわわわわわわっ！」

驚いた僕はバランスを崩して尻餅をつき、背後にあった大きな瓦礫に後頭部をぶっつけた。

「っっ！」

声も出ぬ程の痛みに悶絶している僕を見ていた美鈴さんは、くす

りと笑った。

「弾切れよ」

「え？」

美鈴さんがふとしたときに見せる温かな微笑みに見とれていると、彼女は大型の銃を器用に手のひらで回して僕へと放った。

「美鈴さん……」

「リステイ。たとえあなたを殺したって、誰が生き返るわけではないわ。勘違いしないで、私はあなたに話して貰いたかっただけ」

美鈴さんは長い黒髪を手で梳くと、ディスクのケースを手にとった。

「一人ぼっちで戦うのは、つらくて苦しかったでしょう？ でも、もう大丈夫よね？」

ディスクを僕に差し出す、黒曜石の瞳は真剣だ。

「あなたが造った機体を、私に任せてくれない？」

そう、僕はパイロットを捜していた。

エスペランゼを凌ぐ性能を持つ機体を、御する事が出来るパイロットを。嬉しいんだか何だかよく分からないままに、目頭がじんと熱くなってきた。

「ほら、泣いてるんじゃないの。ブレイバーの修理は大仕事よ！」

僕は歯を食いしばって涙を拭くと、美鈴さんの手からデータディスクをしっかりと受け取った。

21・告白（後書き）

美鈴が差し出した手。

すべてをさらけ出すリスティ。

二人の想いが、今、ひとつになりました。

22・青空に誓う明日

「シミュレーションを終了します……」

膨大な量のチェックリストを簡易テーブルの上へと無造作に投げ出し、僕はどさりとその場に腰を降ろした。

目を閉じて、眉間の辺りを指でマッサージする。ひどく喉が渇く、体が少し熱っぽい。

大きな音を立てて高圧のエアが排出され、シミュレーション用コクピットのハッチが開く。しばらくすると、長い黒髪をポニーテールにまとめた美鈴さんが姿を現した。

純白のパイロットスーツに身を包む美鈴さんは、颯爽とした姿だったが、

「う、気持ち悪い……」

青い顔でつぶやいてコクピットから這い出ると、ぐったりとその場に座り込んでしまった。お互い、疲労はピークに達していた。

僕と美鈴さんは、何とか飛べる程度にブレイバーを修理した後、エスペランゼが放った『神の光槍』に灼かれた廃墟へと向かった。

そこは、僕と美鈴さんが初めて出会った場所だった。機人兵に追われる僕を助けてくれた美鈴さん。

命拾いをしたものの、恐怖に腰が抜けて立ち上がる事が出来ない僕を見下ろす、黒曜石の瞳は冷たい輝きを放っていた。

……最悪の出会い、そんな思い出がある場所だ。

地下の開発プラントは大量の瓦礫に埋もれていたものの、僕が密かに装甲兵の開発を進めていた消滅を免れていたのだ。

それはまさに幸運だった。気が遠くなるような大量の瓦礫の山から、苦勞してプラントの入り口を掘り出し、祈るような気持ちで中へと足を踏み入れた。

未完成の機体は、まだそこにあった。

しかし、その姿は無事とはいえない状態だった。

装甲材を固定する内部フレームはバラバラ、繊細な動きを要求されるマニピレーターは全壊、カメラ類のレンズなど一枚残らず割れている状態。

深刻なのは、機体各部への指示を伝達する中枢系の歪みだった。

人間で喻えると、神経が集中している脊椎にあたる部分が壊滅的な被害を受けていた。

どんな障害が起きるか見当もつかないので、ダメージを受けた部品を流用することなど出来ないのだ。

最初から作り直すしかない。僕は機体の製造に専念し、美鈴さんには機体コントロールのシミュレーションをこなして貰っているのだが……。

出力、装甲、機動性及び兵装と、新しい機体には僕が考え得る限りの性能を持たせてある。そして、海上都市から命懸けで回収したディスクに収められていたプログラム、『思考制御システム』を組み込んだ。

操縦桿を使つての操作ではなく、専用のヘルメットと感応機と呼ばれる機器を使用する。

直接的に人間の思考信号で指示を出し、機体側で受け取った信号を変換、機体動作に必要な指示を与えるというシステムだ。

このシステムならば、機体の反応速度を格段にレベルアップ出来る。

しかし、あくまでも理論的に。

システムが人を選んでしまうのだろうか。シミュレーション結果から、パイロットとしての熟練度が高い美鈴さんは、このシステムを受け容れ難いようだ。

「大丈夫ですか？」

「ええ。今のところね」

そう答えて、微かに浮かべる微笑みも弱々しい。ドリンクが入ったパックを差し出すと、頼りない手つきでパックを受け取った美鈴さんは、やっと返事をしてストローを咥えた。

「美鈴さん。何度も言いますが、自分の限界だけは決して超えないようにして下さい」

「何度も言わなくなつて、分かつてるわよ」

そうだ、この機体と思考制御システムを組み合わせた欠点がここにある。

確かにこのシステムは、機体性能を最大限に引き出せる、興奮した状態とでも言おうか、精神的に高ぶればそれだけ機体の反応速度も上がるのだ。

しかし機体を制御する人間、つまりパイロットの安全性に関してはまったく保証していない。新型のフローティングシートなどの安全装置を装備したが、下手をすれば想像もつかない加速の衝撃がパイロットに襲いかかる。

戦闘中に、血肉の塊と化してしまう場合だつて起こりうるのだ。

性能低下は致し方ない、僕はリミッターを作動させることで安全を確保しようとしたのだが、当の美鈴さんにあつさりと却下されてしまった。

「そんな底力の無い機体で、あの黒い奴には敵わないでしょう？」

そう言われれば、返す言葉が無い。

パイロットの安全を考慮に入れる必要のない、無人機のエスペランゼと比べればこれでやっと互角という性能だ。出来ればこの機体も無人機に仕立てたいのだが、セラフイムやエスペランゼの例もある。いつコントロールを失うか分かったものではない。

もう僕には、美鈴さんを信じる事しか出来ない。

「美鈴さん、少し休みましょう」

唐突に……僕自身でも驚くほどに、そんな言葉が口について出た。「馬鹿言うんじゃないの！ 休むって、どこにそんな時間があるの

？」

「ありますよ……ほら、行きましょう！」

僕は半ば強引に、美鈴さんの手を引いた。

何日ぶりにプラントの外へ出たのだろうか、見上げる空は見事に晴れ上がっている。異常気象の影響だろう。やはり気温は高く、肌を焦がすように照りつける苛烈な太陽。

昨夜珍しく雨でも降ったのか、足下の傷んだ灰色の地面には、小さな水溜まりが幾つか出来ていた。

「いい天気ですね！」

「そうね」

日陰に立つて不機嫌そうに腕を組んでいる美鈴さんは、投げやりな声で答えた。

そんな彼女に構うことなく、僕は体をうんと伸ばした。

肺の中の澱んだ空気を入れ替えるように、めいいっぱい深呼吸をする。容赦なく照りつける陽差しに熱せられた大気を吸い込むと、肺が焼けつくようだ。

優しい姿を見せてくれなくなった自然。柔らかな木漏れ日も微風も、心を和ませる草花も。どんなに切望したとて、遠い彼方に失われた光景だ。

荒れ果てて、目を覆うばかりの姿を晒す世界の姿。

海上都市ヴィラノーヴァは、人々を救えるものならばと手を差し伸べた、しかし……。

疲れているのだろう、美鈴さんの物憂げな表情。透き通る白い肌に、艶のある長い黒髪。そして髪の色と同じ、深みある光を湛えた黒曜石の瞳。

僕は、ふと美鈴さんと初めて会った時の事を思い出した。

その出逢いを足掛かりに、ジュール号で旅をした間の美鈴さんの思い出が、僕の脳裏に次々と甦って来る。

現れては消え、現れては消え……。悲しみ、悔しさ、怒り、そし

て喜び。様々な感情が溢れ出して鼻がむずむずする。美鈴さんに涙ぐんだのを悟られないように、振り返る時に白衣の袖でぐいと目尻を拭った。

「美鈴さん、覚えてますか？」

「何を？」

精一杯、明るい声を出す。そんなに面倒臭そうに答えなくてもいいのに。

「ルテリマで食べた色々な果物、美味しかったですね。レンディータアの、山盛りにした山賊料理も良かったなあ……あと、フレイシユリカの肉料理も美味しかった」

でも一番美味しかったのは、チェイニーが作ってくれた料理だ。この戦いが終わったら、もう一度、美味しいシチューを食べに行こうと心に決めている。

美味しい物を食べている人の笑顔を見ると、何だか幸せな気持ちになってくる。

「呆れた、食べ物ばかりじゃないの」

そんな言葉で、僕の思い出を一蹴した美鈴さん。美味しい物を食べる事って、案外、大切な事かもしれないのに。

足下の石ころを蹴り飛ばし、僕はちらりと美鈴さんを睨んだ。こめかみに指を当て溜息をついてい美鈴さんは、ふと何か考えるように眉根を寄せた。

「うん。葡萄酒だったら、フォンドワーヌのものよね。あれ、樽ごと空けたかったな。ランディルアで分けて貰ったウイスキー……大事に取ってあるの。そうそう、シュヴァルウエアのエクスカリバーあれは最っ高！」

お酒の名前ばかり、人のこと言えないじゃないか。きらきらと目を輝かせて力説する美鈴さんをジト目で見てみると、彼女は僕の視線に気付いたようだ。

僕と美鈴さんは、見つめ合ったまましばらく固まっていたが、同時にぷつと吹き出した。

笑い出したらもう止まらない。僕達が置かれている状況を考えれば、笑っている余裕なんて少しも無いのに。

……どのくらい笑っていたのだろう。

僕は妙にすつきりとした気分になった、それはどうやら美鈴さんも同じらしい。

乱れた長い黒髪を整えながら、目尻の涙を拭った美鈴さんは柔らかい微笑を見せてくれた。

「覚えているわ。ガディ船長に、パメラおばちゃん！」

「厨房のスイフリーさん、注射の痛いテロップ先生！」

「メノアとリオネルは、どうしているのかしらね。ロードウィバーのロアンは相変わらずかしら？」

「ブレイバーがお世話になったブランディさんに、僕がお世話になったチエイニー。エアンは元気かな？ あ、そう言えば！」

「レイチエルさんの幸せな笑顔、忘れないわ！」

僕と美鈴さんの気持ちは同じだった。

ジュエル号での旅路で、沢山の人々との様々な出会いがあった。

「みんな一生懸命に生きてるんですね、この空の下で」

「そうね……」

優しい笑顔、美鈴さんが目を細める。

僕は、その美鈴さんの微笑みを忘れないだろう。

みんなの明日を守りたい、輝く明日を手に入りたい。

そう、だから絶対に負けられない。

見上げた青空に誓いをたてて、僕は力強く頷いた。

22・青空に誓う明日（後書き）

リスティの、力強い誓いです……。

23・終焉の序曲

苛烈な太陽を覆い隠す、暗雲が支配する空。海を渡る冷たい風が僕の髪を撫でてゆき、波は不気味な静けさに凪いでいる。この海域は幾度も大きな戦争が繰り返された場所であり、打ち棄てられた艦船の残骸が多い。激突でもすれば危険だが、身を隠すには都合がよい。

僕と美鈴さんは放棄されていた装甲兵の格納デッキを持つ大型の軍船を改造し、幽霊船のような残骸を隠れ蓑に、海上都市ヴィラノーヴァの近海で様子を窺っていた。

「全てのチェックは終わりました」

僕は、機体搭乗用リフトの手摺に背を預けている美鈴さんに告げた。

四肢を固定されて静かに目覚めの時を待つのは、僕が心血を注いだ一機の装甲兵。美鈴さんが着ている、パイロットスーツの色と同じ純白の機体だ。耐熱樹脂塗料に種類がなかった為なのだが、僕はとてもよく似合っていると思う。

今日は、この星からすべての人間が姿を消す日……。

漆黒の鎧を纏う裁きの神エスプランゼは完成し、海上都市ヴィラノーヴァから全ての居住コアへと、人類の完全なる抹殺が宣言された。

折しも完成した僕の機体はチェックが終わったばかり、何とか間に合ったようだ。

僕は逃げ場もない各地の居住コアでパニックが起ることを危惧していたが、予想に反してパニックが起るどころか、子供、女性、年老いた人達を守るように人々は冷静に避難を始めているらしい。

その最中、最後の戦いを挑むためにヴィラノーヴァへと向け、ひ

とつの船団が出発していた。

五隻ほどの急作りの艦隊だったが、一隻また一隻と仲間に加わり、今では百隻以上の大艦隊になっている。艦隊を束ねる旗艦の役割を担っているのが、軍船に改造された超巨大船ジュール号。

五百機あまりの装甲兵の先頭に立つのが、蒼い稲妻……ロアンの「VX-5F型」だという情報を僕は掴んでいた。

ヴィラノーヴァノ中央制御システムは、真っ先に艦隊を殲滅せよと命令を出すだろう。

美鈴さんが機体に馴れるまで出撃させたくはなかったのだが、どうやらそういう訳にもいかなかったようだ。

「すべてを懸けた決戦ね」

美鈴さんは、手にした思考制御システムの専用ヘルメットの調子を見ながらつぶやいた。

「僕達にとつても同じです。でも、何百という戦艦、何万という装甲兵を集めたところでエスペランゼに勝てる訳が無いんです。無駄に人を死なせるような事は出来ません」

「この馬鹿、なに自信満々で言ってるのよ」

美鈴さんは呆れたようにいうと、僕を睨んだ。

「それにしても綺麗な機体ね。あの黒い奴もそうだけど、なかなか良いセンスしてるじゃない」

「センス……ですか」

僕は、純白の装甲にそつと手を触れた。

「機体のデザインを考えた訳じゃありません。僕はただ、幾重にも強度計算を張り巡らせただけ。その計算結果が形作るラインです」

多分、初めてだろう。

僕はしっかりと美鈴さんを見つめた。

「……美鈴さんに、帰って来て欲しいから」

美鈴さんは数回瞬きしたあと、いきなり右手を伸ばして僕の額をこづいた。

「この子は、何て言う名前なの？」

「名前ですか？」

「ずきずきと痛む額を撫でながら僕は口ごもり、美鈴さんと一緒に機体を見上げる。」

「名前なんか付けて、可愛がつていてやれないんです。最初で最後の、過酷な戦いに送り出すことになるでしょうから」

美鈴さんに、こんな事を言うのは心苦しい。僕が視線を床に落としてみると、美鈴さんが微かに息を吸うのが分かった。

「聞いて、リスティ。この子は確かに存在しているのよ、私達に力を貸してくれるために。だからこの子のために、その存在の証を記してやりたいの」

美鈴さんは、そつと白い装甲に手を触れた。

「私に、この子の名前を付けさせてくれないかしら？」

顔を上げて、美鈴さんの真剣な瞳を見返した僕には、何となく彼女が付けようとしている名前が分かった。

「お願いします」

美鈴さんは頷いて、そつと瞳を閉じた。

「あなたの名前は、ミネルバよ……」

透き通る声が告げたそれは、この機体にふさわしい名前。

白き翼を背に広げ、空を覆い尽くす暗雲を光剣で吹き払う希望の女神。

「ありがとうございます」

僕は、深々と頭を下げる。

その時、突然その場に激しく電子音が響いた。

「リスティ！」

「はい！」

船に装備されている受信機が、何かの通信を傍受したらしい。

美鈴さんに緊張した声で答えると、ブリッジへと急いだ。

僕はスピーカーの雑音に顔をしかめながら、マニュアルで受信状態を調整する。

『我々……は、ここに宣言……する』

「これは……」

美鈴さんが眉をひそめた。

『不滅の……意志を胸に集いし、我らが同胞達よ……これは聖戦である！』

「艦隊の決起宣言だ！」

僕はきつく唇を噛んだ。

全てを懸けた、最後の戦いが始まるうとしている。

『我らは……ここに……在るのだ……そして……』

僕は最大望遠にしたカメラが映したヴィラノーヴァの映像に、思わず息を飲む。

「始まった！」

それは衝撃的な映像だった。まるで絵画のように、心を奪われてしまう光景。

暗雲が厚く垂れ込める空。ヴィラノーヴァに聳える、尖塔の直上に姿を現したエスペランゼ。黒き鎧を身に纏い、人々へ死の宣告を与えんとする漆黒の破壊神。

そして、そのさらに上空で輪を描いて旋回するのは数百機の従者たるセラフイム、破壊神の下僕として死と破壊、恐怖を撒き散らし続けた墮天使達。

肅正を始めるための儀式に、僕は両肩をきつく抱いて身震いした。美鈴さんも息を飲み、食い入るようにモニターを見つめている。

心の奥底にある恐怖を呼び起こすかのように響く、エスペランゼの咆哮が心を砕きそうになる。

僕は心を奮い立たせ、急いでレーダーを操作すると艦隊の位置を探した。

「まずい！ 予想以上に艦隊の足が速い。もう数時間もすれば、戦闘が開始されてしまいます！」

僕が叫ぶと、美鈴さんがさっと長い黒髪を束ねた。

「出るわよ、リステイ！」

「はい！」

『繰り返す。これは……聖戦であるっ!』

僕はスピーカーから流れる、聞き取りづらい艦隊の決起宣言を置き去りにして、ヘルメットを小脇に抱えた美鈴さんの後を追った。

「美鈴さん」

ミネルバのコクピットへと続くリフトで、僕と美鈴さんは向かい合っていた。

美しき女神と共に、戦いに赴く戦乙女。

真剣な黒曜石の瞳に見つめられ、僕は彼女の名をつぶやいただけで、後に続けるつもりという言葉をぐっと飲み込んだ。

……ああ、やっぱり情けない。

「じゃ、行つて来るから」

まるで散歩にでも行くように、軽い口調でそう言つて背を向けた美鈴さん。

僕にはもう、彼女を見送る事しか出来ない。

彼女を、行かせたくない。その気持ちをねじ伏せるために、僕は全ての神経を集中していた。

……その時。

ひとつにまとめた彼女の、艶のある長い黒髪が風に踊った。

「え？」

振り向いた彼女。

黒曜石の瞳が優しく微笑む。

そして僕は抱きすくめられ……。

美鈴さんの唇が、僕の唇に触れていた。

柔らかで、そして暖かなその感触。

一瞬で麻痺した僕の意識がやっと自我を取り戻した頃に、もう美

鈴さんはコクピットに滑り込んでいた。

「……あ」

頭の中が混乱している。僕が声を出すと同時に、コクピットのハッチが閉じた。機体から搭乗用のリフトが離れ、固定具が次々と外れていく。

「美鈴さん！」

次第に唸りを上げていくジェネレーターの轟音、もう僕の声は届かないだろう。

船の後部に設置された、ドーム状のハッチがゆつくりと開いていく。ミネルバが暗雲立ちこめる空を見据える、封印を解かれた白き女神が目を醒ました。

ゆつくりと、そして静かに広げられる美しい純白の翼。

力を溜めるように、少し姿勢を低くしたミネルバの機体が震えた瞬間。

轟音に尾を引かせ、白き女神は天空へと羽ばたいた。

人という愚かなる生き物を救うことに、どれほどの意味があるのか？

そう問われ、僕は答える事が出来なかった。

心と心を繋ぐ温かな絆を信じたい、いや僕は強く信じているんだ。信じられなければ、命を賭けてミネルバを造ったりしないのだから。

見えなくなってしまったミネルバの光跡を見送った後、僕はすぐに白衣をひったくと袖を通すのもどかしく、ブリッジへと駆け上がった。

僕には、まだ仕事が残っている。

ミネルバの後方支援、そして海上都市へと向かう艦隊の足を止める事だ。

艦隊の旗艦がジュエル号ならば、ガディさん達が乗っているはず

だ。大型無線機のスイッチを入れ、出力最大で全ての艦の通信に強引に割り込む。マイクを握りしめた僕は、腹を決め大きく息を吸った。

「ヴィラノーヴァへと向かう全艦艇に告ぐ、直ちに停船せよ！」

一気にそう叫んだ後、すぐにチャンネルを絞り、ジュエル号の受信チャンネルへと向けて発信する。受信状態はよくないが、見覚えがある懐かしいブリッジの様子が、モニターへと映し出された。

「聞こえるか、ジュエル号！ ガディ船長は健在か！」

そう叫んだ僕は驚いた。ガディさんの指定席だったキャプテンシートには、艦長帽を目深に被ったいかにも軍人という風体をした初老の男が座っていたのだ。

「何だ、貴様は……」

声から察するに、艦隊の決起宣言をしていた人物だろう。

眼光鋭い一睨みだが怯んでいるわけにはいかない、僕は負けずに睨み返す。

「同じ事を二度説明する手間が惜しい。あなたが艦隊の総司令官とお見受けします。全艦艇の即時停船を指示して下さい！」

「私はこの艦の艦長、レイブネル・アルガスだ。何を馬鹿げた事を言っている？ 本艦隊は作戦行動中である、貴様も決起宣言は聞いただろう」

戦闘艦へと改造されたジュエル号の、レイブネル艦長がそこまで言っただけ。

「リイイイイイイイステイイ！」

突然、ぶわつと目から涙を溢れさせた、ガディさんのどアップが画面に映し出された。

「うわあああああつ！」

心底驚いた僕は、思わずモニターから数歩後ずさる。

「生きてやがるぜ、この馬鹿野郎が！ ちゃんと足はあるんだろうな！」

「あははは……はい」

涙で顔をくしゃくしゃにしながらモニターへとしがみつき、ガディさんが悪口雑言をぶちまける。僕にはそれが無性に嬉しくて、言われるままになっていたのだが。

「畜生！ てめえなんざ、どうでもいいんだよ！ お嬢はどうしたんだ、お嬢はよ！」

ガディさんのどアップの後ろで、ブリッジに集まったジュエル号のクルー達が、「そうだそうだ」と連呼している。

はいはい、どうせそうなんでしょうね。

一度ジト目でガディさん達を睨んだ僕は、表情をあらためた。

「美鈴さんは、あの黒い装甲兵に勝負を挑むために、たった今出撃されました」

「何！？ まさか、ブレイバーか！」

一瞬で、ガディさん達の表情が凍り付いた。

「違います」

僕はしっかりとした口調で言った。

「ミネルバという名前を美鈴さんから頂きました。僕がこの手で造った装甲兵です」

「そうか……」

ゆつくりと、ガディさんの顔にあの不敵な笑みが浮かんでくる。

「貴様ら、いい加減にしないか！ 作戦行動中だぞ！」

……あ。

いきなりの怒鳴り声に、僕は思い出した。ジュエル号は今や、大艦隊の旗艦なのだ。

「ふふふふふ……」

しかしモニターの中のガディさんは、大きな肩を震わせながら笑い始めた。

「貴様、何のつもりだ？」

ブレイブ艦長が、懷に手を入れた瞬間。ガディさんがレイブネル艦長の手首を掴むなり、筋肉が盛り上がるそのぶつとい腕で彼の頭を抱え込んで締め上げた。

「かつ艦長！」

他の軍人達が助けに入ろうとするのを、ジュール号のクルー達全員が阻止する。

「がっはははははははは！」

久しぶりに聞いた、ガデイさんの豪快な笑い声。

「へへっ、リスティよ。実は、お前とお嬢の弔い合戦のつもりだったんだけどよ、お前達が生きてるってんなら話は別だ！」

ガデイさんは、歯を剥き出した。

「おい野郎共！ この軍人野郎と俺達のお嬢と、どっちを信じるよ？」

「んなこたあ決まってるぜ！」

「ああ！ もちろんだ！」

ガデイさんの大声に、力強く腕を振り上げるクルー達。

「……てな訳だ。すまねえな、軍人さんよ」

レイブネル艦長の懷から拳銃を奪い取ったガデイさんは、キャプテンシートから彼をぽいと投げ捨てた。どっかりとキャプテンシートへと腰を落ち着けたガデイさんが、ごほんと大きく咳払いをする。「いいか野郎ども！ 艦内にいる軍人を、ひとり残らずふんじばつて来いっ。それから後方に向けて一、三発ぶつ放した後に停船信号だ！」

「おおっ！」

景気良い雄叫び。ブリッジを駆け出していくクルー達の姿を眺めて満足そうに頷いてから、ガデイさんは僕へと向き直った。

「リスティ。それでお前は、今どこに居るんだ？」

「美鈴さんのすぐ側です。後方支援が必要ですからね」

「そうか……あな、リスティ」

ガデイさんはふと何か言いかけて、口をつぐんだ。

「どうしたんですか？」

「なんでもねえよ。ああ、艦隊のことは任せとけ！」

ほんとに、どうしたんだろう？ ガデイさんはぶっきらぼうにそ

う言い捨てると、力強いこぶしをぐつと突き出し親指を立てて見せた。

「いいか、リステイ。みんな上手く片付いたら一杯やろっぜ！ 男同士の約束だ、絶対に破るんじゃねえぞ！」

ぶっつ！

僕が返事を返す間もなく、ガデイさんはいきなり通信を切ってしまった。

「……はい」

僕は何も映っていないモニターを見つめて大きく頷く。
ぱんっ！

両の頬を強く叩いて気持ちを切り替え、既に起動させてあるミネルバの支援用機器の具合を確かめる。

ミネルバの状態は良好だ。

『必ず帰るわ』

唇に感じた温もりは、彼女が僕へと残した約束。

「美鈴さん……」

祈るような気持ちで、胸元で輝く銀のペンダントを握りしめる。

その時不意に、背後に感じた気配。

「リステイ……」

「え？」

この声は――。

僕はひとつの確信を持って振り返った。

23・終焉の序曲（後書き）

白き女神ミネルバが、天空に羽ばたきました。
リスティと美鈴の旅に、答えは出るのでしょうか。

24・白き翼の女神

心臓の鼓動が激しくなる、僕はペンダントを握りしめる手に力を込めた。

僕の目の前で揺れている薄桃色の長い髪、僕を見つめる優しい瞳、少女の確かな存在感。

「ミュルフラウゼ……」

間違いない、間違えようなどないが……しかし。

とまどいを隠せない僕がそうつぶやくと、不意にミュルフラウゼの表情が歪んだ。

「リステイ！」

淡い桜色のスカートの白いレースがふわりと翻り、ミュルフラウゼが僕に抱きついた。

小さな体が震えている、両手で触れた震える肩はとても華奢で温かい。僕は幻影でも見ているのだろうか？

『ミュルフラウゼ』……それは、人の名前ではない。

海上都市ヴィラノーヴァをコントロールしている中央制御システム。ミュルフラウゼは、そのインターフェイス・プログラムだった。僕はどうして、そんな事を思いついたのだろう。システムの中に構築された彼女に、僕が扱えるすべてのプログラムを駆使して疑似人格を形成した。

プログラムの更新を繰り返していくと、ミュルフラウゼは徐々に会話をもこなせるようになった。システムの中のスペース、疑似空間の中で一人歩きを始めた彼女の姿を見るのは楽しかった。

緑の草原や美しい花、刻々と変わる空の様子、巨大な滝、数え切れないほどの野生動物。

ミュルフラウゼは僕が与えるデータの中でも、旧時代の自然の様子がとても気に入ったようだった。彼女に神秘的な自然の映像を見せることで、僕は絶望の中に救いと安らぎを求めていたのかもしれ

ない。

しかし彼女は所詮、プログラム上の存在でしかないはずだ。
それなのに……。

胸に頬を寄せていたミウルフラウゼはゆっくりと両腕で体を支えると、何かの決意を秘めた青い瞳で僕を見上げる。

「大切な事を伝えに来ました……」

瞳に浮かべていた涙を小さな手で拭い、凜とした表情の少女はしっかりとした口調で言った。

しなやかで力強い翼が大気を切り裂く。

女性的なシルエツトを持ったミネルバは、黄金色の燐光を発しながら最大加速で天空へと上昇していた。

「シミュレーターなんかとは、比べ物にならない……」

ヘルメットのバイザー内に映し出される様々な数値を読みながら、美鈴はそう言葉を漏らした。身体を包み込むような造形を施されたコクピット内は、まったく圧迫感を感じない。心地良い機体との融和感、シミュレーターではいつも感じていた不快感に苛まれることがなく、ごく自然にミネルバが伝えてくる情報を全身で感じる事が出来る。

天空に満ちた冷たい空気、大地に広がる悪意、人々の恐れと嘆き……そして祈り。

美鈴は思考を集中させ、機体すべてのコントロールを把握した。刻々と変わる周囲の状況を映し出す、様々な情報をチェックしながら戦闘準備を進める。

「機体コントロールシステム及び、火器管制の動作正常。各武装、最終セーフティ・ロックまで全て解除」

美鈴はヘルメットのバイザー内の映像を切り替えた。それまで伝えられていたミネルバの機体データが、簡易表示として視界の下方

に移動する。バイザー内に煌めく照準が現れて海上を進むセラフィムの編隊の動きを捉えた情報が次々と更新されていく。

「見えた……」

ミネルバは白い翼を大きく広げ、凍り付くほどの冷気を充分にはらませて急制動をかけると、両の腕双方に構える長大な銃身のライフルのエネルギーレベルを最上限に設定し地表へと向けた。

星が瞬く虚空を背負い、ミネルバの美しい翼がふわりと広がる。

眼下に見えるのは、数百機にも上るセラフィムの編隊。

美鈴はミネルバの両手それぞれが握っている、ライフルの感触を確かめる。球状の感應機が微かに輝き、ミネルバはライフルのトリガーを強く引き絞った。

銃口を中心にして瞬間的な広がりを見せた、同心円の光が虹色に輝いて霞みゆく。ミネルバのライフルから放たれた目映いエネルギー衝撃波は、大気を焦がしながら真っ直ぐに地表へと伸びていく。

輝きを放つ二筋の光の矢は突き進みながら大きく拡散し、まるで幾筋もの流星のようにセラフィムの編隊へと降り注いだ。

突如襲い掛かった無数の光の矢に撃ち抜かれるセラフィム、海上で花咲くように閃光が広がった。機体が消滅する際の爆光がエスペランゼを照らす。

センサーの範囲外からの攻撃に晒され、大多数のセラフィムが為す術もなく爆砕する。直上からの攻撃に遅れながらも反応してシールドを頭上に構えるが、降り注ぐ強力なエネルギー弾はシールドを貫通し、次々にセラフィムの機体へ穴を穿つ。

編隊の三分の一を失った頃、ようやく回避行動に入り体勢を立て直したセラフィム達が、遙か上空で滞空するミネルバへと一斉にライフルを向けた。

見通す事などかなわぬ、暗い天空へと向けられたライフルの銃口が煌めく。

「目標への着弾確認……回避！」

モニター画面に広がった無数の爆光を確認したミネルバは、素早

く回避行動に移る。

その瞬間、ミネルバが放ったエネルギー弾の光跡を辿り、空間を紅に染め上げる反撃の矢がプラズマを伴って殺到してくる。

虹色の光に満たされるコクピット内。回避行動に入ったミネルバの白い翼から放出される黄金色の粒子が空間を満たす。襲い掛かる反撃の矢は、散りばめられた星々の明かりよりも目映い。

その光の矢を、ミネルバは軽やかに機体を回転させてかわしている。

セラフイムの反撃を全て回避したミネルバは、両手に握るライフをすつと手放した。広げていた翼が本物の羽のように滑らかに畳まれ、機体に搭載されたバーニアを最大出力にして急降下を始める。己を流星へと変えて、あっという間に地表へと帰還したミネルバは、眼前に迫る海面へと腰部の両脇へ搭載されたビームキャノンを放った。大きくうねる海面に突き刺さった膨大な熱量のエネルギー弾は、海面を瞬間的に沸騰させ、爆発的な蒸気が巨大な柱となって吹き上がる。

海面を放射状に広がる衝撃波が駆け抜け、荒れ狂う風がぴたりと収まった。

柔らかな綿帽子のように、ミネルバは静かに海上で滞空する。居並ぶセラフイムへ両手を広げ、ゆっくりと両腕を差し伸べた。

しかし裁きの神エスペランゼの下僕たる墮天使達は、慈愛溢れる女神の抱擁を受け入れようとはしなかった。ライフルを投げ捨て、その双眸に憎悪を漲らせ腰から剣を抜き放つ。

白き女神は諦めたように小さく嘆息した、しなやかな翼を大きく広げて水面を滑るように後退する。

まるで哀しみを堪えるように体を折り曲げたミネルバが顔を上げる、その両手に握るのは剣の柄だ。

セラフイム達は白き女神をその剣で切り刻もうと、四方から一斉に殺到する。

しかし、その凶刃はミネルバへと届く事は無かった。

急速に接近するセラフイム達に反応したミネルバのメインカメラが青く輝く。両手に握る剣の柄が光を発し、長く伸びたエメラルドグリーンの光は双剣の刃となった。

胸を張るように上体を伸ばし、体を捻ったミネルバがステップを踏んだ。装甲から迸る光の粒子は汚れ無き純白、まるで上質の絹のようにふわりと広がる。

ドレスをその身に纏ったかのようなミネルバ、それはまさに美しい女神の姿だ。

双剣を構えたミネルバが上昇を始めると、力強く羽ばたく白き翼が激しい風を生み出した。海上に突如現れた巨大な竜巻の中で、双剣を構える女神が激しく舞い踊る。

光芒を放つ双剣が鋭い牙を剥き、突進してくるセラフイムを次々と空中へ巻き上げては切断していく。

暗き絶望の舞台で舞う白き女神は、希望という光を伴う旋律にその身を委ねる。

新たな爆光が、竜巻の周囲に広がった……。

数百機のセラフイムすべてを撃墜し、再び静かに滞空するミネルバがふわりと翼を広げた。

「堕天使達には、舞台を降りて貰ったわ。ミネルバ、ラスト・ダンスよ……」

つぶやいた美鈴の意識に突き刺さるのは、黒翼の守護神が放つ強烈な悪意。

魂を砕く咆哮に気付いた美鈴の目に映ったのは、遙か前方で両の翼をいからせたエスペランゼの姿。

黒い翼の一部が大きく開き、鈍い光を放つ砲身が姿を現している。翼にまわりつく紫電が漆黒の機体を激しく照らす。今まさに、滅びをもたらす光槍を投げ放たんとする暗黒の破壊神を睨み付け、感應機を両手で強く握る美鈴は声高に叫んだ。

「放射ミラーウイング急速展開！ 全砲身発射態勢、エネルギーチ

ヤージ、レベルマキシマム！」

ミネルバが純白の両翼を左右へ最大展開すると同時に、背部に装備された高出力砲撃ユニットが四つの長い砲身へ分離し、前方へとせり出す。

「間に合って！」

美鈴が手の平を当てる感応機が、まばゆい緑色に輝き始める。上空で互いの両翼を広げ、向かい合う白と黒の戦神。

エスペランゼが大きく広げた漆黒の両翼から、瞬きと共に純白の光が迸り。

同時にミネルバの四門の砲身から、青白く輝く光が放たれる。

真っ向から衝突した膨大な光のエネルギー衝撃波は、互いの目標を大きく逸れて、あらぬ場所へと着弾した。

凄まじい轟音と激震が、大気を引き裂く。

空が、海が、そして大地が……まるでこの星が絶叫を上げたかのようにだ。

純白の光は小島を瞬間的に塵へと変え、巨大な火柱が輝くように蒼天を焦がす。青白い光は海面へと突き刺さり、海が沸騰でもしたかのように爆発的な蒸気が遙上空まで吹き上がった。

「あいっ……」

息をのんだ美鈴は、衝撃波と激震を受けるミネルバの機外の光景に戦慄した。それは、まるで神話の時代に繰り広げられていたであろう神々の戦の舞台だ。

エスペランゼとミネルバは共に、リスティがたった一人で造り出した人型兵器だが、その双方の機体に秘められた破壊力はあまりにも強大だ。

「とんでもない機体を造るんだから」

美鈴の強い光を帯びる黒曜石の瞳が見据える、メインモニターに映るエスペランゼに紫色の紫電がまわりつき、小さな爆発と共に

黒翼から迫り出した砲身が四散した。

「相打ちか、計算通りね」

美鈴のヘルメット、バイザー内に警報が映し出される。

ミネルバの背部に装備された砲撃ユニットの四門全てが、使用不能になっていた。

「高出力砲撃ユニット、パージ！」

ミネルバの背部で破裂音が響き、役目を終えた砲撃ユニットが強制排除されて海へと落下した。

24・白き翼の女神（後書き）

白き女神ミネルバと、漆黒の破壊神エスペランゼの決戦。

美鈴とリスティ。

二人にとって、最後の戦いが始まります。

25・ミュルフラウゼの想い

ミュルフラウゼの細い両肩に、恐る恐る手を置いた僕は混乱している頭を振った。

システムの記憶領域で数字の羅列に過ぎない存在の彼女が、僕の目の前で確かに実在している。澄んだ碧色の瞳、体の温かみさえ感じるその存在に僕は息を飲んだ。

「ミュルフラウゼ。君は、どうして……」

「リステイ。私はいつでも、あなたと共にいました」

「僕と……？」

表情を緩めて微笑んだミュルフラウゼは、僕の胸元で揺れる銀のペンダントをそつと指で触れる。

そのペンダントは以前、海上都市でウイスラー博士から渡された物だった。

「リステイ、あなたは覚えている？ 海上都市の研究棟で起こった惨劇を」

忘れられる筈などない。あの恐怖、あの悔しさは僕の記憶に深くと突き刺さっている。志をひとつにした仲間達はみんな死んでしまった。

ウイスラー博士が発した命令により、すべての研究員は命を絶たれてしまった。その結果プロジェクトは暗礁に乗り上げ、世界は混沌に落とし込まれたのだ。僕にはどうしても理解する事が出来ない、ウイスラー博士はどうしてあんな凶行に及んだのだろうか？

息苦しさに喘ぐ僕を気遣うように、再びそつと胸に頬を寄せたミュルフラウゼが言葉を紡ぐ。

「あの時すでに、中央制御システムはプロジェクトを中止すると決定していたの。人の心で息づく悪意を消し去る事など出来ない。人々の汚れきった魂など、存在する価値も無いと」

「馬鹿な！ そんな……そんなはずはない！」

僕はミュルフラウゼの言葉を否定するように、激しく首を振って叫んだ。

「僕達は何のために頑張ってきたんだ。中央制御システムは、どうして人類の抹殺なんか宣言したんだ!？」

理解する事が出来ない僕は苛立ちに耐えきれず、両手で髪を掻きむしった。

「誰もが心に持っている、ほんの小さな悪意は暴走を始め、膨れ上がる負の感情は優しさも信頼も、思いやりや慈しみまでも飲み込んでしまった」

ミュルフラウゼは言葉を切った。

可愛らしい薄桃色の唇が告げるのは、醜く歪んだ人の心。

僕はやるせない想いに、きつく唇を噛んだ。

「海上都市ヴィラノーヴァが建造された真の目的は、より良い方向へと導かれた心を持つ人々を守る事だった……でも」

人々は差し伸べられた、温かな救いの手を振り払った。

海上都市が持つ、優れた技術力を我が物にしようとする醜い欲望によって、戦火は瞬く間に拡大されたのだ。

「その人々の愚かな行為が、救う価値も存在する価値もない魂だと判断されたの」

すべてを見透かしてしまう、少女の澄んだ碧い瞳。

「でも、ウィスラー博士はそれを認めたくなかった。だからプロジェクトを続行するようにと中央制御システムの説得を続けた。あの時、プロジェクトの続行を願っていたのは、ウィスラー博士とリステイ……あなただけだった」

自分の両肩をきつく抱いたミュルフラウゼの体が、細かく震えている。

「プロジェクトの中止を阻止しようとして、ウィスラー博士は中央制御システムへの強制介入を試みたけれど……それは不可能だった。中央制御システムに掌握されたエスplanゼやセラフィムなど、装甲兵のコントロールすら取り返す事が出来なかった」

僕はミュルフラウゼの悲しみに濡れる碧い瞳をじっと見つめて、ミュルフラウゼの言葉を追う。

「ただひとつ残された手段として、ウィスラー博士はもともと中央制御システムのインターフェイスだった私を、システムの奥深くへと介入させる事に成功した」

僕から身を離れたミュルフラウゼがそつと手を振ると、空間に幾つもの光球がぼうつと浮かぶ。

目を奪われる、神秘的なその光景。

それは、彼女が人間ではないという証だ。

「私が惑星再生システムを実行させるためには、実際にこの世界を見て感じ得たデータを中央制御システムを介さずに、最下層で眠る実行プログラムに転送するの。そして正否の認証を受けなければならぬ。だからウィスラー博士は、私をあなたのペンダントに移して……」

「僕と、行動を共にさせた」

ミュルフラウゼの沈黙が、僕の意見を肯定していた。

博士はあの惨劇の最中、僕を海上都市から脱出させた、それは僕の行動を予測しての事だったのだらう。海上都市を脱出した後、僕はジュエル号での旅路で人々の優しさや強さ、魂を包む温かい心を自分の胸に刻み込んだ。

……ミュルフラウゼと共に。

そして僕は、人類を抹殺しようとするエスプランゼに対抗するために、白き女神ミネルバを造った。

「あの時、博士は……」

そう、博士は僕に言った『君は生きろ、そして見届けてくれ』と。博士はすべての想いを僕に託したのだ、命を投げ出して中央制御システムへ反逆した。プロジェクトの中止を支持するすべての研究員を殺し、僕だけを脱出させた。

自らも絶望の縁に立たされていたのだらう、人の心を信じられなくなりつつある自分に脅えていたのだらう。

それでもウイスラー博士は、たったひとりで懸命に戦った。

「だから私は、ずっとあなたと一緒にいたわ。あなたと共にこの世界を見つめ続けていた、あなたが感じた嬉しさや悲しさ、怒りや憤り……そのすべてを胸に刻んで！」

ミュルフラウゼが、その小さな手で僕の両腕をしっかりと掴んだ。僕の腕を握る、小さな手に込められた強い力。

「エスペランゼを破壊しただけでは、人々を救う事は出来ない。海上都市は崩壊し惑星再生計画は灰燼へと帰してしまう。それを止めるには、私が蓄積した膨大なデータを実行プログラムへと転送しなければならぬの！」

ミュルフラウゼの言葉に、僕は力強く頷いた。

「ミュルフラウゼ。君が中央制御システムを介さずに、実行プログラムへアクセス出来るポイントは何処にあるんだ？」

「アクセスポイントの入力機器は、ヴィラノーヴァ尖塔の頭頂部にあります！」

僕はモニターに映る視線の先、暗雲が渦巻く天空を刺し貫くように聳えている、禍々しい尖塔を睨み付けた。

「もう時間がないの。リステイ、私を尖塔へ連れて行って！」

「分かった」

強く拳を握りしめる。これは、僕に出来る最後の仕事だ。

不意に、ミュルフラウゼの碧い瞳から大粒の涙がぼろぼろとこぼれた。小さな手で一生懸命に涙を拭い、ミュルフラウゼが僕を見つめる。

彼女がゆっくりと手を振ると、その手の動きに合わせて、光球はまるでモニターのように映像を映し出す。

そこに映っているのは、計り知れない死への不安と恐怖に脅えながらも、居住コアで身を寄せ合う人々の様子。

産着に包まれた小さな乳飲み子を、しっかりと抱く母親の姿……。年老いた両親を懸命に励ます、息子の姿……。

その瞳は無慈悲な空を見据え、口々に祈りの言葉を捧げている。

そんな人々の様子が、刻々と光球の表面へと映し出されていく。
輝く幾つもの光球に囲まれて、ミュルフラウゼがしっかりと僕の瞳を見据えた。

「リステイ……最後にもう一度だけ聞かせて、あなたは这个世界が好き？ 人々が好き？」

「ああ、好きだよ、大好きさ！」

迷う事など無い、僕は大きな声で答えた。

「うん」

可愛らしくはに cand 頷くミュルフラウゼが、逡巡するように一度俯いた後、勢い良く顔を上げた。

「リステイ！」

思い詰めたその表情。

「……本当に、私の事が分からないの？」

ミュルフラウゼの悲痛な声が、僕の意識を殴りつけた。

「ミュルフラウゼ……？」

そう僕に告げるミュルフラウゼの姿が、次第に薄れていく。

「お願いだ、教えてくれミュルフラウゼ！ それは、いつたい……」

「リステイ」

唇を噛んだ少女、瞳を潤ませる清らかな涙。

「あなたと同じように、这个世界を救おうとした人々がたくさんいるの。メノアやリオネルに出会ったでしょう？ 人の心を通じて干涉し合う、もうひとつの世界から海上都市と共に現れた人達……ごめんなさい。私にはこれ以上、あなたに真実を伝えられる権限が与えられていない」

ミュルフラウゼの瞳から、再び大粒の涙がぼろぼろと溢れ出す。
涙を流す少女は、声を詰まらせた。

「私は、あなたの記憶の奥底に眠っている、大切な人の姿……さよ……うなら。私の……大好きな、優しい……お兄……様……」

懸命に言葉を紡ぐ少女が、やさしい、やさしい笑顔を見せた。

「ミュルフラウゼ！」

叫んだ瞬間、突然広がった目映い閃光が視界を奪う。

僕にはその光が何なのか、すぐに分かった。

エスペランゼの「神の光槍」と、ミネルバの「高出力砲撃ユニット」の膨大なエネルギー衝撃波が、真っ向から激突したのだ。

突如襲った激震と爆風に船が大きく揺さぶられ、僕は床へと投げ出された。

心の奥底で連なる金色の環が、微かな音を立ててひび割れる。

そうだ――。

『リステイアード・セレスティ』それが、僕の名前だ。

この世界の裏側に、心の連環を通じて互いに干渉しながら存在する、もうひとつの世界がある。

それが僕の故郷だ。

その故郷を焼き尽くす大きな戦争で、僕はたったひとりの大切な妹を失った。

長い長い戦争は終息したが、悲しみに泣き崩れる心の闇は広がり続けた。

憎悪と欲望に、蝕まれてしまった人々の心。

その深い闇は人の心を通じて隣り合う、もうひとつの世界までも蝕み覆い尽くしていく。

このままでは表と裏で存在する、ふたつの世界は成り立たない。

救いの手を差し伸べるのだ、人々が安らぎの時間を刻み続けられるように。

救いの手を差し伸べるのだ、すべてを失ってしまうその前に……。

だから僕は躊躇することなく、温かな記憶を差し出した。

ふたつの世界のバランスを取るために。

悲しみの思い出と共に故郷を捨て、この世界の人間として生きるために。

25・ミュルフラウゼの想い（後書き）

リスティの決意。

ミュルフラウゼの想いを、ヴィラノーヴァへと届ける事が出来るのでしょうか。

そして美鈴。

彼女の戦いにも、決着の時が訪れます。

26・美鈴

漆黒の破壊神が突き出す光槍の勢いを、白き女神は下方から斬り上げた光剣の刀身でその勢いを殺ぐ。至近距離からミネルバが発射したビームキャノンの一撃は、エスぺランゼの黒く堅牢な装甲に弾かれた。

進む目映い閃光が、白と黒の相反する意を持つ機体を照らす。思念というものが視覚的に捉えられるのなら、双方の戦神が纏うのはまさに対極に位置する想いだ。

間合いを計るように、黒翼を開いたエスぺランゼへと迫るミネルバ。苛烈な斬撃を見舞うが、その一撃はシールドに阻まれる。分厚い憎悪を切断する事も叶わず、エスぺランゼに蹴り飛ばされたミネルバが後退する。大きく体勢を崩したミネルバへ浴びせられる、エスぺランゼのビームガトリング。

渦巻く闇の力を懷へと導くかのように吼えるエスぺランゼ、闇から這いずり出す果てない絶望は光を浸食し、ミネルバを絡め取ろうとする。

「……このっ！」

わずかな判断ミスが命取りとなる。

美鈴はビームガトリングを受けたダメージを表示するウィンドウへ、ちらりと視線を向けて舌打ちをした。

『白き女神を駆る者よ……』

コクピット内に響いてくるのは、以前にも耳にしたことがある落ち着いた低い声。

漆黒の破壊神エスぺランゼが、美鈴へと語り掛ける。

『……お前は、何を信じて戦うのだ？ お前が命を賭けてまで守ろうとしている、醜い心を宿す者達はそれほどの価値があるのか？』

「この期に及んで、何の問答をする必要がある！」

幾千、幾万もの光の礫を振りかざす光剣で薙ぎ払い、美鈴は叫ん

だ。

『心を繋ぐ温かな絆など失われて久しい。閉ざされていく心は醜く……何かを、また誰かを傷つけようと牙を剥く。その結果が痛めつけられたこの世界の姿だ、貴様達の醜い心を映した鏡だ』

エスペランゼは静かに言葉を紡ぎ続ける、荒んだ人の心を淡々と断罪する。

『この私が手を下さずとも、いずれ滅びる弱い心を宿す者達よ。しかし、それでは貴様達が犯した深い罪を償うことにはならぬ。その身に恐怖と絶望を刻め、貴様達が差し出す命が、心に沈殿するどす黒い欲望を浄化させるための代償だ』

エスペランゼが仕掛ける猛攻に、防戦一方のミネルバが大きく後退する。

ミネルバを追うエスペランゼが勢い良く光槍を回転させ、唸る魔風を身に纏い突出した。黒い豪腕が握る長大な槍の柄で力任せに殴りつけられ、その衝撃で失速したミネルバの機体が一直線に海面へと落下していく。

——小さな優しさも、ささやかな思いやりも見失い。己の欲望のみを追い求めた醜い心はどこまでも膨れ上がり、この星を蝕み続けた。

闇に蝕まれどこまでも墜ちて行く心は、温かな木漏れ日、柔らかな微風、この星がふと見せてくれた優しさを無惨に引き裂いた。

『貴様達に存在する価値など、ありはしないのだ』

追い打ちを掛けるエスペランゼの言葉は、ビームガトリングにさらなる力を与え、ミネルバへと降り掛かる。光弾が海面に着弾し、幾つもの水柱が海面に高く吹き上がった。

「言いたい放題になど、させるかっ！」

海面に激突する寸前で大きく翼を広げたミネルバが、バーニアを全開にして姿勢を制御し、再び空へと舞い上がる。

『聞こえているか、白き女神を駆る者よ……』

「黙れ……黙りなさい。あなたは、創造主を信じられないの!？」

両肩を震わせる美鈴が叫んだ。

美鈴が発した激しい激情に、エスペランゼが沈黙する。

「……お前が言うとおり、人間など賢い生き物じゃない。脆い魂を、時の流れに逆らえず朽ち果てる体に押し込んだ、どうしようもない生き物よ」

喉の奥から絞り出すのは、心の奥へと深く深く沈めていた怒りと悲しみ。

「だから殺すというの？ だから消し去るというの？」

己もその人間という生き物だ。

美鈴とて、すべて分かっているなどと、自分が賢いなどと言うつもりはない。

「でもね……」と、紅い唇が小さく動く。

居住コアという運命を託した小舟の上で震える人間達は弱い者を庇い、身を寄せ合って恐怖に耐えている。絶望に苛まれながらも互いを励まし合い、光と希望を信じている。その決然とした表情は、信ずるに値するのではないだろうか。

空を覆う暗雲を見つめる人々の心は、優しさを忘れてなどいない。

「あいつに。もしも、リステイに出会わなかったら、私は……」

感応機を強く握りしめ、対峙する漆黒の戦神を見据えながら。美鈴はリステイの温もりを覚えている赤い唇を開く。

「私は明日に脅え、今日を生き抜く事を諦めていた……。冷えた魂が求める、温もりを欲する声が聞こえぬように耳を塞いでいた!」

美鈴は今この瞬間に、己を述懐する。

「私はね……帰りたいの、リステイのところへ」

胸へと灯った温かな光、それは美鈴が胸に抱くただひとつの願いだ。

自分の両手を見つめていた美鈴は、そっとその手を胸に当てる。

狂おしいほどの愛情、込み上げてくる気持ちを守るように両手で大切に包み込む。

物心ついた時にはすでに両親は亡く、美鈴は荒んだ街で育った。空を見上げ手を伸ばしても、そこに未来など描く事は出来ず。ささやかな夢など抱いた事は無かった。ただ無為に時間を過ごしていた、生きる事の意味さえ見出せずにいた。

だから戦った、ただ戦う事しか出来なかった。しかし、何も守れなかった。

荒んだ心を包み込んでくれた、そんな自分を愛してくれた人も失った。

「そう、リステイに出会わなければ……私は間違いなく、あなたがもたらす闇を喜んで受け容れていた」

温かい想いを否定したままで、寂しく死んでいただろう。

リステイは、美鈴の折れた翼を癒してくれた。

美鈴に、未来を信じさせてくれた。

「あいつは……リステイはね。こんなに乾いて荒れた大地を、ひとりですつと走り続けてきたのよ」

リステイの傍らで、ずっとその姿を見つめ続けていた。

はじめは馬鹿馬鹿しく思えた、ひどく滑稽な姿に見えた……しかし、それが間違いだったと気付いた。

「ひとりで全部抱え込んで、走って走ってつまずいて思いつ切り転んで。痛くて怖くて、寂しくてたまらなく不安で、もう立ち上がりたくないのに。でも、あいつは泣きべそかきながら歯を食いしばって立ち上がるの。そんな姿を見ていたら、手を差し伸べたくなるじゃない？」

人を守るためにどんなに傷付いて倒れても尚、前を見据えて立ち上がる強さを持てるのだ。

こんなにも、一途な強い意志を持てるというのか。

『あいつが信じたものを、今は自分も信じてみたい』

力強い鼓動が続ける心臓の音を確かめる、リステイと共にこの世

界で生きている。

そう思うだけで、力が湧いてくる。

「全部終わらせて抱きしめてあげたいの。よく頑張ったねって、もう一度キスしてあげたいの」

その瞬間、歓喜に打ち震えるだろう魂を思い、美鈴は大きく息を吸った。

「……それにはね」

死の恐怖を纏い眼前に立ちただかる破壊神を、鋭く睨み付けた黒曜石の瞳が輝きを増す。

「あなたが邪魔なのよ！」

美鈴の叫び声と同時に感応機が激しく明滅し、白き翼を広げてエスペランゼに肉迫するミネルバが光剣を振り降ろす。

エメラルドグリーンの閃光を放つ斬撃を、エスペランゼは素早く後退すると光槍の穂先で払った。美鈴の激情に応えるように連射される、ミネルバのビームキャノンがエスペランゼの漆黒の装甲へ突き刺さる。

「あいつは、人が心に持つ優しさを信じているからっ！」

ビームガトリングを放ちながら、突進してくるエスペランゼが切り払う光槍の一撃を、ミネルバの光剣が受け流す。互いの武器が激突する度に、双方の機体から装甲板が激しく弾け飛んでいく。

美鈴が胸に抱きただひとつの純粋な想い、ミネルバはその純粋な心を体現するように斬撃を繰り返す。ミネルバのビームキャノンがエスペランゼを幾度も打ち据え、エスペランゼのビームガトリングがミネルバの装甲を叩き付ける。

どれほどの激突を繰り返したのだろうか……。

ミネルバとエスペランゼは、互いに距離を取って滞空した。

「……ありがとう、ミネルバ」

息を弾ませる美鈴は、眼前を鋭く睨み付けていた黒曜石の瞳をふ

つと緩める。

「後は自分でやるわ。勘違いしないで、あなたを信用しているのよ。でもあなたは、ずっと私を庇い続けるでしょう？」

モニターに映っているエスペランゼに注意を払いながら、美鈴はそつと語りかける。しかし、ミネルバは黙して答えない。エスペランゼのように自我とも言える機能が与えられているのかは想像がつかないが、美鈴はそつとミネルバへと語り続ける。

「このままの状態で戦い続けていたら、私の方が後どれほども保たない。あなたにもそれは分かるわよね？ もう最後に賭けるしかないの」

エスペランゼとの激しい激突で、ミネルバの機体も傷つき疲弊している。

各部の装甲が剥がれ飛び、唯一残された武器である光剣の刀身を維持する出力が、安定しなくなってきた。背中の美しい羽根も、今では切れ切れで痛々しい。

美鈴は気付いていた。

自らの限界を超えそうになるぎりぎりのタイミングで、思考制御システムの安全装置が作動している事を。美鈴が自らの目の前で、リストエイに安全装置のシステムをオミットさせたはずだったのだが。まさか、ミネルバ自身がシステムを再構築したのだろうか？

「……お願い」

美鈴は感應機から手を離して、静かに目を閉じた。

すると、美鈴が両手を当てていた二基の感應機がシートの後方にスライドして姿を隠し、見慣れた操縦桿が現れる。ヘルメットのバイザー内に映されていた情報が一新され、ミネルバの機体制御がマニュアルモードに切り替わった事が表示された。

それは、ミネルバが美鈴へと示した応え。

「ありがとう。大好きよ……」

操縦桿を握りしめてそつとつぶやいた美鈴は、覚悟を決めて再びミネルバを加速させる。

突然、今までとは比べものにならない加速が美鈴に襲い掛かった。加速の際に生じる衝撃を、極力軽減させるフローティング・シートもまったく役に立たない。急激に範囲が狭くなり、光を得られぬ視界。骨が軋み全身が悲鳴を上げている。胸を肺を、内蔵を激しく圧迫する力が牙を剥く、美鈴が胃液と共に大量の血を吐き出した。視界を閉ざす暗闇に恐れ、気管を詰まらせる血に激しく喘ぎ咳き込みながらも、歯を食い縛る美鈴は操縦桿を握りしめ、絶対に加速を緩めない。

突進するミネルバを迎え撃つ、エスペランゼの光槍が空を切る。ミネルバのスピードが、エスペランゼをわずかに越えた瞬間だった。機体を沈み込ませながら、激しく回転するミネルバが握る光剣の切っ先が、すれ違い様にエスペランゼの片翼の根本に食い込む。

光剣の刀身が黒い装甲を融解させ、漆黒の翼が切断される。仰け反るように身を反らせるエスペランゼが、苦悶の呻き声を上げた。

しかしそれは、ミネルバが放つ事が出来た最後の斬撃だった。力を失ったエメラルドグリーンの刀身が消失する。片翼を失ったエスペランゼが、覚悟を決めたように光槍を真っ直ぐに構え、最大加速で姿勢が崩れたミネルバの背後から突進してくる。

振り向いたミネルバ、真っ正面から激突した光と闇の戦神。

エスペランゼが突き出した光槍がミネルバの胸部装甲を突き破り、その胴体部分を貫通した。

背中から光槍の穂先が突き出し、ミネルバの左腕と左の翼が根本から千切れる。

激しい衝撃に火花が散り、コクピットのメインモニターと左側面のモニターが粉々に砕け散った。

「掛かった！」

美鈴は自分の血と、無数のひび割れで視界が遮られたヘルメットのバイザーを手で粉々に砕き、声の限りに叫ぶ。刀身が消失した光剣を手放して突き出されたミネルバのマニピレーターが、エスペランゼの顔面を鷲掴みにした。

ミネルバのマニピレーターが、エスペランゼの顔を守る装甲に深く食い込んでいく。

残った右の翼を閉じたミネルバは、そのまま機体に装備された全てのバーニアを全開にするとエスペランゼの機体と共に、ヴィラノーヴァの尖塔の搭頂部へと向かい加速する。

「これで……最期っ！」

エスペランゼ頭部が、ミネルバのマニピレーターに握り潰されて粉碎する。美鈴は掴んだままのエスペランゼの機体を、海上都市の尖塔へと力任せに叩き付けた。

ミネルバとエスペランゼ、ふたつの機体は纏れ合うように、海上都市にそびえ立つ尖塔頭頂部の外壁を突き破った。

凄まじい衝撃が、容赦なく美鈴の体へと襲い掛かる。

——そして、訪れた静寂。

暗闇に閉ざされたコクピットで、美鈴は虚空へと震える手を伸ばす。

ゆらゆらと闇の中で何かを求め、そして何かを掴むように握りしめられた手……。

その腕が、力を失った。

「リス…ティ……」

もう体が動かない、声を出す事も出来ない。

美鈴は優しく包み込む闇へと、静かにその身を任せた。

27・心に灯す光

僕は、どれくらい気を失っていたのだろう。

ゆっくりと体を起こして、胸元のペンダントを確かめながら辺りを見回す。ブリッジ内の惨状に息を飲んだ。凄まじい衝撃波に、窓の強化ガラスが一枚残らず割れている。怪我もなく、船も沈没しなかったのが不思議なくらいだ。

「……ミウルフラウゼ」

まだぼんやりとしている頭を振ると、歯を食い縛って立ち上がった。

世界が暗闇に閉ざされてしまう。その絶望を吹き払う可能性は、まだ残されているんだ。握りしめたペンダントを、彼女の想いをヴィラノーヴァへと届けなければならない。

僕はふらつく足取りで船のブリッジを後にした。通路の壁をつたって歩き、階段の手摺りにしがみつくようにして階下へと降りる。目に映るのは格納デッキに踞っている、大破したブレイバーの姿。

マニピレーターが全壊している右腕はもう使えない。各部の内部機関は剥き出しで、装甲などこの状態では、少しの役にも立たないほどのダメージを受けている。

僕は傷だらけの機体に手を触れてそつと目を閉じた、ブレイバーに全てを託すしかない。ハッチが開いたままになっているブレイバーのコクピットへよじ登った。

ちらりとメインシートの後部座席へと目をやった後、美鈴さんが座っていたメインシートへと腰を下ろし、ベルトで体を固定する。

美鈴さんにブレイバーの整備を任されていた僕は、各機器の操作を全て熟知している。

起動スイッチを入れると、両腕に力を込めて操縦桿を引き起こす。起動時に行われる各部のチェックを強制的にキャンセルした。幸運な事にフライト・ユニットは生きている、まだ何とか飛べるだろう。

起動したブレイバーが唸りを上げる。操縦桿を握り、震えが収まらない機体を何とか励ますと、満身創痍のブレイバーが力なく立ち上がった。

ノイズでちらつくメインモニターを見つめ、フライト・ユニットへと点火する。

爪先を引きずるようにして格納庫からフライトデッキを滑空し、ブレイバーが暗雲に覆われた空へと飛び立つ。一度失速しかけて大波を被ったが、力強く羽ばたいたフライト・ユニットは、ブレイバーを大空へと飛翔させてくれた。

僕は食い入るようにメインモニターを睨み付ける、しかし画面には空と海しか映っていなかった。

セラフィムもエスプランゼも、ミネルバの機影さえも確認する事が出来ない。海上都市の周囲を、不気味な静寂が支配していた。

「そんな、美鈴さん……」

かすれた声が喉の奥から漏れ出す。

海上都市の尖塔から、黒い噴煙が上がっている事に気が付いた。

「……あ、あれは」

その時だった。

突如として、コクピット内に接近警報が響く。

僕はひび割れた唇をきつく噛んだ。

モニターへと映る一機の装甲兵は、間違いなくセラフィムだ。しかしミネルバの攻撃を受けたのか、右半身が大破して激しく噴煙を上げている。すでに失速しそうな痛々しい墮天使の姿。ブレイバーを捕捉して、真っ直ぐにこちらへと向かってくる。僕の心に湧き上がるのは、恐怖よりも同情と憐れみ。

「お前達は墮天使じゃない、未来を守るために造られたんだ。もういいだろう。お願いだ……ここを通してくれ」

残されている時間はもうあと僅かだ、僕は願うように小さくつぶやいた。

セラフィムの背後に見えている海上都市。尖塔の基部から広がり

つつある、目映い金色の光がこの星を包み込む時、世界を、人々を救う再生計画は灰燼に帰す。

僕はミルフラウゼと約束したんだ。美しくも、終焉と絶望をもたらす光を止めるために、何としても尖塔へと辿り着かねばならない。

震える指先で、ブレイバーが装備している火器のデータを表示させる。でも、そんな事は無意味だって分かっていた。

もう、ブレイバーに戦う力なんて残っていない。

…… たったひとつだけ残されているのは、左腕に残された大型の接近戦用ブレードだ。

美鈴さんを愛した彼が、美鈴さんが愛した彼が残した力だ。ブレイバーが左腕を振り下ろすと、シールドからその長大な刀身がスライドし、目映い白光を放ちながら振動を開始する。

操縦桿を両手で強く握りしめ、覚悟を決めた僕は大きく息を吸い込んで叫ぶ。

「聞こえているか？ ブレイバー、絶対に尖塔へ行くぞっ！」

フライトユニットが咆吼を上げる。

ブレイバーの加速に反応したセラフィムが呼応するように、残っている左腕で接近戦用ブレードを抜いた。

「うおおおおおおっ！」

モニターに映るセラフィムを睨み付ける、語る事など何もない。体の奥底からありつただけの力を使って声を絞り出し、獣のような雄叫びを上げた。この瞬間に命の灯火を激しく燃やす。回避する事も防御する事も考えていない、最初で最後に放つただ一度の斬撃にすべてを賭けた。

長大なブレードが、すれ違い様にセラフィムの機体を捉えた感触が操縦桿に伝わってくる。僕はその感覚を信じて、ブレイバーの左腕を思い切り振り抜いた。

同時に強い衝撃がブレイバーを襲い、コクピットの左部分が大きくひしゃげた。側面のモニターが粉々に弾け飛び、殴られるような

衝撃を受けた体を突き抜ける激痛に息が止まる。

次の瞬間、爆風で大きくブレイバーが揺れ、後方でセラフィムが爆砕した事が分かった。

「や、やった……」

かすれた呟きに血が混じっていた。僕はべつとりと血に濡れた操縦桿を強く握りしめ、震え出す体を叱咤して海上都市の尖塔を視界に捉える。

海上都市ヴィラノーヴァの尖塔は、もう目前まで迫っていた。

黒い噴煙を上げる尖塔の頭頂部、中央制御システムのコントロールルームが存在する場所の外壁に、大きな穴が空いている。おぼつかない手捌きで何とかブレイバーを操り、外壁の穴から尖塔へと侵入した。しかしまともに着陸させることが出来ず、前のめりになった機体の右側を擦り付けるようにして着陸する。

派手に床を削り、めり込むようにしてブレイバーが停止した。

軋みながら開くコクピットのハッチ、尖塔の内部へと降りた僕は声を失った。

僕の目の前で、機能を停止している二機の装甲兵。

白き女神ミネルバと、漆黒の破壊神エスペランゼの姿。

エスペランゼのビームランスがミネルバの左胸を貫き、ミネルバのマニピレーターがエスペランゼの頭部を握り潰していた。

「……美鈴さん」

僕はミネルバへと駆け寄りたいという衝動を、全神経を使ってねじ伏せた。真っ赤に染まった白衣を脱ぎ捨て、左の脇腹を押さえながら中央制御システムのコントロールルームへと向かう。

脇腹に感じる激痛に意識が遠くなる、視界が霞み足元がふらついて何度も転んだ。その度に歯を食い縛って立ち上がる。左足を引きずりながらコントロールルームへ入ると、ペンダントを握りしめ力を込めて銀の鎖を引き千切った。

コントロールパネルに手を付いて、震える指先でキーボードを操作する。

大きな機械音が耳に響いてくる、僕は苦勞して振り返った。床の中央からゆつくりと迫り上がってくるのは、両腕で抱えられそうな大きな円柱。先端の半球状をしている、透明なドームが左右に割れた。

「……あ、あれか」

冷たい汗が頬を伝い、絞り出す声が喉に詰まる。もう全身を使わねば息が出来ない。

膝から力が抜けていく、床をきつく踏みしめるように足を踏み出した。

僕には世界を守るなんて、そんな大それた事は出来ない。

人を正しい道へと導く、心清らかな聖人でもない。

でも……そんなちっぽけな存在の僕に今、たったひとつだけ出来る事。

それは人の心に、小さな光を灯す事。

小さな小さな「希望」という名の光を。

その小さな光がたくさん集まり、大きな大きな光となって、未来を明るく優しく照らしてくれるように。

両手で包み込むように守ってきた、ただひとつの願い。

僕は体を預けるように円柱へしがみつくと、ペンダントを中央の窪みへとセットする。まるでこの時を待っていたかのように、ペン

ダントはぴつたりと収まった。

その瞬間にドームが閉じ、円柱が次第に床へと沈み込んでゆく。同時に大きな警報が鳴り始めた、退避を促すアナウンスが無人の海上都市に哀しく響き渡っている。

「後は、後は頼んだよ……ミウルフラウゼ。この星に、君の想いを伝えてくれ」

……これで、僕の仕事はすべて終わった。

コントロールルームからのろのろと歩み出ると、稼働を停止したままの二体の戦神を見上げる。

「美鈴……さん」

かすれる僕の視界でミネルバのメインカメラが蒼く輝き、胸部装甲が強制排除されて弾け飛ぶ。

ミネルバの頭部が微かに動いて僕を映し……そしてメインカメラの灯が消えて、ミネルバは動かなくなつた。

僕は動く事を放棄したがる体を、無理矢理に引きずってミネルバへとよじ登り、祈るような気持ちでコクピットを覗き込んだ。

胸を鋭く刺し貫く激しい後悔。両腕を伸ばして、血まみれになつた美鈴さんの体を大切に、しっかりと抱き上げた。

こんなに華奢で、こんなに軽かつたんだ……。

美鈴さんを抱いて機体から滑り降り、振り返って白と黒の戦神を見つめる。

「ありがとう……ミネルバ。永遠の眠りを……エスペランゼ」

息切れと脇腹の痛みを堪えながら、僕は美鈴さんを抱いてプレイバーへと乗り込んだ。シートへ背を預け、脂汗が滲む額を袖で拭く。「美鈴さん。早くジュエル号へ帰りましょう……きつと、みんな待っていますよ」

震えが止まらない身体。寒い、とても寒い。感覚が次第に麻痺してきた体は、もう自分の物ではないようだ。乾いた血がこびり付いた手でパネルを操作し、起動スイッチを入れる。

ハッチが閉じて、ヒビだらけのメインモニターが外の様子を映し

出す。

しかし各機器のコントロールシステムが、フライト・ユニットを認識していない。

「こんな……時にっ……!」

あらゆる操作を試してみても、フライト・ユニットの表示は回復しないままだ。

「う……くっ!」

尖塔に襲い掛かる激震。

碎ける壁や、落下してくる巨大な鉄骨がメインモニターに映っている。海上都市の尖塔が、ついに崩壊を始めたのだ。

床が大きく傾き、姿勢を起こしたブレイバーが横滑りを起こす。僕はもはや応答しない背部のフライト・ユニットを切り離すと、ブレイバーの両肩と腰の両側に装備されている四基のアンカーを打ち出す。

一際大きな揺れが襲って来た。

床が抜けたのだろう、一瞬体が浮いた様な感覚。ブレイバーへと降りかかる大量の土砂と瓦礫、モニターの視界を奪う粉塵。響き渡るのは、海上都市が上げる断末魔の絶叫なのか。固く目を閉じた僕は傷の痛みに喘ぎながら、美鈴さんを守るように力を込めてしつかりとその体を抱いた――。

突如起こった、尖塔の大規模な崩落。すべてが、すべてが無に帰そうとしていた。

連なる研究棟の群れが、まるで脆い砂城のように崩れ去る。隆起と陥没を繰り返す、整備されていた道路。海上都市を形作る幾つもの土台が互いの繋がりを失い崩壊する。機能を停止している機人兵が、次々に地面の裂け目へと飲み込まれていった。

轟音と共に、世界を睥睨していたヴィラノーヴァの尖塔が崩れ落ち、海上都市が海中へと没していく。

吹き上がる巨大な水柱、そして大波。巻き起る巨大な渦は、すべ

てを巻き込んで海中へと奪い去る……。

ブレイバーは大量の瓦礫と粉塵に飲み込まれ、崩れゆく海上都市の残骸と共に深淵へと姿を消した。

ミュルフラウゼの想いは、少女の願いは届いたのだろうか……。
その時。

海上に湛えられた美しい黄金色の光が、勢い良く海面から暗い空へと吹き上がった。

大地を震撼させる轟音。

黄金色の光が刺し貫いた天空を覆う厚い雲が消え去り、海上に幾筋もの温かな光が降り注ぐ。

何かが、確かに海中で煌めいていた。

ゆっくりと姿を現したのは、大きな、大きな白色の環だ。

信じられないほど巨大な環と、その環を海中から支える幾本もの支柱が浮上してくる。

その環の中央部に姿を見せ始めた、巨大なドームの姿。

それは新たな海上都市……人々を守る巨大な都市の姿だ。

ミュルフラウゼの、少女の想いは届いた。

それは、人々が惑星再生計画を見守るための、新たなる大地の誕生だった――。

エピローグ

海上都市ヴィラノーヴァの心臓部に設置された、惑星再生システムは稼働した。プロジェクトは動き始め、この星はゆっくりと癒されていくのだろう。

しかし、未だ劇的な環境の好転など望めるわけではない。そうだが、危機的状況が去ったわけではなく、その状況が緩和されたただけという状態だ。

海上に姿を現した新たな都市は「ゆりかご」と呼ばれるようになり、惑星再生システムの根幹は「ヴィラノーヴァ」から「ゆりかご」へと受け継がれた。

存亡の危機を乗り越えた人間達は、居住コアを離れて「ゆりかご」への移住を始めた。

機能的に整備された美しい街の姿、優しい緑が心を和ませる。まるで理想郷——そんな夢のような場所だ。人々が落ち着くまでには、まだまだ時間が掛かることだろうが。民主的な方法で責任者が選出され、自治体ともいえる小さな生活集団も出来た。

醜い心を裁くために降臨した、エスプランゼという破壊神の姿は、人々の記憶に強く焼き付いているに違いない。そしてヴィラノーヴァと共に姿を消した、白き女神ミネルバの姿も。

誰もが……永遠に清廉潔白であり続けることは出来ない。

それでも、小さな優しさとささやかな思いやり、そんな温かい心で醜い感情を包み込むことが出来れば……。

それが、ミルフラウゼが胸に抱いた希望……彼女の想いだ。

時はすべてを流し去るように、悠久に流れゆく……。

淡々と過ぎゆく、人々の日常。

喜びに心を弾ませ、悲しみに唇を噛み。

そんな想いを繰り返しながら、人々はひたすらに幸せを願う。

過ぎゆく時間の中で、今日も暮らしていく。

あの激しい決戦から、三年の月日が流れていた――。

ジュエル号は軍船としての任を終え、今は再び運搬船として各居住コアからの移住者を、海上都市「ゆりかご」へと移送する仕事に就いている。

ジュエル号が進むのは、何処までも広がる茶色の大地。

そこに、優しい緑が芽吹く日は来るのだろうか……。

「おう、リステイ。一杯やらねえか？」

「まったく、昼間からお酒ですか？ 飲み過ぎたら、またテロツプ船医に怒られますよ？」

「けっ、つまらねえ事を言うんじゃないよ、馬鹿野郎」

太い眉を吊り上げたガデイさんが威嚇するように歯をむき出した。僕は甲板の上で膝を抱えたまま、ガデイさんが差し出すグラスを受け取る。グラスを揺ると琥珀色の液体に浮かぶ大きな氷が、からりと涼しげな音を立てた。

「ありがたく味わえ。エクスカリバーだ、こいつはいい酒だぜ」

ガデイさんは僕の隣にどっかりと腰を下ろし、グラスの酒を飲み干して満足げに息をついた。照りつける太陽を一睨みすると、表情を和らげてふっと笑みを浮かべる。

「いい風だが、やっぱり暑いな。それでも、以前のように肌を焦が

すような痛みは感じねえ……」

ガデイさんは強い光を湛える瞳で、流れる景色を満足げに眺めている。

「どうだ、リステイ。お前が信じた世界はよ？」

ガデイさんの問い掛けに、僕はグラスの中で虹色に輝く氷を見つめたまま押し黙った。

「……そうか。何も変わらねえように見えるか。ま、無理もねえなあ」

ガデイさんは、大きな手をぽんと僕の頭に置いた。

「人間なんて、所詮そんなものかも知れねえがな」

——そう、今までと何も変わらない。

盗賊は出沒するし、この先また戦争が起こるかもしれない。

冷たいグラス、唇に触れる氷。ひと口含むと、強い酒が喉にしみた。そして僕の記憶は、未だにこの世界のように相変わらず曖昧で、とりとめがつかない。

ガデイさんは甲板へと置いたグラスへ、ゆっくりと酒を満たしていく。

「だがなありステイ。あの時、俺は思ったぜ。あの黒いヤツには酷く罵られたが、人は温かい心を絶対に無くしたりしねえってな」

「……え？」

「フレグランス・ウイスラーも、それを信じたかったんだよ。絶望に押し潰されちまった自分の代わりに、お前に証明して欲しかったのさ」

ガデイさんは、静かに杯を重ねる。

「お前もそれを確かめたんだろう？ まあいい、時間はあるしな、ゆっくりと考える……。俺達は、こうして生きているんだからよ」

グラスの酒を飲み干し、ガデイさんは「がはは……」と、豪快に笑う。

僕のコートを、それまでは感じる事が出来なかった、柔らかで優しい風が撫でていく。

考えがまとまらず、抱えた膝に力を込めた僕の耳に大きな泣き声が聞こえてきた。

まだ生まれたばかり、幼い『飛鈴』（フェイリン）の泣き声。

「将来は間違いなく美人になるよ」と、パメラおばさんから太鼓判を押された、僕と美鈴さんの娘だ。

大きな碧い瞳、そして力強い泣き声。

『ワタシハココニイル』

小さな小さな命が、広い広い世界で一生懸命に自分の存在を主張している。

人は命を繋ぎ……そして温かな心を、想いを伝えていく。

無限にも広がる、その優しくて力強い大切な絆を僕は信じたい。

「ええと……飛鈴、何で泣くの？ おむつなの？ お腹が空いたの？ リステイ、手伝ってよ！」

美鈴さんの情けない声。装甲兵の操縦と、同じ訳にはいかないようだ。

「今行くよ！」

僕はすぐに返事をする。とグラスを置いて立ち上がり、ガディさんに深く一礼する。

駆け出そうとした、その瞬間だった。

『だいじょうぶ……だよ』

突然、僕のすぐ側を駆け抜けた一陣の風の中、微かに響いたのは涼やかな少女の笑い声。

「……ミユルフラウゼ！？」

僕は思わず声を追う。

振り返った僕の視界に映ったのは、甲板に駐機されているブレイバー。

一瞬、その肩に微笑みながら腰掛けている、ミユルフラウゼの姿

が見えたような気がした。

そして陽光を弾き真紅に輝くプレイヤーの姿は、とても誇らしげに見えた。

エピローグ（後書き）

白き女神の物語。

お付き合い下さった方々に、お礼を申し上げます。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9471/>

ミネルバの翼

2011年1月14日22時41分発行